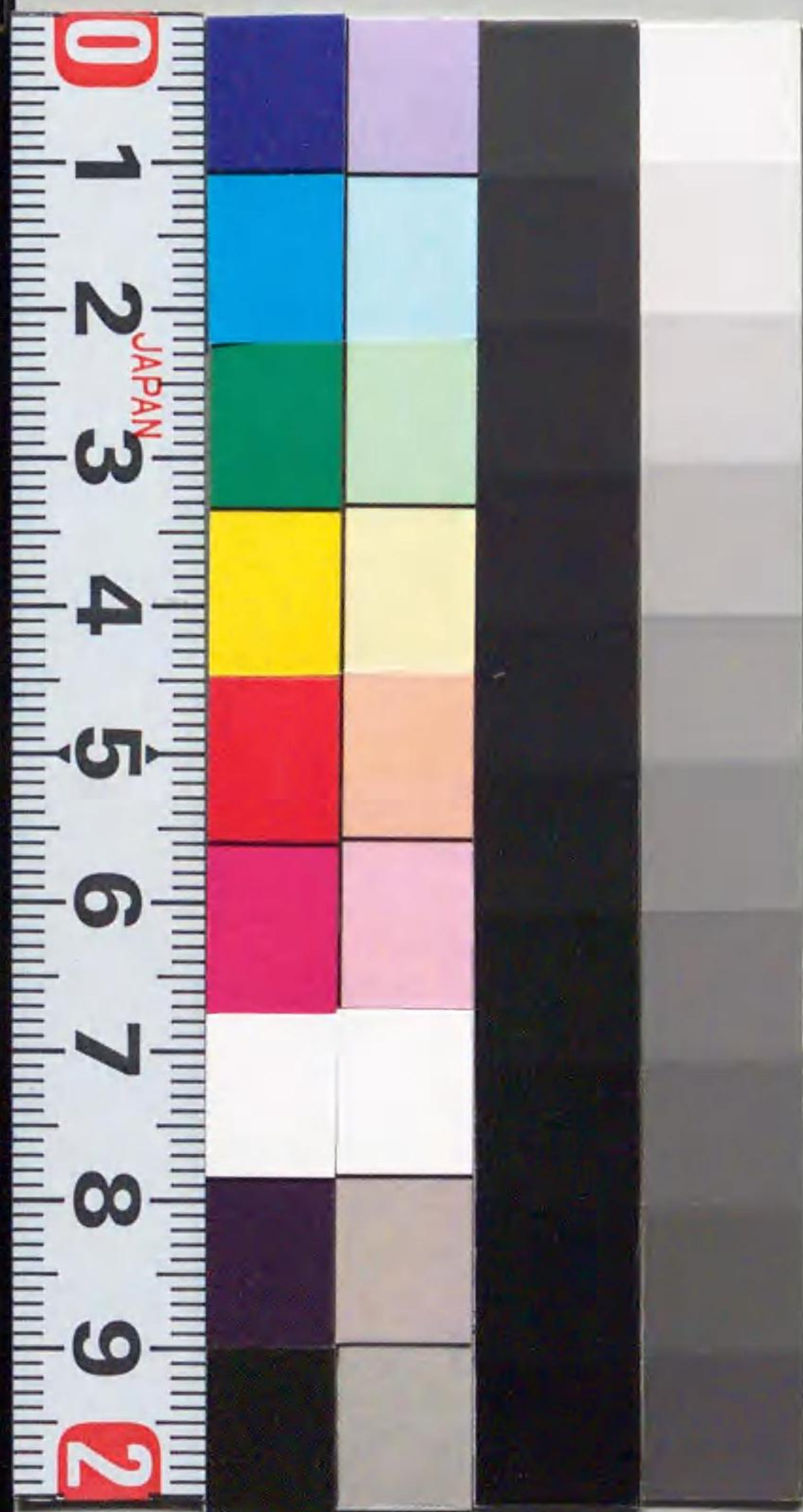


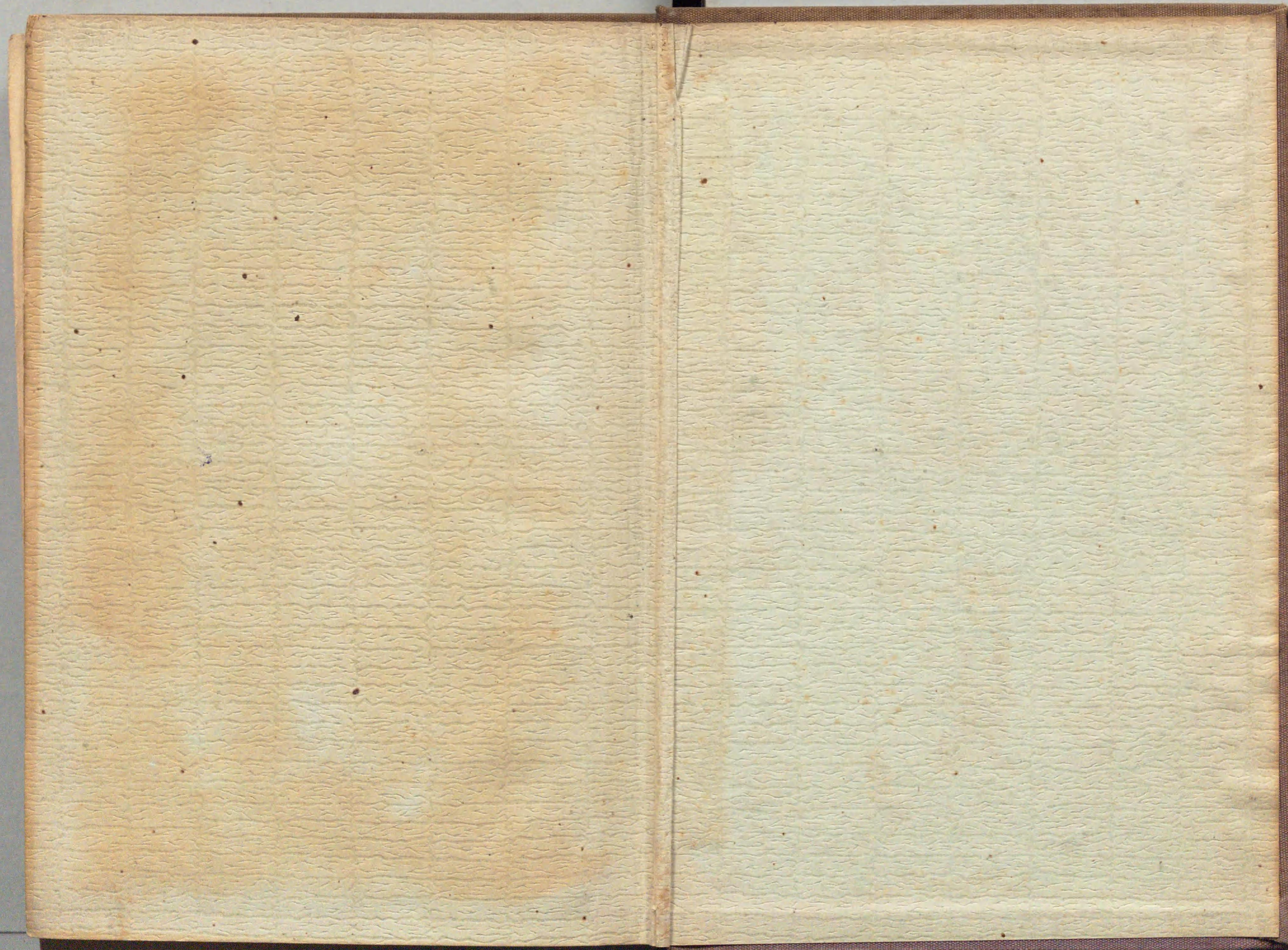
606
805

606-295



1200501908217





能
謠
語
彙



觀世流改訂本刊行會編纂



606-295

緒言

謡曲の文辭に關する解釋は謡抄、拾葉抄を始めとして、古來その書尠しとせず。中に就き代表著作としては、明治に於て大和田建樹氏の謡曲評釋あり、大正に於て丸岡桂氏の觀世流改訂本の辭解あり。而して昭和となりては、現に佐成謙太郎氏の謡曲大觀の大著完成せられ、詞章の解釋は更に之に加ふるの要なきに至れり。然るに能樂謡曲の術語を解説せるものは、各其の部分的の編著なきにあらずと雖も、之を綜合して辭典の體制に輯録したるものは殆ど之れあらず。僅に某辭典の一部に術語部を挿みたれども、その粗策杜撰の甚だしき、以て一も依據とするに足るもの無し。依つて本書は、能樂、謡曲、小書、謡方、節附、舞、型、拍子、囃子、面、裝束、作物、小道具、舞臺、狂言等、凡そ能謡に關する専門的用語を遍く蒐輯して解説を施せり。但、斯道の範圍は狭きが如くにして廣く且つ深し、各部分に互りて細大漏らすことなきは、實に容易の業にあらず。今剗成りて通覽するに及び、尙遺漏せるもの二三ならず。再版に於て之が修補を加ふべし。本書の遺漏不備に氣づかれたる讀者諸君、幸に示教を吝みたまふ勿れ。

本書は予之を起稿し、山崎樂堂氏の加刪を経たるものなり。時恰も梅若流謡本の刊行に際し、その編纂の中心たる同氏が、繁劇中、本書の爲に多大の勞を割與せられたることは、茲に特記して深く感謝の意を表す。

昭和六年八月

觀世流改訂本刊行會編輯部

安藤東庵

凡例

- 一、謡曲の曲目は各流の現行曲を擧ぐるに止め、廢曲に及ばず。
- 一、謡曲及び小書の下には略稱を以て流名を標示せり。
 - (觀)は觀世流、(寶)は寶生流、(春)は金春流、(剛)は金剛流、(喜)は喜多流、(梅)は梅若流、(六流)は以上六流共にあることを示す。
 - 一、狂言の下にも略稱を以て狂言方の流名を標示せり。
 - (大)は大藏流、(泉)は和泉流、(鷺)は鷺流、(三流)は以上の三流共にあることを示す。
 - 一、型及び節附の解説は主として觀世流に依りたれば、併せて梅若流に引當て得べきもの多し。而して其他の流儀に關するものは各其の流名を特記せり。
 - 一、語辭は歴史的の字音假名遣により、五十音順に排列せり。

能 謡 語 彙

あ「ア」アタリ節の符號。謡本にはゴマ節の右端に「ア」の符號を附記せり。

あうむこまち (鶯鷓小町) (謡曲) 三番目又四番目。シテ小野小町、ワキ敎使。老後關寺邊にさすらひゐたる小町、内裏より御歌を賜はり、鶯鷓返しの返歌を詠みたることを作る。

あうむはいのみ (鶯鷓盃之舞) 錦木の小書 (觀)「嬉しやな、今宵鶯鷓の盃の」とシテ扇を開き、ツレに酌をすれば、ツレも亦返盃の心にてシテに酌をする型などあり。

あかがしら (赤頭) 毛を眞紅に染めたる頭髮に

して、猩々以外はすべて背面部下方に一握の白の差毛を交ふ。大飛出、小飛出、黒髭、小癩見、大癩見、獅子口又はシカミの面を着くる神體、龍神、鬼畜類のシテ或はツレに用ふ。前シテには用ふること無し。

あかがしら (赤頭) 道成寺の小書 (觀、剛) 後シテ赤頭 (差毛無し) を着く。此時緋の長袴を穿くことあり。

あかがしらさんだんのまひ (赤頭三段之舞) 海人の小書 (觀) 後シテ、面橋姫、赤頭、龍立、後大口、唐織壺折にて出づ。

あかがり (餅、戰) (狂言) 茶湯の會に行く殿、途中大水の出でたるに會ひ、冠者に負はれて渡らんとするに、冠者戰 (あかぎれ) ありて水中にはいれずとて應ぜず。殿は冠者に歌詠まば我れ負はんとて歌を詠ませ、冠者を負ひて深みに至り水中に投げ込む。(三流)

あかだいじん (赤大臣) 一般本協能に出づるワキツレの着する狩衣、赤地なるにより、俗に

此のワキヅレを赤大臣と稱す。

あきくさあふぎ〔秋草扇〕（小道具）觀世流にては、色無しの秋草扇は深井の面を着くる女物、色入りのものは雲林院、小鹽に用ひ、他流にては狂女物に用ふ。

あくじよう〔悪尉〕（面）髭の植毛ありて、眼は圓く大きくして、金泥を施したる口の恐ろしき面。之に大悪尉、小悪尉、鼻瘤悪尉、鷲鼻悪尉、茗荷悪尉、重荷悪尉、冠形悪尉、癩見悪尉等の數種あり。

あくたがは〔芥川〕（狂言）下京の者、芥川の天神へ參る途次、上京の者と道連になり、口慰して行く。下京の者、上京の者の跛なるを見て「津の國の難波入江にあらねどもあしのもところをかしけれ」と詠む。やがて芥川に着き、下京の者が片手にて拜むを見て「芥川ちりかき流す手を見ればあしのもとより尙ぞをかしき」と返歌す。下京の者怒れば、上京の者生薑ではならぬと突き込む。（大、泉）一名

「脛薑。」

あくたらう〔悪太郎〕（狂言）悪太郎、伯父に酒を強請し、泥酔して歸り途に寝る。伯父蹤をつけ來り、坊主にし、南無阿彌陀佛と名付けて去る。太郎目覺めて佛の告と合點す。折柄僧念佛しながら來る。太郎我名を呼ばれしものと心得、返事す。僧怪しめば太郎醉中の出來事を語る。遂に僧の教により其の弟子となり、諸國修行に連れ立つ。（三流）

あくばう〔悪坊〕（狂言）悪坊、途中に遇ひたる僧を強ひて同道し、僧を脅迫す。かくて悪坊、僧に腰を打たせて睡る。僧は悪坊の長刀を取りて傘を置き、刀を取りて助老（腮杖）を置き、小袖を取りて衣を被せて去る。悪坊目覺めて、釋迦か達磨の仕業ならんとて發心す。（三流）

あげ〔上ゲ〕（舞）舞の終り、上げ扇をして將にワカなどを謡ひ出さんとする頃合。なほ、イロエ、カケリの類にてもその終る際を「上ゲ」

と云ふ。

あげ〔上ゲ〕（謡）クセの上げ、即ち上ゲ端の略**あげ**〔上ゲ〕（囃）連続したる囃子手配に段落を附けんとする一手。大鼓にては高刻ミ、打上など。小鼓にては結び、打上など、太鼓にては刻上ゲ、打上などの類。

あげあふぎ〔上ゲ扇〕（型）廣げたる扇を目の前へ出す型。之を出すには構へたる手を廣げて横より大きく上げて目の前まで下す。それより其儘扇を上へ上げながら右へ圓を描く様にして下ぐ。

あげうた〔上歌〕謡曲組織の一部の稱。下歌に對し、上音を基調として謡ふ歌の意にて「上歌」と云ふ。多く下歌に續いてあり。中には下歌を缺き、サシ謡に續くものあり。拍子に合せて謡ふを定則とす。

あげは〔上ゲ端、上ゲ羽〕クセの中程に挿入せられたる役謡にして、常に必ず上音の調子なり。一般に上ゲ端はクセの中に唯一箇所のみ

あるものなれども、長文のクセには二箇所にあるものあり。此の如きクセを「二段グセ」と稱す。又クセ中に上ゲ端の無きものもあり。之を「片グセ」と稱す。

あげまく〔揚幕〕鏡ノ間より橋懸に出でんとする境目に垂れたる幕。諸役の出場する時、此の幕を裾につけたる竿にて、上へ掲げ上ぐるによつて揚幕と云ふ。又昔時建築的舞臺の無かりし能樂の初期、樂屋を幕にて圍み其の幕の一部を切り開きて出場せるにより切幕の名稱もあり。即ち此の揚幕は元來昔時の切幕の名残たるものなり。揚幕の形式には種々あれども、定りは五布を以て組合せ、五布に白、黒、赤、黄、青の五色に彩るものと、赤、青、赤、白又は赤、紺の二色に彩るものと、赤一色のものとあり、幕の掛綱は總共に眞紅にて、幕の乳を通し、幕口の兩側柱に附けたる環に結びつけ、それ〴〵其の端を垂る。

あこぎ〔阿漕〕（謡曲）四番目。シテ阿漕の海人

ワキ日向の者。日向の者伊勢阿漕が浦にて殺生禁斷の所に網を引きたる科により海に沈められし海人の靈に逢ふことを作る。(觀、寶、剛、喜、梅)

あこぶじよう〔阿古父尉、阿瘤尉〕(面) 觀世流にては多く前シテに用ふる老翁面にて、品位の賤しからざるものなり。木賊、戀重荷、三笑、昭君、天鼓、寢覺、大社、遊行柳、雲林院、小鹽、唐船、張良の前シテに用ひ、寶生流にては唐船、昭君、綾鼓等の前シテに用ふる。下懸にては替の外、常に多く用ひず。

あさくらじよう〔朝倉尉〕(面) 阿古父尉に類して、それよりも幽玄なる趣あり。觀世流にては、白樂天、竹生島、志賀、白髭、江島、九世戸、和布刈の脇能物、兼平、頼政、實盛、忠度、八島、通盛の修羅物、其他鶴飼、融、阿漕、女郎花、善知鳥、龍虎、碇潜、項羽、野守、絃上、飛雲、國栖等の前シテに用ふる。他各流にても、修羅物の前シテに用ふれども、

寶生流にては脇能物に用ひず。喜多流にては替として脇能物に用ふることあり。

あさひな〔朝比奈〕(狂言) 朝比奈、地獄に到り、閻魔に責めらるれども更に動ぜず。閻魔怪みて何人かと問へば、朝比奈三郎義秀と答ふ。閻魔の所望により和田軍の様子を物語り、敵を引寄せ押廻したりとて閻魔を捕へ引廻す。(三流)

あさふ〔麻生〕(狂言) 滯京中の大名、元旦出仕のため塗り直しにやり置きたる烏帽子を下六に取りにやる。藤六に髪を結はせて待ち居れども久しく歸らず。更に藤六を迎ひに出す。兩人道にて出逢ひしも、注連節門松立ちたる爲、宿見つからず。「信濃の國の住人、麻生殿の御内に、藤六と下六と、烏帽子折に参りて、囃物をして行く。實にもさあり、やよ實にもさうよの」と囃しながら宿を探す。一名「烏帽子折」。(大、泉)

あさみ〔淺井〕(面) 深井に對する名稱にて、深

井よりは品格稍輕し。狂女物に用ふる女面。寶生流にのみあり。

あしかり〔蘆刈〕(謡曲) 四番目。シテ日下左衛門、ツレ其の舊妻、ワキ妻の従者。日下左衛門零落して芦賣となりたるが、彼を尋ね下りたる舊妻に廻り逢ひ、再び世に出づることを作る。(六流)

あしのや〔蘆の屋〕(作物) 藁屋の三方を穂附の葦にて圍ひ、正面に同じく葦をつけたる竹の扉を附く。蘆刈に用ふる。

あしびやうし〔足拍子〕(型) 足にて舞臺の床板を踏むこと。其の種類様々あり。又その踏むに、意味を有するものと、然らざるものとあり。普通一つ拍子、二つ拍子、四つ拍子など數を以て呼ぶども又特稱のものあり。常に多く用ひらるゝ特稱のものは据拍子(打切前に踏む類)、留拍子(能の終りに踏むもの)、乗込拍子(乗込む時に踏むもの)、刻拍子(六つ踏みたる後に七つ踏み返す類)、踏切拍子(三つ

踏みて、トン／＼トトンと踏むもの)等。

あしらひ〔會釋、アシラヒ〕(型) シテがワキへ、或はワキがシテへ體を向け、甲の役、乙の役に氣分を寄する如き意味を表はすことを云ふ。

あしらひ〔アシラヒ〕(囃) アシラヒに三種あり。其一は拍子に合はざる謡へ、大小鼓又は大小太鼓の伴奏する場合、二は大小鼓又は大小太鼓の囃子へ、拍子合はせず笛の伴奏する場合。三は大小鼓又は笛がシテワキ等諸役の進退に應じて奏する場合、例へばシテの出を大小鼓にて迎ふるアシラヒ出、又シテの入を大小鼓にて送るアシラヒ入、ワキの出を迎ふるアシラヒ笛、シテの入りを送るアシラヒ送等の如し。尙シテの物着の間を大小鼓にて囃しつなぐ物着アシラヒの如きものもあり。

あしらひり〔會釋入〕(囃) シテの中入退場を送る大小鼓のアシラヒ囃子を云ふ。

あしらひこみ〔會釋込〕(囃) 「アシラヒ入」の別名。

あしらひだし〔會釋出〕（囃）前シテ（稀に後シテ又は他役）の出場に際し、大小鼓にて奏するアシラヒ囃子を云ふ。

あしらひつづみ〔會釋鼓〕（囃）拍子に合はざる謡へ、大小鼓又は大小太鼓の伴奏すること。

あしらふ〔會釋〕（型）「アシラヒ」の説明に於ける型をなすこと、及びアシラヒの囃子を奏することを云ふ。

あしをかける〔足を掛ケル〕（型）一方の足を他の足の先へ斜に出すこと。其の形恰もイの字の如し、左足をカケル場合は「左足カケ」、右足をカケル場合は「右足カケ」といふ。左足をカケたる時は右足の先を外へ振り向けて右足より出で、右足をカケたる時は左足の先を外へ振り向けて左足より出づ。又カケル程度に多少あり、僅かばかりカケルを「浅クカケル」多くカケルを「深クカケル」と云ふ。

あすかかは〔飛鳥川〕（謡曲）四番目。シテ母、ツレ早少女、子方友若、ワキ京の者。母と行

き別れて迷ひ居たる幼児友若、旅人に伴はれて飛鳥川に來り、物狂となりゐたる母に廻り逢ふ。（剛、喜）

あたか〔安宅〕（謡曲）四番目。シテ辨慶。ツレ義經郎等、子方義經、ワキ富樫某、狂言能力、太刀持。義經奥州に落つる途次、辨慶の計らひにより。南都東大寺建立勸進の山伏と詐りて安宅の關を過ぐることを作る。（六流）

あたごくうや〔愛宕空也〕（謡曲）五番目。シテ龍神、ワキ空也上人。空也上人、愛宕山にて龍神の奇特に逢ふことを作る。（春）

あだちがはら〔安達原〕（謡曲）五番目。シテ鬼女、ワキ行者祐慶、ワキツレ同行山伏。山伏、安達原の黒塚にて賤の家に宿り、主の鬼女なることを知りて逃れ出でたるが、途に鬼女の追ひ來るに逢ひ、之を祈り伏す。（六流）觀世流以外には「黒塚」と稱す。

あたり〔當り〕（拍子）拍子の取り方を云ふ。拍子當りの意。

あたり〔當り〕（節）謡本にはアタリの頭假名「ア」をゴマ節に添へて標示す。「當り」は突當るが如く一種微細の綾を謡ふ節なり。

あたりおち〔當り落ち〕（節）「あたり下げ」に同じ。

あたりおとし〔當り落シ〕（節）「あたり下げ」に同じ。

あたりさげ〔當り下げ〕（節）當りて落すの意。剛吟に於ては中音より下ノ中に落す。此の場合先づ當り下げの節の前字を少しく突き上げて謡ひ、其儘當り下げの附きたる字に移り、その生ミ字を下ノ中より稍低き所まで落とし、次の字より下ノ中に取りて謡ふを法とす。又剛吟の當り下げは其の二字又は三字前を小節に謡ふを通例とす。柔吟に於ては當り下げの前字を稍突き込む如く謡ひ、其儘當り下げの字に移り、其の生ミ字より聊か音調を變へて下ぐ。而して次のウキの附きたる字にて中音に復するものとす。柔吟にても當り下

げの二字前を小節に謡ふこと多し。又柔吟の當り下げは聊か音調を變へて下ぐるにより「半クヅシ」の稱あり。

あたるやのま〔當ルヤの間〕「やのま」を見よ。

あたるやはのま〔當ルヤヲハの間〕「やはのま」を見よ。

あついた〔厚板〕（裝束）厚き織物の意。織物の名より裝束の名に轉用したるもの。經は練絲緯は生絲にて紋柄模様を織り出したるもの。其の色合、模様によりて種々の名稱あり、又其の用途を異にす。
白厚板——厚板の白無垢のもの。翁、大原御幸の法皇等の着付に用ふ。
無地厚板——模様も友絲も一色に織りたる厚板。老松、白髭等の後シテの着付に用ふ。
色無厚板——赤色の混ぜざる模様ある厚板。小袖會我、善知鳥の母など若からざる女の上着に用ふ。
段厚板——地色も模様も或る幅毎に變りたる

段織の厚板。大飛出、小飛出、黒髭、大癩見の面を着くる神體、龍神、天狗、鬼畜類の後シテ、修羅物の後シテ等の着付に用ふ。
 色無段厚板——赤色の混ぜざる段厚板。高砂、嵐山等のツレ姥、鉢木、熊坂等の後シテ、安宅、蘆刈等のシテなどの着付に用ふ。
 無地段厚板——色は無地にして織方に段ある厚板。白髭、白樂天等の後シテ、老松、養老等の前ツレ男の着付に用ふ。
 紅白段厚板——紅白の横段ある厚板。高砂、養老等の脇能神體の後シテの着付に用ふ。
 小格子厚板——薄き茶色の地に濃き茶の格子縞のある如き厚板。高砂、老松等脇能の前シテ、遊行柳、小鹽、雲林院等の前シテの着付に用ふ。
 小格子目引厚板——朝倉尉若くは三光尉の面を着くる修羅物の前シテ、融、鶺鴒、女郎花等の前シテ尉の着付に用ふ。
 中格子厚板——小格子より格子の稍あらしき厚

板。安宅のツレ山伏等の着付に用ふ。
 大格子厚板——格子の最も大にして強く見ゆる厚板。天狗物の前シテ、安宅のシテ、其他山伏姿の脇などの着付に用ふ。
あついたからおり〔厚板唐織〕〔装束〕厚板の地質へ唐織の如く紋柄模様を浮織にし、兩者を折衷したるもの。望月の獅子の被きて出づるもの、山姥の後などに用ふることあり。之にも段厚板唐織、色無段厚板唐織などあり。
あづさ〔梓〕〔囃〕葵上のツレ巫女の「梓」の謡に先き立ち、大小鼓にて打つ、ノットに似たる囃子事。
あづさので〔梓之出〕葵上の小書（觀、實、剛喜）シテ一ノ松にて一聲二ノ句を謡ひて後、次第以下上歌までを除き、直に舞臺に入り、常座にて「梓の弓の音はいづくぞ」と謡ふ。以下概ね常の如し。但し流儀により差異あり。又砧の小書（觀、剛）後の出端短く、其の打出しより直ぐ出で、三ノ松まで斜に出

で、梓の音を聞く心持あり。面瘦女、白縫箔、腰巻に水衣を着す。

あつもり〔敦盛〕〔謡曲〕二番目。シテ敦盛の靈（前は草刈男）、ツレ草刈男。ワキ蓮生法師、蓮生法師、曾て己が討ち取りたる敦盛の靈に逢ふことを作る。（觀、實、剛、喜、梅）
あつもり〔敦盛〕（面）觀世流にのみあり。敦盛、生田敦盛の外、知章、經政にも用ふ。
あつもりあふぎ〔敦盛扇〕觀世流にて敦盛、生田敦盛、知章、經政に用ふる修羅扇の一種、黒骨にて、両面共に貝盡しの中に日の出の繪あり。
あてぶし〔當テ節〕寶生流特有の節。物に當てる如く謡ふ。他流にも似たるはあれど、此流の如く確然と強く此節を扱ふことなし。
あど〔アド〕狂言に於けるシテの相手役。狂言にても能がりの曲にはワキとも云ふ。
あとぎ〔後座、跡座〕舞臺の囃子方座席より後方へ約一間半の板張部分を云ふ。板の張り方

は舞臺部の板の張り方と直角の方向になり居り、舞臺に對して横に張れるを以て、又「横板」の稱あり。
あはしがき〔合柿〕〔狂言〕アド四人を連れて、途中に遇ひたる宇治の柿賣にからかふことを作る。（三流）
あはせがしら〔合頭〕〔囃〕「あひ頭」に同じ。
あはたぐち〔栗田口〕〔狂言〕主命にて栗田口を買ひに都に上りたる冠者、栗田口屋を忘れ、栗田口買はうと呼び歩く。すり、出で來り自ら栗田口と名のりて欺くことを作る。（三流）
あはぢ〔淡路〕〔謡曲〕脇能。シテ伊弉諾尊、前ツレ男、ワキ朝臣。淡路の神徳を説きたるもの。（觀、春、剛）
あはをとこ〔淡男、栗男〕（面）平太を瘦男にしたるが如き面。觀世にては鶴、錦木、船橋、松虫、項羽、舟辨慶、寶生にては阿漕、善知鳥の後に用ふ。
あひ〔間〕「間狂言」の略。其項を見よ。

あひあひばかま〔相合袴〕〔狂言〕鞞、仲人と同道して鞞入するに一着の袴にて更る／＼出づ。舅、兩人一時に出てんことを求むるにより一人の袴を二人にて穿く。鞞の恥は舅の恥とて舅も亦冠者と一人の袴を穿き、四人相對して酒宴となり二人づゝ連舞をまふ。(三流)大藏流にては「二人袴」。

あひあひゑぼし〔相合烏帽子〕〔狂言〕丹波の百姓は竹を、丹後の百姓は松を上納す。褒美は二人の中へ烏帽子一つ下さる。一の烏帽子を二人して着け、祝言を諺ふ。(鶯)

あひがしら〔合頭〕〔囃〕大小の二鼓が共に「ハア、イヤ」と打つ頭を合頭と云ふ。諺出は「頭に當テル」と「頭ヲ聞ク」との二様あり。又頭の前に來る手には打上其他種々あり。

あひかた〔合方〕諺の拍子ある部分に大小鼓又は太鼓も加はりて拍子に合せ囃すこと。又各囃子そのもの個々の事をも、時に「ノリ」を合方と呼ぶもあり。

あひきやうげん〔間狂言〕能一曲の演奏にシテ、ワキ、ツレ、子方等の以外の役者として狂言方の加はるものあり、之を間狂言又は單に間と稱す。而して曲の性質により間狂言の種類を異にす。左の如し。

口開間——一曲の開演に方り、まづ間狂言役のセリフを以て始むるものを云ふ。
アシラヒ間——一曲の最初或は途中にワキ又はシテなど、應對し、又はシテ、ツレ、ワキ等の諸役に從屬して助演し、若くは前後場の中間に二人以上の狂言役出で、特殊の仕草をなすものなどを云ふ。

語間〔居語〕——前後二場の中間に繋ぎとしてワキに對し單獨の語りをなすものを云ふ。その語りに著座にてすると立ちながらするとの二種あれど、一般に語間とは居語のものを云ふ。
シヤベリ間〔立語〕——語間の一種、立ちながら語るものを云ふ。

末社間——神能物などの中入の間として末社來序(稀には缺くもあり)の囃子にて末社の神又はそれに類似の者出で、立ち乍ら一種の語りをなし、又は舞など舞ふものを云ふ。

早打間——前場が早鼓中入となり、間が早打役若くはそれと類似の役柄にて引續き早鼓にて出場するものを云ふ。(早鼓無くして出場するものも二三あり)、又早打役ならずとも早鼓にて出場する間狂言の多くを早打間と汎稱することあり。

習間〔一役間〕——間狂言なれどもシテ、ワキ乃至ツレ等に匹敵すべき重任を有し、又は役柄自體重き習を有するものを云ふ。安宅の間(剛力)道成寺の間(能力)舟辨慶の間(船頭)等の如し。又中入間にして特に習間たるものに朝長の間(宿長四人)春日龍神の間(社人)石橋の間(化人)の如きもあり。
替間——間狂言の通常の演式又は役柄を變へ、特殊なる間狂言をなすものを云ふ。竹生

島、江島、白髭の道者、賀茂の御田、輪藏の鉢叩、養老の薬水、嵐山の猿鞞、八島の奈須、半部の立花、天鼓の樂器、夜討曾我の大藤内、橋辨慶の弦師等の如し。又中入間にあらざる安宅の貝立、舟辨慶の名所教の如きも替間なり。

あひまひ〔相舞、合舞〕二人一緒に同じ舞を舞ふを云ふ。小袖曾我、二人靜にはシテとツレ鶴龜、嵐山、玉井にはツレ二人の相舞あり。

あふぎ〔扇〕能に使用する扇は大別して常の扇、中啓、團扇の三種とす。常の扇には諺扇と舞扇とあり。中啓は親骨の中途より外方へ廣がり、その疊みたるときの形は地紙の部分が銀杏葉の如くなるものにて、能に最も多く使用せらる。其の種類細別すれば殆ど無數なり。各其項参照。

あふぎさかにもつ〔扇逆ニ持ツ〕(型)扇折返し、又撥ネ扇の次にする型。扇折返せば右へ出ながら折返したる扇を伏せ、直に右手を出

して扇を受け、受くれば左手を離し、右手にて扇を受けたるまゝ七分位までつぼめながら更に伏せて逆に持つ。

あふぎをりかへす〔扇折り返す〕(型)普通撥ネ扇の次に續く型。撥ネ扇をなし終れば、體を正面へ直しながら扇を正面へ移し、左右左右と三足引き、同時に今迄上に向き居たる地紙を手の上へ伏す、即ち折返すなり。

あふひのうへ〔葵上〕(謡曲)五番目。シテ六條御息所生靈、ツレ巫女、ワキ横川小聖、ツレ大臣。横川の小聖、光源氏の北の方葵上に憑きたる六條御息所の生靈を祈り伏す。(六流)

あふみきんな〔近江女〕(面)面工兒玉近江の創めたる型による美しき女面にして、増の一種と見るべきも常の増よりは稍若くして品格聊か劣る。觀世流にては紅葉狩、殺生石、海人の前、富士太鼓、雲雀山、梅枝、鳥追舟等に用ひ、寶生流にては黒塚、海人等に用ふ。下懸に無し。

あま〔海士、海人〕(謡曲)五番目。シテ蟹女の靈(後は龍女)、子方房前大臣、ワキ大臣從者ワキツレ同。藤原房前、其の生母が志度の浦の蟹人なることを知り、讃岐に下りて追善をなさんとするに、蟹の靈現れ、唐土より贈り來れる寶珠の龍宮に取られしを、命を捨て、奪ひ返したることを物語る。房前その跡を弔ひ志度寺を建て、供養す。(六流)

あまだれびやうし〔雨垂拍子〕拍子に緩急を附けずして、拍子と拍子との間隔寸法を齊一に取ること。主として謡の地拍子規矩を測定する場合に用ふ。

あまよのでん〔雨夜之傳〕通小町の小書。ツレの「嬉しの御僧の弔やな」を聞きてシテは幕内にて「いやかなふまじ……」と謡ひ、以下掛合を幕内にて謡ふ。「包めど我も……」と幕より出で、雨中を通ふ心の型あり。又文句の省略せらるゝ所もあり。

あみのだん〔網之段〕櫻川の「あたら櫻の」よ

り「わが櫻子ぞ戀しき」までの特稱。

あもりのまひ〔阿母利之舞〕室君の小書。(觀)

あやかし〔怪士〕(面)妖氣を表はせる男面。襦袢潜、錦木等の後シテに用ふ。又三日月、淡男、鷹などの幽靈面の總稱にも云ふ。

あやのつづみ〔綾鼓〕(謡曲)四番目。シテ庭掃

の老人(後は其幽靈)ツレ女御、ワキ臣下。女御に思を懸けたる下人、桂の池の桂木に懸けたる綾の鼓を打たば御姿を見せ給ふべしと聞き、鳴らぬ鼓と知らずして打ち詫び、遂に桂の池に身を投げて死す。後幽靈となりて女御に恨を述ぶ。(寶、剛)

あゆみのあしらひ〔アユミのアシラヒ〕(囃)シテ等の橋懸より舞臺へ這入る間の歩行に對して大小鼓の打つアシラヒ囃子を云ふ。又之を「アシラヒ入」とも略して「アユミ」とも云ふ。脇能の眞之一聲及び二ノ句を終り、次のサシを謡ひ出す間の如き其の主なる一例なり。

あゆのだん〔鮎之段〕國栖の「その如くこの君も」より「頼もしく思し召されよ」までの一節の特稱。

あらしまで〔アラシ窓〕「奉行窓」の一名。

あらしやま〔嵐山〕(謡曲)脇能。シテ藏王權現(前は其化身)ツレ木守神(前は其化身)、後ツレ勝手神、ワキ敕使。敕使、嵐山に吉野より移植したる櫻の花の盛を見に行き、藏王權現、木守の神の奇特に逢ふことを作る。(六流)

ありどほし〔蟻通〕(謡曲)四番目。シテ蟻通明神、ワキ紀貫之。貫之、雨の一夜、蟻通の神祠と知らずして下馬すべき社内に馬を乗り入れ、神の怒に觸れたるも、和歌の徳によりて神慮を和ぐ。(六流)

あゐそめがは〔藍染川〕(謡曲)四番目。前シテ宰府神主と契りし女、後シテ天滿天神、子方梅千代、ワキ宰府神主、ツレ左近の妻、トモ神主從者、狂言神主の妻。宰府の神主の都に

在りし時契りし女、二人の中に生れし子を引連れて筑紫に尋ね下りたるに、神主の妻の爲に欺かれ、藍染川に身を投げて空しくなる。神主後に之を知り祈をなして蘇生せしむ。(観寶、春)

あをやぎのまひ〔青柳之舞〕遊行柳の小書。(観梅) 序の舞に、杖をつきたるまゝ舞ひ、初段オロシ過ぎにて終る。一名「杖之舞」。

あんかんどめ〔安閑留〕花筐の小書。又「女御留」とも云ふ。型にも種々變化ある外、キリの一章の文句變はる。

あんじつどめ〔庵室留〕大原御幸の小書。曲の終り作物の内に入りて留むるなり。

あんざ〔安坐〕(型) 胡座をかくこと。始に右方へ斜に右足、次に左足と二足出で、右膝を突く。此時の姿勢は「下に居立つ」と同じ。次に右の足首を寝せて足の甲を板の上に付け、左足の裏を内側へ向けながら正面へ振り向く。向き終ると同時に臀を右足の裏へ載せ、

それと同時に今まで立て居たる左足を外へ仆して胡座をかく。ガツシの後とか、下に居たるまゝの時には右方へ出でずに其まゝ安坐す。飛び上つて安坐する時には宙にて安坐の足組をなす。

い〔イ〕イロ節の符號。謠本には「イ」を直グ節、落子節のゴマには右端(尾)に、廻シ節には左端(首)に添記せり。

いさぎよく〔遊曲〕融の小書。(寶、剛、喜) 早舞の替にて重き習なり。且此時は概ね直衣指貫を着く。

いうぜん〔祐善〕(狂言) 若狭の者、都に上り俄雨に會ひ、祐善といふ笠張の死にたる家に宿る。祐善の幽霊現れて最期の有様を語る。能がりの狂言。(三流)

いうぢよのまひ〔遊女之舞〕船辨慶の小書。(春) 序之舞のかゝり、其他に常と替る所あり。

いうぶのまひ〔遊舞之舞〕又「遊舞の樂」とも。菊慈童の小書。(觀) 樂についての替。

いかりかづき〔碇潜〕(謡曲) 太鼓無の時二番目又四番目。太鼓入の時四番目又五番目。シテ

平知盛の靈、ツレ二位尼の靈、ワキ旅僧。旅僧、二位の尼と知盛との亡靈に逢ひ、平家滅亡の昔語を聞く。(觀、寶、剛、梅)

いくたあつもり〔生田敦盛〕(謡曲) 二番目。シテ平敦盛の靈。子方敦盛の子。ワキ法然上人の弟子。敦盛の遺子。賀茂明神の靈夢により攝津國生田の森に至り父の靈に逢ふことを作る。(觀、寶、春、剛、梅)。金春にては「生田」と云ふ。

いけどりすずき〔生捕鈴木〕(狂言) 鈴木三郎重家、梶原景時に生捕られ、頼朝の御前にて義經の辯護をなし、頼朝に許さるゝことを獨にて語る狂言。

いしがみ〔石神〕(狂言) 夫の亂醉して打擲するに堪へかねたる女房、暇を乞はずして去り、仲人に其由を告げて親里に歸る。女は暇をくれるやうにと石神へ日參す。男、其噂を仲人より聞き、石神に扮して待つ所へ女參詣し、男の質託宣露はれて女益怒る。(三流)

いしわうじよう〔石王尉〕(面) 面工石王兵衛の創始したる型の尉面。色白くして、上品なる稍平たき面。寶生流にては、輪藏、豊千の後シテ、下懸にては、老松、白樂天、放生川、雨月の眞之序之舞物、及び遊行柳、西行櫻に用ふ。觀世流にては、遊行柳、西行櫻など鍔尉を用ふるものに稀に代用することあり

いしわうびやうゑ〔石王兵衛〕面工の名。轉じて面の名。〔石王尉〕を見よ。
いしありう〔石井流〕囃子方大鼓の一流。明治年間、名人と稱せられし家元石井一齋の歿後、後繼者無くして斷絶せしが、現時京阪に復興しつゝあり。

いす〔椅子〕(作物) 竹にて椅子の形に作り、白布を巻き、背後の倚りかゝりに紅段を千鳥に掛く。大會に用ふ。
いすぐるま〔椅子車〕(作物) 家根なき車にて、後部に紅段を千鳥にかけて倚りかゝりを作りたるもの。車僧に用ふ。

いすゞりま〔椅子車〕(作物) 家根なき車にて、後部に紅段を千鳥にかけて倚りかゝりを作りたるもの。車僧に用ふ。

いせのでん〔伊勢之傳〕杜若の小書。(觀) 謠にも型にも習あり。

いたや〔板屋〕(作物) 六尺に三尺の家臺にへぎ板を以て屋根を葺き竹にて押へ、一部の板を葺かず、又は軒先を破り置く。雨月に用ふ。

いちじおさへ〔一字抑へ〕「おさへ」を見よ。
いちじおち〔一字落〕(節)「一字落シ」又は「一字下げ」とも稱す。サシ又はカ、ルの章中及びサシの調子にて謠ふ所に於て、上音にて連續したる一句の終り、即ち句切の前に落節一個あるものを云ふ。其の謠方は前より連續し來れる上音のまゝ頭音を發し、一音位高き所まで浮かせ、生ミ字にて原音位の上音に戻し、尾韻を聊か揺がす如くに謠ふ。但し地渡

しの場合又は次が連吟となる場合に於ては剛吟柔吟それ〴〵特別の謠方あり。
いちじおとし〔一字落シ〕「一字落ち」に同じ。
いちじぐり〔一字繰り〕(節) 剛吟のノリ地に稀にある節にて、たゞ一音にてクリをうたふも

いづくせんじん〔一角仙人〕(謠曲) 四番目又五番目。シテ一角仙人、ツレ旋陀夫人、ツレ龍神、ワキ官人。一角仙人。旋陀夫人の容色に迷ひて通力を失ふことを作る。(六流)

いつかくせんじん〔一角仙人〕(面) 一角仙人にのみ用ふる面。額に角あり。怪士の類。
いつせい〔一聲〕「一セイ」謠曲を組織する一部の稱。大體、次第がワキの序歌なるに對し、一聲は概してシテの開吟たるを正式とす。即ちシテ舞臺に出で最初に其の環境の景趣若くは自己の心情境遇などを謠ふ一節なり。其の謠は、必ず上調にして總べて拍子に合はず、節をたつぶり謠ひ、句毎の末字を餘韻あらしむべく引きて謠ふを定法とす。

いちのまつ〔一ノ松〕能舞臺橋懸の前面に植ゑある三本の松の中、シテ柱に最も近き松を云ふ。又「要の松」とも稱す。
いちやくあひ〔一役間〕「習間」の異稱。「間狂言」を見よ。

のなり。此のクリ節の次には必ず落節ありて、普通の如く「入」を添へず。謠ひ方は其の字を略ぼ入の如く突き上げ、直次の落節にて上音に復す。
いちでふだい〔一疊臺〕(作物) 疊一疊敷程の木造の臺。高さは六七寸、臺は掛布にて蔽ふ。掛布は臺の上面と横面とに地色の異りたるを用ふるを例とす。一疊臺は諸種の意味に用ひられ、小鍛冶、禪師會我、調伏會我等にては祭壇又は祈禱壇とし、嵐山、石橋、谷行等にては山たることを示し、邯鄲にては家の床とし、咸陽宮にては玉座とせらる。其他、山、宮等の作物を据うる臺として用ひらるゝ場合甚だ多し。

いちのまつ〔一ノ松〕能舞臺橋懸の前面に植ゑある三本の松の中、シテ柱に最も近き松を云ふ。又「要の松」とも稱す。
いちやくあひ〔一役間〕「習間」の異稱。「間狂言」を見よ。

いちやくあひ〔一役間〕「習間」の異稱。「間狂言」を見よ。

いちやくあひ〔一役間〕「習間」の異稱。「間狂言」を見よ。

いちやくあひ〔一役間〕「習間」の異稱。「間狂言」を見よ。

いちやくあひ〔一役間〕「習間」の異稱。「間狂言」を見よ。

いちやくあひ〔一役間〕「習間」の異稱。「間狂言」を見よ。

と標し、更に其後に一セイ謡あるものにはそれを「一セイ」と標示せり。

一聲囃子にて出で一セイ謡を謡ひ出すものに常の一聲の外「真之一聲」といふあり。前シテ（必ずツレを伴ふ）が格段に莊重なる開吟をなすものにて、其の謡に先き立ちて囃す囃子も亦真之一聲と稱す。協能の大部分、協能以外にては松風の一曲のみ真之一聲なり。

いっそうりう「一噌流」囃子方笛の一流。初代中村備中入道一噌、慶安五年七十三歳にて歿す。二代新五郎入道噌庵。三代八十右衛門、此時より中村姓を一噌に改む。現家元は十一代目、又六郎と云ふ。

いっつので「五ツノ手」小鼓の手。クセの如き靜なる地中に時として打つもの。
いっつてう「一調」曲中の謡ひ所の一段を選び取りて小鼓、大鼓又は太鼓の一段のみにて打ち囃すこと。而して其の謡を「一調謡」と云ふ。

小鼓の一調——浮舟の一聲キリ、三井寺の鐘の段、籠太鼓の鼓の段、鳥追舟の鳴子の段、女郎花、松蟲、善知鳥のクセ上ゲ端以下、放下僧の小唄、蘆刈の笠の段、小督の一聲駒の段、咸陽宮の琴の段等。

大鼓の一調——八島のキリ、女郎花、三井寺のクセ、善知鳥のクセ上ゲ端以下、放下僧の小唄、蘆刈の笠の段、安宅の勸進帳等。太鼓の一調——杜若、遊行柳、姨捨、野守、春日龍神、羅生門の太鼓所全部等。

前掲の浮舟小督の如き一聲より一調を始むるものは先づ鼓のみにて一聲の囃子を打つ。之を「一調一聲」と云ふ。
全然謡無くして、鼓太鼓のみにて打つ一調を「無謡一調」と云ふ。獅子の如き是れなり。又謡無くして笛と鼓太鼓のみにて囃すを「一調一管」と云ふ。獅子、亂の如き是れなり。
いっびやうし「一拍子」(囃)太鼓の打込又は打上の後には大抵打返ありて謡ひ出すもの多け

れど、時として打返なくして打込又は打上の頭を聞きて直ぐ謡ひ出すものあり。之を一拍子と云ふ。

いづみりう「和泉流」狂言方の一流。古くより禁裡の御用を勤め、尾州家御抱となりて禁中並に江戸城へも出勤せり。流祖佐々木岳樂軒（本名不詳）、二代源五郎元幸、岳樂軒の甥、京都に住し和泉と稱し、一葉軒とも號す。四代日吉萬五郎起運、金春禪鳳の子、一葉軒の弟子。六代は三代目の子。鳥飼和泉守元光、後に道西と號す、此人より山脇姓を名のる。七代元道は道西の子、源助又は五郎左衛門と稱し、後道仙と號す。慶長十九年初めて尾州徳川家に抱へられ、切米百石を受く。爾後累代名古屋に住し、十六代元清、東京に出で明治四十四年に歿し、其子元照、十七代を繼ぎしが、大正五年早世し家元絶ゆ。現時野村萬齋万造父子、野村又三郎、多々良外茂三等は此流に屬す。

いとのだん「糸の段」安達原（黒塚）の「さてそも五條あたりにて」より「鳴き明かす」までの一段を云ふ。

いとまのふくろ「暇ノ袋」(狂言)男、其の妻の朝寝し大酒を飲むを厭ひて去らんとし、女の里に歸りたるを幸機とし、暇狀を冠者に持たせやる。女、狀を見て怒り、歸りて夫を責む。夫は暇をやりたる者の何しに來たと咎むれば、女、此袋に入る道具を取りに來た、欲しきはこれだと、袋を男の首に被せて引く。男許せ〜と逃ぐ。

いなばだう「因幡堂」(狂言)大酒飲の妻を去りたる男、因幡堂へ參り御夢想により新に妻を得んと祈る。女、蹤をつけて行き、男の眠りたるを見て、西門に立ち居る女を妻にせよと告ぐ。男、告の如く西門に行けば、果して被衣をかぶれる女あり。盃をせんとて男一杯飲みて女にさす。女數杯を傾くるに、男呆れて又大酒飲だ、被衣を取れと云ふ。女、妾を去

つて因幡堂へ行つたな、どうでも添はねばならぬ。男、許せ〜と逃ぐ。(三流)

いぬやまぶし〔犬山伏〕(狂言) 僧の茶屋に休み居る所へ、山伏來かゝりて亦休み、茶が熱いの温いのと苦情を云ふ。僧、亭主の肩を持って、山伏怒り僧を罵り肩箱を持てと云ふ。僧聽かず。亭主、仲裁に入り、茲に居る人食犬を互に祈り、懐きたる方を勝にせんと定む。僧、祈れば犬寄り來り、山伏祈れば犬吠えつき、山伏遂に逃げ出す。(泉、鶯)

いねじよう〔稻尉〕(面) 「髮無尉」ともいひ、金剛流にのみあり。高砂、繪馬、小鍛冶の三番の前シテに用ふ。

いのり〔祈、イノリ〕(型) シテの惡鬼に對して僧又は山伏なるワキ、ワキヅレの祈り伏する所作。普通には先づシテが勝ちてワキを脇座の方へ追ひ詰め(段)、次にワキが祈り勝ちてシテを橋懸まで追ひ行き、又追ひ返されてワキのみ舞臺に入り、シテはシテ柱の向ふより

打杖振り上ぐ(段)、ワキ更に脇座の方へ追ひ詰めらる(打上)。其間ワキは珠數を揉みて祈る。此イノリのあるは所謂般若物の道成寺、葵上、安達原の三番なり。

いのり(イノリ)(囃) ワキ及びワキヅレがシテを祈り伏する所作に囃す囃子。大小太鼓に笛の付き合ふもの、法力魔力の争なれば強くして急調なり。道成寺、葵上、安達原の三番にあり。

いは(岩)(作物) 竹にて籠やうのものを作り、緞子を張りて兩方より合せたるもの、背後は明け放しなり。左右に割れば、内よりシテ又は龍神現れ出づる仕組なり。殺生石、一角仙人等に用ふ。

いはとのまひ〔岩戸之舞〕三輪の小書(喜)常闇の夜とはやなりぬ」の後に短き舞あり。謡型共に替る。

いはふね〔岩船〕(謡曲) 脇能又切能。シテ天の探女(前は化身)ワキ勅使。勅使、住吉の

濱にて天の探女の奇特を見ることを作る。(六流) 觀世現行のものは半能として切能祝言にのみ用ふ。

いほりのうめ〔庵ノ梅〕(狂言) 歌を詠む尼、邊りの女房達に歌の指南をなす。梅の花盛に大勢の女房衆、銘々自作の和歌を認めて庵を訪ふ。尼、添削して短冊を梅の枝に結び、酒盛をなす。(大、泉)

いましんめい〔今神明〕(狂言) 「栗隈神明」に同じ。(泉)

いままゐり〔今參〕(狂言) 大名、新參者を抱へんとす。冠者、阪東者を秀句に堪能なりとて伴ひ來る。大名の間に新參者答へ誤り、遂に拍子にかゝつてシャギリ止め。(三流)

いまわか〔今若〕(面) 平太を若く美しくしたるが如き男面。中將又は平太を用ふる修羅物、公卿物に之を用ふ。上懸は多く用ふれど、下掛は用ひず。

觀音に祈り、汝の妻は西門の石階にありとの夢想を得、冠者を遣る。上臈あり「戀しくは尋ねて來ませ伊勢の國伊勢寺もとに住むぞ妾は」と云ひて去る。冠者上句と「い」の字だけを感じて下句を忘る。關を据ゑて通行人に歌の後句をつがしむ、遂に道行人云ひ當て、三人謡ひ踊りてシャギリ止め。(三流)

いり〔入り〕(節) 人氣を強め音を突き入る、如く高く張り上ぐる節。其の上がる音程は、剛吟に於ては、下音にある時は下ノ中の高さ、下ノ中にある時は中音の高さ、中音にある時は上音の高さ、上音にある時はクリの高さにまで上ぐ。柔吟に於ては、下音にある時は中音の高さ、中音にある時は中のウキより起し上のウキの高さに、上音にある時は上のウキより起してクリの高さにまで上ぐ。即ち下音にありては一段、中音にありては三段、上音にありては二段高く上ぐるなり。但し柔吟の入りには此の法則に従はざる變體のものあり。

り。
又「入り」は「クリ節」に伴ふこと多く。此の場合には「入り」は「クリ」の終りを示す役目をなし、「クリ」の音位より高く謡ふにあらず。

「入り」はゴマ節の外、「廻シ」「消シ廻シ」「振り」「呑ミ」の四種に合し、「入り廻シ」「入り消シ廻シ」「振り入り」「入り呑ミ」の複合的の節をなす。各項参照。

いりくづし（入りクヅシ）（節）柔吟又稀には和吟のサシ、カ、ル又はサシ調にて謡ふ章の中音の句首又は句中にある節。謡方は「入り」を常の如く十分に入らしめずして、節の半ばにて之をクヅシ、其のまゝ次の字に移り、其の生ミ字より聊か音調を更へて下ぐ。而して次なるウキの符號の附きたる字にて中音に復し、更に一字を落し「イロ廻シ」にて下音に謡ひ止むるを通例とす。

いりけしまはし（入り消シ廻シ）（節）及「消シ

廻シ」と「入り」との合成したる節。多くは「クリ節」に伴ふものにて、前半は「クリ」の音位を承けて「入り」を謡ひ、後半は「消シ廻シ」に謡ふ。

いりのみ（入り呑ミ）（節）又「呑ミ節」と「入り節」との合成したる節。剛吟柔吟共に概ね「クリ」に伴ひ、「クリ」の音位を承けて「入り」に移り、末尾にて原音位の上音に復す。又稀に單獨に用ひらるゝことあり。

いりぶし（入り節）（節）「入り」に同じ。
いりまはし（入り廻シ）（節）又「廻シ」と「入り」との合成したる節。剛吟柔吟共に此の節單獨のものとして「クリ」に伴ふものとの二種あり。何れも其の謡ひ方に多少の差異あり。

いりちがひのでん（入違之傳）土蜘蛛の小書（觀）。中入にシテ一旦後見座にくつろぎ、早鼓になりワキの出づるを合圖に立ち、橋懸中程にて行き逢ふ際ワキへ巢をかけ、それより中入するなり。

いるまがは（入間川）（狂言）大名、都より歸國の途次、武藏野を過ぎ入間川に至る。入間者と互に入間の逆詞を遣ひ、與へたる物を最後に取返す。（三流）

いろ（色）（節）「イ」は「イロ」の頭假名を取りたるもの。柔吟に限り「直節」「落節」「廻シ」「消シ廻シ」「振り」「呑ミ」の六種の基本的符號に附せらるゝ補助的記號。「イロ」は音に綾を附くるの意。又此の記號は音の修飾をなす以外に音の上下に關する標示をなす。例へば上音の句中にて「下」の前に「イロ」ある時は「イロ」のある字又は其の一字前より浮かせ「下」の所に至りて下ぐるが如き、又「廻シ」の前に「イロ」ある時は必ずその廻し尻即ち末尾を下ぐるが如き是れなり。
又「イロ」が「廻シ」「消シ廻シ」「呑ミ」に附けられたるものは「イロ廻シ」「イロ消シ廻シ」「イロ呑ミ」と稱し、各其の廻シの末尾を下ぐるものとす。

いろ（イロ、色）前項補助的記號の「イ」に非ずして、節附又は詞の傍に「イロ」若くは「色」と記したるもの。其の部分の一句又は數音にて一種の謡ひ方をなす。即ち節附ある所にあるものは詞に近く扱ひ、詞の所にあるものは節ある心持に扱ふなり。

いろいり（色入）装束、扇に赤色の加はり居るものを云ふ。

いろえ（イロエ、イロへ、彩色）（型）常座より角へ出で、大きく左へ廻り、大小前へ廻り込むといふ程の極めて簡單なる動作。「立廻り」に似たれど、それより位平穩にして、概して三番目の鬘物のクリ又はサシを謡ひ出す前なごにあり。

いろえ（彩色）替の型として演ずる小書の彩色は、常は舞なるをイロエに替へ、又は常には、無き所にイロエを入るゝもの。觀世にては、養老、井筒、楊貴妃、江口、羽衣、角田川、戀重荷。金春にては老松。金剛喜多にては采

女などあり。又「サイシキ」と音讀す。

いろえ(イロエ、彩色)囃子(イロエ)は概ね大小鼓(稀には太鼓の加はるもあり)にて打ち、笛の之に附合ふものにて、極めて單調なるものなり。

いろえがかりちうのまひ(イロエ掛り中之舞)「中之舞」を見よ。

いろえはしり(イロエハシリ)(囃)出端に等しきイロエ囃子に引續きて早笛(ハシリ)となるもの。白髭、舍利にあり。又純粹のイロエよりハシリ(早笛)に續くものもあり。大會の如し。

いろけしまはし(イロ消シ廻シ)(節)初「消シ廻シ」に「イロ」の附きたるもの。柔吟に限りてある節。

いろなし(色無、無紅)装束、扇等に赤色の混せざること。

いろのみ(イロ呑ミ)(節)ち「呑ミ節」に「イ」の補助的記號の附きたるもの、柔吟に限りて

ある節。その謠方は發したる音に續けて殆ど別字の如く生ミ字を出し、呑ミ節の形に謠ひて末尾を下ぐ。

いろは(伊呂波)(狂言)親、その子に手習させんとてイロハを教ふ。子、親の教ふる語に附けて冗言を弄し、親、怒れば、子も怒り、父子喧嘩をなす。(三流)

いろはちまき(色鉢巻)(装束)淡紅色の鉢巻にて、主として子方に用ふ。

いろまはし(イロ廻シ)(節)初「廻シ節」に「イロ」の附きたるもの。「イロ」自體が柔吟に限れるものなれば、従つて「イロ廻シ」も柔吟に限りてある節なり。其の謠方は、發したる音に續けて殆ど別音の如く生ミ字を出し、それを「廻シ」の形に謠ひて末尾を下ぐるなり。「イロ廻シ」は其の節の裾に「下」の記入無くとも必ず末尾を下ぐるを法とす。而して「下」の記入無ければ次の字は原音位に復し、「下」の記入あれば下りたる音位を以下

に續くるものとす。

いれちがひ(入達)(囃)小鼓の手。

いんののみ(陰ノ呑ミ)(節)剛吟柔吟共に稀にある節。盛久の「此文の如くば」の「く」養老の「よもすがら」の「す」の如き是れなり。通常は呑ミの末尾より落して謠ふを、盛久のは頭より下音に、養老のは頭より下ノ中に落し、兩者共同調のまゝ「呑ミ」を謠ひてその末尾を下げざるなり。

いんやうのまひ(陰陽之舞)杜若の小書。(喜)装束も型も替る。

う(ウ)(節)ウ「浮き節」の記號。「ウキ」の頭假名を取りたるもの。

うかひ(鶺鴒)(謠曲)五番目。シテ鶺鴒の靈。

ワキ日蓮上人、ワキヅレ從僧。日蓮上人、甲斐國石和川に於て鶺鴒の漁夫の靈に逢ひ、之を成佛せしめしことを作る。(六流)

うき(ウキ、浮キ)(節)ウ「ウキ」は謠ひ續けたる音位より一段高めて謠ふことを示す記號。又「ウキ」は時として音階に於けるウキの意ならずして、唯浮キ氣味に謠ふべきことを示す場合もあり。「ウキ」は「直節」「落節」「廻シ」「振り」の四種に配合せらる。其の「落節」に附せられたるは次下上がるべき字の來ることを豫示する爲に慣用せられたるものなり。「ウキ」の「廻シ」と合したるを「ウキ廻シ」、「振り」と合したるを「ウキ振り」又

は「振りウキ」と云ふ。各項参照。
うきふね〔浮舟〕(謡曲) 四番目。シテ浮舟の君の靈、ワキ旅僧。旅僧、宇治の里にて浮舟の君の靈に逢ふことを作る。源氏物なり。(観、寶、剛、喜、梅)

うきぶり〔浮キ振り〕(節) ウ「振り」の基本的符章に「ウ」の補助的記號の合成したるものにて、柔吟の上音に限りてある節。謡方は、「ウキ振り」のある字の前字の音尾より上ノウキに浮かせ、そのまゝ「ウキ振り」の前半を謡ひ、後半にて上音に振り戻すものとす。

うきまはし〔浮キ廻シ〕(節) 「廻シ」の肩に「ウ」の記號を附したるもの。剛吟にては「廻シ」の肩を上げ氣味に謡ふ。稀に下音又は中音の所にあり。柔吟にては、「廻シ」の前半又は肩を浮かせて謡ふ。概ね中音に浮かすべき所にあり。

うぐひす〔鶯〕(狂言) アド男、飼養せる鶯に水を浴びさせんとて谷川へ持ち行く。見初めし

野の神の奇特を見ることを作る。(観、寶、梅)
うしうま〔牛馬〕(狂言) 「ぎうば」を見よ。

うしぬすびと〔牛盗人〕(狂言) 鳥羽離宮の牛奉行が牛を盗まれ、訴人する者には望み次第の褒美を與ふる旨の高札を打つ。子供來りて盗人は兵庫三郎と云ふ者と訴へ、三郎召捕はる。對決せしむれば親子なり。三郎意外の訴人に驚き泣く。子、父の命を褒美に賜はれと乞ふ。奉行其の孝心に感じて父を免す。(泉)

うたうら〔歌占〕(謡曲) 四番目。シテ二見の浦の神主渡會家次、ツレ里人、子方幸菊丸。渡會家次、歌占をなして諸國を廻り、失ひし子を探ぬる内、加賀の國白山の麓にて廻り逢ひしことを作る。(観、寶、剛、喜、梅)

うたすまふ〔歌相撲〕(狂言) 平八、孫一の二人春日野へ遊山に行く。平八、土筆を見つけて「つくぐしのかび萎れてぐんなり」と一句す。孫一笑ふ。孫一芍薬があるとして「難波津に芍薬の花冬ごもり」と云ふ。平八それは

若衆に鶯を所望せられたるシテ男出で來り、件の鶯を刺さんとす。咎められて仔細を述べ、太刀、刀を賭物にし狙ひ刺せども刺し損ふ。最後に「初春の太刀も刀も鶯もさゝでぞ歸るもとの住家に」と歌詠み、今一度刺させよと乞へど、アドやる事はならぬとて去る。(泉)

うけ〔受ケ〕 大小鼓太鼓のいづれにもある簡單なる一手。
うげつ〔雨月〕(謡曲) 四番目。シテ住吉明神、前ツレ神の化身(姫)、ワキ西行法師。西行法師、和歌の徳によりて、住吉にて明神の化身に逢ひ、宿を借りて奇特を見ることを作る。(六流)

うける〔受ケル〕(型) 眞直に向き居たる者が斜に右又は左へ向くを「右受ケル」「左受ケル」と云ふ。

うこん〔右近〕(謡曲) 脇能。シテ北野の神(前は化身の女)前ツレ化身の侍女、ワキ鹿島の神職。鹿島の神職、北野右近の馬場の花盛に、北

「咲くやこの花」だと笑ふ。孫一、其様に笑ふならば相撲をとらうと云ひ出し、平八勝つ。

うたひ〔謡〕 能の歌詞臺本、即ち謡曲の本来の名稱。「ウタヒ」の語は、元來「ウタフ」と云ふ動詞を名詞にしたるものにして、他の詠歌、小唄などに混ぜざらしめんが爲に、特に「ウタヒ」と呼び來りしもの如し。文字も今は「謡」の字のみを用ふれども、古くは諷、謳などの字も用ひたり。但し、昔時金春にては謡、觀世にては諷、寶生にては謳、金剛にては唄と書きたりとの流儀に區別したる説は附會の俗説なり。

うたひあふぎ〔謡扇〕 素謡の時に用ふる扇。現今普通に行はるゝものは、長さ曲尺九寸、地紙の丈約五寸。

うたひかけ〔謡掛〕(囃) 囃子事より拍子不合の謡へ移るに方り、コイ合、打上などの如き段落の手を待たずして、見計らひに役又は地よ

謡との間にありて、後の謡が拍子に合はず且此處にて太鼓の休止するものは、太鼓が打上に添へてオキと稱する手を打ちて止むるを一般とす。

ホ、打上オキ諷頭打切——大ノリ拍子地が拍子を外づしたる所若くは拍子不合の謡より次の平ノリ拍子地に移る間、又は囃子事より平ノリ拍子に合ふ謡へ移る間にありて、此處にて太鼓が打上に添へオキを打ちて休止し、後は大小鼓の諷頭打切となるもの。

ヘ、打上オキ刻返——拍子不合の謡又は囃子事より平ノリ拍子（稀に大ノリ拍子）に合ふ謡へ移る間にありて、此處にて太鼓が打上に添つてオキを打ちて休止し、後は大小鼓の刻返となるものを云ふ。

うちあはせ（打合）（型）先づ両手を腰へ着け、心持引き上ぐるやうにして、敏活に両手を外方へサツト開き、直に前にて素直に軽く合はす。又扇の時は、開きたる扇と左の手とを稍

低く前にて合はす。何かハタと思ひ當ると云ふ如き場合に用ふる型。

うちおろし（打下シ）（囃）小鼓の手。「打下シ」は他の手と合して種々の變化を生む。

うちかけ（打掛）（囃）大小鼓にて打つ繋ぎの手。本協能物及び本三番目物の主なるものは、クリ地を謡ふ前に打掛の手配打たるゝを待つ、之を「打掛キリ」と云ふ。

又、太鼓の加はらざる謡にして而かも太鼓あるものと同様の拍子組織の處に於て、太鼓ならば打切を打つべきを大小鼓にて打掛を打つ。斯く打掛の手は太鼓の打切と殆ど同様の役目をなすが故に、太鼓の頭を聞き又はそれに當て、謡ひ出すべき所を、打掛にては打掛段頭を聞き、又は打掛合頭を聞き又はそれに當て、謡ひ出すなり。

イ、打掛段頭——拍子不合の謡より次の大ノリ拍子に合ふ謡へ移る間にあり。打掛は主として大鼓の手の名、段頭は主として小鼓の手

の名なり。

ロ、打掛合頭——拍子不合の謡より次の大ノリ拍子に合ふ謡へ移る間にあり。

うちかへし（打返）（囃）太鼓入りの囃子に於ては、謡ひ出しに「打返」を聞き出て出づるもの甚だ多し。前後の囃子又は謡にて種々の別あれども、打返の手其者は同一なり。

うちきり（打切）（囃）謡本に「打切」又略して「打」ウ」など記入せるもの。打切には一般的なる大小鼓の打切と、特殊的なる太鼓の打切とあり。

一、大小鼓の打切——此の打切は謡の拍子を整へ、或は一句と次句との間に餘裕ある氣分を作り、或は又心持を轉ずる爲に設けられたるものなり。故に謡の中に於ては或る章と或る章との二つ異りたる部分の境目ともなり、或る句と其の返シ句との境目ともなり、又或る囃子事と謡との境目ともなるなり。何れの場合にても此の打切あれば次の謡は必ず拍子

に合ひ、其の拍子は平ノリ又は中ノリなり。打切には其の種類多けれども、謡を謡ひ出す直前の合圖は一定せり、（替の打切は異なる）即ち大小鼓の合頭「ハア、イヤ△」の後へ、大鼓「ハホンヤア」と掛聲し、其のあと小鼓「ハ●ハ○」と打つ。

打切には、常の打切、上略打切、中略打切、アッラヒ打切（笠の打切）、諷頭打切、替の打切、習の打切の各種ありて、各その手を異にす。

イ、常の打切——謡と謡との間、又は詞と謡との間にある普通の打切、打切前の謡が拍子合と拍子不合とによりて其の手配を異にす。ロ、上略打切——本協能物には殆ど有り。其他熊野の「四條五條の橋の上」と其の返シ句との間、松風の「寄せては歸るかたを波」と其の返シ句との間などにもあり。常の打切の前に念入りの手配を添へて打つ。ハ、中略打切——本協能物には殆ど必ずシテ

の出の最初のサシと下歌との間にあり。上略打切に殆ど同じく、唯大鼓が上略の「ヨイ」の代りに「ハア」と聲を掛くるだけの相違なり。

ニ、諷頭打切——セイ風の拍子不合の謡より拍子合の謡に移るとか、太鼓入の拍子不合の謡（太鼓は打上オキにて止め）より拍子合の謡に移るとかいふ境目に用ひらる。

ホ、笠の打切——又「アシラヒ打切」とも稱す。笠着たるワキ、或は笠なくともワキヅレを従へたるワキの道行前等に大抵打つもの。へ、替の打切——曲によりて或る處へは普通の打切と異りたる手を打つもの。

ト、習の打切——打切が習となり居るもの。是亦普通の打切とは異りたる手配を打つ。重き習物なる正尊起請文中の「ことには氏の神」と「全く正尊討手に」との間、又安宅の勸進帳「建立す」と「かほどの靈場」との間、其他老女物や道成寺の如き重き習物は勿論、

三輪、朝長などにも重き替の場合には習の打切あり。

二、太鼓の打切——大小鼓へ太鼓の加はれる繋ぎの手。前掲の大小鼓の打切とは全く異り、寧ろ大小鼓の打掛に類似す。此の手は大ノリ地中に多數あれど、又拍子不合の謡より大ノリ拍子に合ふ謡へ移る間に於て其の拍子不合の謡の終へ打切を打ち、その頭「イヤ天」を聞きて大ノリ拍子に合はせ謡ひ出すもの亦多し。

うちこみ（打込）（囃）大小鼓の打込と太鼓の打込との二種あり。

一、大小鼓の打込——大小鼓にて打つ繋ぎの手。打掛と同じく、太鼓無き謡にして而かも太鼓あるものと同様の組織なる所にて、太鼓ならば打込を打つべきを大小鼓も同名の打込を打つなり。斯く大小鼓の打込は太鼓の打込と殆ど同じ役目を爲し、太鼓ならば打込打返か打込一拍子の頭を聞き、又はそれに當て、

謡ひ出す所を、大小鼓の打込にては打込段頭を聞き、又は打込合頭に當て、謡ひ出すなり。

打込段頭、打込合頭は、打掛段頭又は打掛合頭を聞いて謡ひ出す大ノリ拍子に合ふ謡より、其の返シ句たる大ノリ拍子に合ふ謡へ移る間にあり。打込は主として大鼓の手の名、段頭は主として小鼓の手の名なり。

二、太鼓の打込——大小鼓へ太鼓の加はれる繋ぎの手。囃子事の終にては打上と云ひ、謡と謡との間にては打込と云ふ。故に太鼓の打込は手配に於て打上と同一のものにて、場所によりて名稱を異にするのみ。故に打込打返は打上打返に同じく、打込一拍子は打上一拍子に同じ。打上の項参照。

うちこみ（打込）（型）左右の型に次いでする型にて、左右の種類に依つて打込の扱ひ方に異同あり。
イ、左右に次ぐ打込——先づ左右は左へ二

足、次に右へ又二足出づ。此時上り居る扇を後の方へ下しながら體を正面へにぎり向けると共に扇を持ち替へ、左足右足と前へ二足出で、此の出足一杯に扇を後方から上げて腹部の上まで下して止む。

ロ、中左右に次ぐ打込——中左右は左方へ三足、次に右方へ四足出づ。此時上り居る扇を後方へ下しながら體を正面へにぎり向けると共に扇を持ちかへ、左足右足と二足引き、此の引足一杯に扇を後方から上げて腹部の前まで下して止む。

ハ、大左右に次ぐ打込——大左右は左方へ三足、次に右方へ出づ。此時扇は上り居る。この右方へ行きて止まると右足をかけて體を正面の方へ振り向けると共に扇を後方へ下して持ちかへ、左足から斜に正面へ扇を後方から上げながら出で、右足にて止め、止むると共に扇を腹部まで下して止む。
扇の持ち替へ様は、扇を下すと手を緩めて扇

を平にし、拇指、人指指、中指にて持ちか
ふ。扇を上ぐる時は、地紙面を前後に向け
ず、左右に向くやうにして上ぐ。此時扇を下
す前に外側に向きたる地紙は内側へ向くこと
ゝなる。又扇をつぼめてある時は、持ち替へ
ず、扇を下すと端を後方へ向けるやうにして
上ぐるのみ。尚片左右の後には打込無し。

うちぎた〔内沙汰〕〔狂言〕右近と云ふ百姓、左
近の牛が我が田を食ひたるにより訴へんと
す。女房、左近は口利なれば口不調法の汝が
負けとならん。内沙汰にせよと云ひ、女房、
地頭に假装す。右近、自分の言分を述べ、大
事の御年貢を刈る牛をば左近の田が来て食べ
たと云ひ誤る。女房、其の言分では埒明かぬ
縛れと云ふ。右近狼狽し、漸く眞の地頭なら
ざるに心着きたれど、左近に心ありと女房を
嫉む。女房、嫉まれるれば左近へ行くとして怒り
て去る。(三流) 大藏流には「右近左近」。

うちだしがしら〔打出頭〕〔囃〕謡の或る部分と

次の部分との境に、太鼓又は大鼓が單獨に打
出す頭を云ふ。太鼓の打出頭にては、其の前の
謡が平ノリ中ノリに合ふもの、又は拍子不合
のものにて、後の謡は概ね大ノリ拍子に合ふ
ものなり。大鼓の打出頭にては、その前の謡が
拍子不合のものにて、後の謡が大ノリ拍子又
は平ノリ中ノリの拍子に合ふものなり。(觀世
梅若兩流には大鼓の打出頭を打つことなし。)

うちづゑ〔打杖〕〔手道具〕鬼神又は龍神の持
物。普通の杖の如く突くにあらず、振り上げ
て相手を打拂ふに使用するもの。
うちとまうで〔内外詣〕〔謡曲〕脇能。シテ大神
宮の神官、ツレ同、ワキ敕使、ワキツレ敕使
の従者。敕使、伊勢の内外宮に參詣し、神
樂、獅子舞を奏せしむることを作る。(金剛)
うちは〔團扇〕〔手道具〕能に使用する團扇には
唐團扇、羽團扇の二種あり。唐團扇の變形に
魔王團扇、葉團扇等あり。
うちへとる〔内へ取ル〕謡方の語。アカサタナ

ハマヤラワ、ガザダバ等の如き口を開きて放
大になり易き音は引締めて謡ふことを内へ取
ると云ふ。

うちむすび〔氏結〕〔狂言〕神子と山伏、同日に
神前に籠り神の媒にて夫婦の縁を結ぶ。(驚)

うつつのがく〔現之樂〕又「現の舞」とも云
ふ。富士太鼓の小書(觀)。樂の中に橋懸へ行
き、袖をかづきて見込むなど、替れる型及び
緩急多し。

うつぼざる〔靱猿〕〔狂言〕大名、冠者を連れ、
遊山に行く途中、猿引に逢ひ、靱にかける爲
猿の皮を貸せと無心を云ふ。猿引、生きてゐ
る猿の皮が貸せるものかと應ぜず。大名、
射殺さんと威嚇す。猿引、猿を進上せんが、
皮に疵のつかぬやう打つて進せんと云ひ、猿
に向ひて殺すは不憫なれど恨むなよと歎く。
大名心動き殺す事を免す。猿引御禮にとて猿
を舞はす。大名感激の餘り、歌一つ毎に、
刀、上下、扇を皆猿引に與ふ。(三流)

うづもれどめ〔埋留〕定家の小書。(觀、剛) 切
の型替り、再び塚に入りて留む。流儀により
ては此型は常の型として演ず。

うてなだめ〔臺留〕楊貴妃の小書。(觀、剛) 切
を宮に入りて留め、大小鼓の残り留となる。

うとう〔善知鳥、烏頭〕〔謡曲〕四番目。シテ獵
師の亡靈、ツレ獵師の妻、子方千代童、ワキ
旅僧。旅僧、立山禪定して陸奥國卒都の濱の
獵師の幽靈に遇ひ、その着たる麻衣の袖を切
りて故郷に届けよと言傳てられ、陸奥なる彼
が妻子の許に届けて供養することを作る。(六
流)

うねめ〔采女〕〔謡曲〕三番目。シテ采女の靈、
ワキ旅僧。奈良の帝の寵を受けたる采女、後
漸く寵の枯れたるを怨みまゐらせ、猿澤の池
に身を投じたるが、其の執心長く猿澤の池に
残りて、亡靈、旅僧に昔を語る。(六流)
うのだん〔鶉之段〕鶉飼の中「しめる焚松ふり
立て」又は「鶉籠を開き」より中入までの

特稱。

うのみつり〔鵜祭〕〔謡曲〕協能。シテ八尋玉殿の神（前は其化身）、ツレ化身の女、ワキ朝臣。敕使、氣多の神社の霜月初午の神事に参りて奇特に逢ふことを作る。（春）

うば〔姥〕老婆の事。尉に對して云ふ。

うば〔姥〕老婆の面。當麻、身延、攝待のシテ、高砂、嵐山、絃上、國栖、繪馬のツレに用ふ。

うばがみ〔姥髮〕尉髮に對する老婆の假髮。結ひ方は普通の鬘に似たれど、白毛と黒毛とを混ぜたるもの、姥の面を着くる老婆に用ふ。

うひかむり〔初冠〕元來、元服して初めて冠を着ることなれど、能にては冠の名稱として用ふ。黒羅又は紗にて作り、形は圓平にして、後方に巾子とて昔は髻を押し込みたるもの突き出で、其の背後、櫻と云ふ短冊形のものあり。櫻には垂櫻と巻櫻との二種あり。「櫻」の項参照。

うみじ〔生ミ字〕カ行以下の子音に含まるゝ母音（アイウエオ）を云ふ。

うめ〔梅〕〔謡曲〕三番目。シテ梅の精、ワキ藤原某。梅の精、古歌を引きて御代を祝ふことを作る。（觀）

うめがゑ〔梅枝〕〔謡曲〕四番目。シテ富士の妻の靈、ワキ身延山の僧、樂の争にて樂人淺間に討たれし富士といふ樂人の妻の幽靈、旅僧に宿を貸して弔を請ふことを作る。（觀、寶、剛、喜、梅）

うめだい〔梅臺〕〔作物〕梅の造花を立つる臺。胡蝶には紅梅、梅には白梅を用ふ。

うめわりう〔梅若流〕もと丹波猿樂より出づ。徳川幕府四座確立の後に出府し、觀世のツレ家となる。梅若實、明治維新後、斯道瓦解の悲運に會し、獨り孤壘を守りて奮闘し、苦心慘愴、斯道復興の基礎を開けり。明治大帝、英照皇太后等の御前能の光榮を擔ふこと、前後數十回に及べり。大正十年七月一般能界

と分離し、梅若流と稱し、萬三郎先づ家元となり、次いで現家元六郎に譲る。

うりぬすびと〔瓜盗人〕〔狂言〕アド瓜主、獸の瓜畑を荒すを防がんとて人形を作り置く。シテ盗人、見事なる瓜畑を見、畑に入りて瓜を盗み取る内、人形を見て驚き陳謝す。先方の物言はぬに人形と知り、腹立ちて瓜蔓をむしりて歸る。翌日瓜主此の様を見て自ら案山子となりて待つ。翌夜果して盗人來り、鬼の罪人を責むる様、又罪人となつて責めらるゝ狀をなす。瓜主より磔を打付らるれども氣つかず、杖にて打たれて始めて心づき驚き逃げ去る。（三流）

うるさし〔右流左止〕〔狂言〕清水觀音に妻乞ひする大名、傍にゐる女に言ひよれば、女、うるさしとはねつく。大名、うるさしの故事を語り、女、歌を詠み、始めて二人の意氣投合し、同道して歸る。（泉）

うるこおとし〔鱗落し〕道成寺の曲の祈の内

に、シテ橋懸へ行きがけに、シテ柱を過ぐる時、腰に纏へる腰巻を脱ぎ捨て、後見おさへて引き取り片付くるを云ふ。

うるこがた〔鱗形〕〔謡曲〕協能。シテ辯才天（前は其化身）ワキ北條時政、ワキツレ從臣。北條時政、江島の神徳により鱗形の旗の紋を得たることを作る。（喜）

うをせつばう〔魚說法〕〔狂言〕與平次と云ふ者、亡親追善の爲建立したる小堂の供養に法談を乞はんと寺へ行く。住持不在にて代りの僧來る。此の僧經を知らず、幼時海濱に住み魚の名を知り居れば魚盡くしの法談をなす。與平次供養に腥き事を云ふとて、怒りて僧を追ふ。（三流）大藏にては「魚說經」。

うりんらん〔雲林院〕〔謡曲〕三番目又四番目。シテ在原業平の靈、ワキ公光。芦屋の里の公光といふ者、年頃伊勢物語を愛讀して靈夢を蒙り、雲林院に行きて業平の靈に逢ふことを作る。（觀、寶、剛、喜、梅）

えい〔櫻〕冠の附屬具。短冊形にて、兩端に骨を入れて羅を張り、冠の後に押しこみたるもの。能にては之に垂櫻と巻櫻との二種あり。杜若、井筒などは綾あやをつけたる巻櫻を用ひ、草紙洗及び國栖の王は垂櫻を用ふ。

えいきよく〔鄂曲〕千手の小書。(觀)シテの次第、サシ、下歌、上歌を省き、ワキの名告の後、直に重衡の謡となり、其の謡中にシテ出で、謡終りてシテ案内を乞ふ。「朗詠してぞ」の後にイロエ掛りの舞あり。クリ、サシ、クセ全部を省き、切の型も替る。

えうきよく〔謡曲〕謡曲は能の詞章臺本を云ふ。現時専ら謡曲の語を使用すれど、徳川時代に於ては「うたひ」(謡)を以て本稱とし、謡曲と熟用したるもの極めて稀なり。「うたひ」を以て謡曲の俗稱とするは非なり。

えぐち〔江口〕(謡曲)三番目。シテ江口の君の靈、ツレ同、ワキ旅僧。旅僧、攝津國江口の里を過ぎたるに、江口の君の幽靈現れて西行法師と歌詠みかはしし昔を語り、あでやかなる舟遊の様を見す。(六流)

えのしま〔江島〕(謡曲)協能。シテ龍口明神(前は其化身)前ツレ龍神化身漁夫、後ツレ辯才天女、ワキ欽明天皇の臣下。相模國江野の浦に奇瑞現れ、一島湧出したる由、天皇聞し召され、敕使を下されたるに、龍王及辯才天現れて此の島を蓬萊の島に擬して奇特を示す。(觀)

えびすだいく〔蛭子大黒、夷大黒〕(狂言)津の國の者、西の宮の蛭子三郎と比叡山の大黒へ富貴にならんことを祈願し、家内を清め勸請するに、蛭子と大黒と現れて、各其の由來を陳べ、蛭子は釣針を、大黒は寶の袋と打出の小槌とを授くることを謡ふ。(三流)

えびすびしやもん〔夷毘沙門、惠比須毘沙門〕

(狂言)大果報の者、娘に髻を取らんとて高札を上ぐ。鞍馬の毘沙門と西の宮の惠比須前後して來り、二人その系圖を語りて舅の家に納まる。(三流)大藏にては「毘沙門」。

えびら〔箆〕(謡曲)二番目。シテ梶原景季の靈、ワキ旅僧。梶原景季の亡靈、旅僧に箆の梅の謂を語り、又己が戦功の昔を語る。別名「箆の梅」。(六流)

えびら〔箆〕(手道具)矢を數本並べて束ね、箆の形に擬したるもの。住吉詣の隨身などに用ふ。

えぶり〔杙〕(手道具)竹の先に板を打ちつけたる雪搔き。氷室、竹雪に用ふ。

えぼしをり〔烏帽子折〕(謡曲)五番目。前シテ烏帽子屋亭主、前ツレ其妻(鎌田正清の妹あこやの前)、後シテ熊坂長範、後ツレ長範の手下數名、子方牛若丸、ワキ三條吉次、ワキツレ弟吉六、狂言早打、赤坂の宿主、小賊。牛若、三條吉次を頼みて奥州へ下る途次、近江

國境の宿にて烏帽子を折らせて圖らず鎌田兵衛の妹阿古屋に逢ひ、又美濃國赤坂の宿にて強盜熊坂長範を斬る。(觀、寶、剛、喜、梅)えもんにきる〔衣紋ニ着ル〕裝束の着け方、狩衣(盤領の物)又は舞衣などを上前と下前と別々に折込み、小袖の襟の如く着ける着方を云ふ。田村の白式、舟辨慶の前後の替、三輪の誓納、鞍馬天狗の白頭など重き替の型の場合になす。

えり〔襟〕(裝束)能にては、衣類に直接掛くること無く、着付の下に襟だけを見するなり。

色は、白、赤、淺黄、紺花色の類、萌黄、朽葉。用法は複雑にして流儀によりて異同あり。

白——高砂、弓八幡の後シテ、鷲の王、大原御幸の法皇、融の後、絃上の師長、蟬丸の蟬丸、住吉詣の源氏等身分ある人に用ひ、又位の上より老女物にも用ふ。
白三つ——翁に限る。

白二つ——本三番目物のシテは前後とも白二つを用ふるを原則とす。其他、花筐、砧、當麻、道成寺、葵上等の前後とも同じ、男にては咸陽宮、鶴龜、鷺のシテ、絃上の後など用ふ。

赤——主にツレ女の用ふるものにて、前後とも、男にては直面の前ツレ男、其他子方は角田川以外すべて皆赤を用ふ。

赤二つ——猩々と大瓶猩々とに限る。

白と赤——主として本三番目物以外の鬘物、又は女體の神等に用ふ。又白二つと共用するもの多し。

淺黄——尉物の殆ど全部前後共に用ふ。又直面のシテ或はツレに用ふる場合も多し。女にては深井の面を着くる若からざる女、四五番目物のシテ亦之を用ふ。

白と淺黄——修羅物の後シテに多く用ふ。

紺又花色（縹）——紺と花色とは色の類似せるを以て其用法も截然區別なきが如し。天狗

物、小癩見物、龍神物、シカミ、怪士の面を用ふる物などに用ふ。

萌黄——多く太刀持に用ふ。シテに用ひず。

朽葉——老年の女ツレに用ふ。高砂、嵐山、絃上の前ツレ姥、望月、善知鳥、鉢木のツレなどに用ふ。

えんねんのまひ〔延年の舞〕安宅の小書（六流）舞の中に昔の延年の舞の手を取り入れたりと傳ふる替の型ありて、重き習事とす。但し各流異同あり。

お

おいまつ〔老松〕（謡曲）協能。シテ老松の神靈、ツレ紅梅殿の神靈、ワキ梅津某、靈夢によつて筑紫安樂寺に詣でたる梅津某、老松及び紅梅殿の神靈に逢ふことを作る。（六流）

おうへんのまひ〔應變之舞〕吉野靜の小書。（觀）。舞に替る所あり。

おき〔オキ〕（囃）大小太鼓又は大小鼓が或る一段落を示す爲の手。その前には謡もあれば囃子事もあり、後は概ね拍子不合の謡なり。太鼓はオキに依つて休止し、大小鼓はオキに依つて休止する場合とその後更にアシラヒを打つとの二様あり。又太鼓にオキあれば大小鼓にオキ無く、大小鼓にてオキを打つものには太鼓は加はり居らず。

おきつぼ〔置壺〕猩々の小書。（觀、剛、喜）大なる酒壺の作物を舞臺正先に出し、酒を汲む

型などあり、舞は亂なり。

おきつぼ〔置壺〕（作物）高さ三尺程の瓶に赤地金爛の蓋を副ふ。猩々亂置壺の傳に用ふ。

おきな〔翁〕シテ翁、ツレ千歳（下懸にては狂言方面箱持の兼役）狂言三番叟。天下泰平を祈る一種の樂舞にして、古來斯道に於て最も神聖なる秘曲として尊崇せられ、其の樂舞は演能最初の儀式に用ふ。古名式三番。其の歌章を神歌と特稱す。初日の式、二日の式、三日の式、四日の式、法會之式（法會之舞とも）十二月往來、父尉延命冠者の別あり、それぞれ謡の一節を作り更へたるものなり。昔時連日演能の時必ず毎日翁を最初に演ずるを例とし、初日より四日まで其の式を替へ、五日目以後四日の式にて演じ續けり。現今は連日の演能にも初日に翁を演ずるのみにて二日以後に演ぜず、それも四日の式を用ふるを例とす。

おきなあふぎ〔翁扇〕（小道具）翁のみに使用す

る中啓。白骨にて、模様は各流異なり、觀世は蓬萊の圖にて、金地に波の上に大龜浮び、その背後に松橋竹あり、上部の兩隅には朱地又は紺青地に白鶴飛ぶ。寶生は竹に孔雀、兩面共に同様なり。金剛は蓬萊の圖にて表は松に鶴、裏は波に龜と竹。喜多は蓬萊。

おきなかざり〔翁飾〕翁を演ずる當日、樂屋に翁の面を神體の如く安置し、神酒神饌を供へて祭ること。

おきなつき〔翁附〕脇能の前に翁を据ゑて演ずるを云ふ。脇能中、ワキ役が僧なる輪藏、道明寺の二番は翁附に用ひられず。

おきななし〔翁ナシ〕翁附になし得べき脇能に翁を附けず、而かも翁に代りて森嚴なる演式をなす場合の脇能を「翁ナシ」と稱し、特にワキ役が翁のシテたる程の重任を加ふ。「翁無シ」とせず「翁ナシ」と假名書するを故實とす。

おきなのおもて〔翁ノ面〕翁に限りて用ふる白

式尉の面。「はくしきじょう」参照。

おきなのみ〔翁ノ舞〕「カミガク」(神樂)と稱し、翁の舞ふ舞。小鼓を主とし、笛のあしらひによつて舞ふ。大鼓と太鼓とは全く關係せず。舞としては簡單なるものにて、先づ靜に目附柱へ行き足を留め、上を見る心にて三つ拍子踏む。之を天の拍子と稱す。次に脇柱へ行き、下を見る心にて三つ拍子踏む。之を地の拍子と稱す。茲にて位進みて左へ廻り、大小前より正面に出で、左袖を被き、扇を面に當て、一つ廻り、更に袖を巻き上げて直ぐ下し、又三つ拍子踏む。之を人の拍子と稱す。この天地人の三拍子は斯道の祕事とせらるゝものなり。

おきなゑばし〔翁烏帽子〕黒色の立烏帽子、白色の紐をつけて顎の下に結ぶ。翁に用ふる故此の名あり。又蟻通のシテ、大佛供養の後シテ等にも用ふ。

おくり〔オクリ、送り〕(拍)二個拍子一連の句

を云ふ。即ち本地の四分の一に相當す。オクリの本格形は四文字(本間)なるが、一字不足せる三文字のオクリ(ヤの間句)、一字増して五文字のオクリ(半聲句)又二文字にしてその第一字に、廻シ、振り、引キ等の節ありて準三字に扱はるゝオクリ、其他變種のオクリもあり。

おくりこみ〔送込〕(型)間の狂言方が、下に居たるシテを立たしめ、その背後より靜に樂屋へ送り込むこと。天鼓、藤戸等の中入にあり。

おくりこみ〔オクリ込〕(囉)又「アシラヒ込」とも云ふ。シテの退場を送る爲に打つ大小鼓のアシラヒ囉子。手配は「アシラヒ出」に同じ。

おさへ〔抑へ〕(節)▽落節の肩に「ヲ」を記したるもの。柔吟に於ては、上音又稀に中音の所においていづれも其の一字を抑へて謡ふ。上音にあるものは「上ノ抑へ」と稱し、

音位を中ノウキに取るも、聊か力の籠れる點「中落チ」と異なり。剛吟に於ては、道行の終り方二三句前なる中音の句末二字に「抑へ」あり、其の二音だけ抑へて謡ふ。又他の章にても中音の句末の一字に附せらるゝものあり、いづれも中音より低く、下ノ中より少し高し。又稀に上音の句末に附せらるゝものあり。又剛吟にては、地渡し前の一字落及び二字落の末尾を抑へて謡ふ。

おち〔落チ〕(節)ヲ「落シ」ともいふ。「落チ、落シ」の頭假名を取れるもの。その一音を低く落して謡ふべきことを示す記號。常に「落節」又は「振り」の眞下に附せられ、稀には「廻シ」又は「吞ミ節」の裾に附せらるゝことあり。剛吟に於ては、下の音位にある時は呂に落し、下ノ中に在る時は下に、中音にある時は下ノ中に、上音に在る時は中音に落すものとす。但し剛吟の上音と中音とは音位の差程微少なるを以て、「ヲ」の上音にある時は

恰も柔吟のスクヒの要領に扱ひて確かりと謡ふ。柔吟に於ては、下音に在る時は呂に、中音にある時は下音に落す。而して上音に在る時に限りて二様あり、一を「スクヒ落チ」といひ、一を「中落チ」といふ。各其項参照。

おちぶし〔落節〕(節) 基本的符章の一。又「下ガ節」ともいひ、「落ゴマ」とも稱す。音を落して謡ふ場合、音を抑へて謡ふ場合、小節に謡ふ場合、當りの心持にて謡ふ場合、時ありては音を浮かす場合にも用ひらる。音位を落して謡ふ場合には、この落節に「ヲ」又は「下」の補助的記號を添ふるを例とすれど、「サシ」又は「カ、ル」の章中に在る「一字落」「二字落」等の如きは單に落ゴマのみにて補助的記號を附せざるを例とす。

おつ〔乙〕大鼓にては、軽く打ちてその手を革より直ぐは離さぬ打方をする音。○(ドン)を以て標示す。小鼓にては、打つと共に調への握りを弛めることにより發する音。○(ホ)を

以て標示す。

おつみつぢ〔乙三地〕小鼓の手。單に「三地」とも云ふ。「三地」を見よ。

おにあふぎ〔鬼扇〕(小道具) 道成寺、葵上に限りて用ふる中啓。両面共に赤地に大きく一輪牡丹を描く。

おにがはら〔鬼瓦〕(狂言) 久しく都に詰め訴訟叶ひて歸國せんとする殿、冠者を連れて常に信仰せる因幡堂に暇乞に參詣し、屋根の鬼瓦を見て泣く。冠者何故ぞと問へば、女房どもの顔を思ひ出したと云ふ。好き仕合せにて歸國するに泣く所でなし、目出度う笑つて下向せんと、更めて笑ふ。(三流)

おにしみづ〔鬼清水〕(狂言) 單に「清水」とも。殿、茶の湯の清水を汲み來れと冠者に命ず。冠者夜晝度々の使を迷惑がり、鬼が出たと叫びて歸り來る。殿、實否を正さんと水汲みに行けば、果して鬼現れ、取つて喰はうと云ひ、散々嚇されて逃げ歸る。殿、疑を起して再

び行くに、復鬼出で來る。鬼と冠者との聲似たるに氣つき、遂に質鬼露見す。(三流)

おにぞろひ〔鬼揃〕紅葉狩の小書(觀)。ツレ多數出で、クセの舞を重ツレ舞ひ、中之舞も初段まで重ツレ、其後シテ續いて舞ふ。後場は前のツレと同じ人數の鬼出づ。

おにのつち〔鬼ノ槌〕(狂言) 蓬萊の鬼、大和の辰の市へ行く途次、里人二人行き合ひ、鬼と心易くなり、酒盛して鬼を眠らせ、打出の小槌、隠れ簀を奪ふ。(驚)

おにのままこ〔鬼ノ繼子〕(狂言) 女、子を抱きて親里へ行かんとて播磨の印南野に通るかゝりしに、日暮れ、鬼出で、食はうと云ふ。鬼助を乞ふ女を見れば好き女なり、女房にし、子供は養子にせんとて抱き上げ、蓬萊の島に參らうの囃物にて行く途中、女、鬼を顧かし、子を取りて逃ぐ、鬼、油斷してこかされた、此の笠なりと取つて行かうと追ひ入る。又「鬼の養子」ともいふ。(三流)

おにももの〔鬼物〕シテが男體又は女體の鬼神なる曲の總稱。五番目の大部分之に屬す。又所謂鬼神ならざるも猥惡なる畜類等にして鬼形に扮するものも亦鬼物に數ふ。

おはらごころ〔大原御幸〕(謡曲) 三番目。シテ建禮門院、ツレ阿波内侍、大納言局、後白河法皇、ワキ萬里小路中納言、ワキツレ朝臣トモ供奉官人。後白河法皇、大原の寂光院に建禮門院を訪ひ給ひ、門院は平家の没落、六道廻りの體験を語り給ふ。(觀、實、剛、喜、梅) 喜多にては「小原御幸」。

おひ〔笈〕(小道具) 強力の笈に擬したるもの。安宅の強力、子方用ふ。觀世にては前方の稍高き箱形、錦にて包み、背負ふ爲に前に紅段にて卷きたる輪を取り付く、他流にはそれぞれ多少の相異あり。

おひしば〔負柴〕(小道具) 萩を束ね、中程を白布にて巻き、紐をつく。右の肩より左の脇へ斜に背負ひて出づ。樵夫を表はす爲に用ふ。

飛雲、龍虎等の前シテ等。又樵夫ならずとも、山に入りて柴を取りたる體を示す場合に用ふ。安達原の後シテの如し。

おひやし〔御冷〕〔狂言〕主と冠者、清水へ參詣し、主、冠者に瀧へ下りておひやを汲んで來いと命ず、冠者、おひやとはいはぬ、みづで御座ると、互に古歌を擧げて云ひ争ふ。(泉、鷺)

おほあくじよう〔大悪尉〕〔面〕悪尉の一種にて、類中比較的怪奇の度の淺き面相。觀世にては、玉井、寢覺、東方朔、實生にては、玉井、綾鼓等の後シテに用ふ。

おほえやま〔大江山〕〔謡曲〕五番目。シテ酒呑童子、ワキ源頼光、ワキツレ頼光の家臣、狂言能力、童子の侍女。源頼光の一行、山伏姿に假裝し、丹波國大江山に入り、酒呑童子を退治することを作る。(觀、實、剛、喜、梅)

おほかは〔大革、大皮〕大鼓の別稱。

おほがへし〔大返シ〕小書。柏崎(觀、實、春剛)花筐(觀、實、剛)雲雀山(觀、剛)鳥

追舟(觀)景清(剛)にある替の型。囃子の手より出でたる名稱。柏崎の「たのもしや」花筐の「恐ろしや」、雲雀山の「色々の」鳥追舟の「打つ鼓」などの初句に、シテ拍子六つ右へ乗込むと、地は返しを直ぐには謡はず、其間に所謂大返シなる鼓の特殊の手入り、それに連れてシテ出で、左へ取り、常座に歸り、ワキを指すと、茲にて地が返シ句を謡ひ、シテ拍子七つ踏み返して次の型に移る。

おほくち〔大口〕〔裝束〕生絹にて仕立てたる袴の一種。特に後側は緯を大きく引揃へたる糸にて厚く硬く織りたるもの。白を普通とし、赤、紫、萌黄、淺黄などの無地、又模様のあるもあり。それ〴〵その名稱を異にす。

白大口——最も多く使用せらるゝもの。神能の前シテ、ワキは大臣、僧、男、山伏を問はず、大口を用ふるものは總べて白なり。又緋大口なるべきツレの天女も、又色大口、模様大口なるべきものも白にて代用して差支な

し。

緋大口——身分ある女に用ふ。東北、江口、誓願寺、右近、吳服、半菰、采女、野宮、定家、夕顔、草子洗等の後シテ、楊貴妃、住吉詣等のシテ、及び神能のツレ天女など皆緋大口を用ふ。

色大口——緋大口を除きて、其他の色物を色大口と稱す。淺黄色は、自然居士、東岸居士、千手の重衡、通小町、女郎花の後など、又遊行柳、西行櫻にも用ふることあり。概して淺黄は男に多く、女にては六浦、求塚など少数用ふることあるのみ。萌黄色は、老松、白樂天等の老體の神、檜垣、嫉捨などの老女の後などに用ふ。紫色は、芭蕉、六浦など精物にも用ひ、修羅物の後にも模様大口に代用することあり。紺色は、安宅、鞍馬天狗、善界等の山伏姿のシテ之を用ふ。

模様大口——清經、忠度、經政、敦盛等の公達物に用ふ。但し他の色大口に代用するも差

支なし。

おほくちそう〔大口僧〕大口を著くる僧ワキを云ふ。旅僧ならざるもの、位あるもの等、その例多し。

おほくらりう〔大倉流〕囃子方大鼓と小鼓との二家あり。

大鼓の大倉家——金春家の支族。金春禪竹の弟大藏九郎を此の流の初代とす。二代道智は藝學共に優れ、豊臣秀吉の寵を受けたるが爲に、徳川家康に召されたれども應ぜず、南都に餘生を送りたりと云ふ。五代仁右衛門に至り、金春大夫の勧めにより尾侯徳川義直に仕へ、奈良在住のまゝ維新まで尾州侯の祿を食み繁次郎に及ぶ、當主はその息宣利。但し、觀梅問題の爲め諸流より家元を取り上げ、目下小鼓家喜太郎預りとなり居れり。

小鼓の大倉家——大鼓の大倉家と同族にて、金春禪竹の弟大藏九郎を初代とし、二代道智、その養子六藏に至り小鼓に更はる。六藏

後長右衛門と改め、法名宗悦と號す。現家元十三代喜太郎。

おほくらりう〔大藏流〕狂言の一流。金春禪竹の末子金春四郎次郎を流祖とす。四郎次郎は日吉彌右衛門より狂言の相傳を受く。其の子彌太郎、宇治に住し、宇治を姓とす。後金春座附の頭取となりて大藏と改姓し、大永四年大和多武峯八講の能の時大夫號を許さる。明治となり家元斷絶し、現時東京の山本東次郎、京都の茂山千五郎等此の流の藝事を管掌維持す。

おほざいり〔大左右〕〔型〕「左右」を見よ。

おほじし〔大獅子〕石橋の小書。(觀)前場より牡丹の作物を出し、後は獅子白一人赤三人(又は五人)出で、舞臺と橋懸とに別れて一齊に舞ふ。

おほづつみ〔大鼓〕能に用ふる四樂器の一。又「大革」〔大胴〕と別稱す。大鼓の胴は主に櫻木にて作る。胴の全長九寸五分位。兩端の椀

形部を「乳袋」と云ひ、之を連絡する筒形部を「棹」又は「巢合」と云ふ。「棹」の外形は二の曲線が兩端より反對に反り上り、中央部に於て兩曲線の相會する所に竹の節の如き割り彫りあり。之を「節」と云ふ。「棹」の丈三寸三分位。兩極の直徑一寸四分位。「節」の眞中の直徑一寸九分位。「乳袋」の丈は三寸二分位。「革口」〔革の裏面へ當る部分〕の厚さは四分四五厘位。その外圓の直徑三寸九分位。その内圓即ち「受口」の直徑は三寸位。「乳袋」の内面を「受ケ」又は「海」と云ふ。深さ普通二寸四分位。内壁の恰好は大抵眞直なる漏斗形なり。「棹」の内面を「巢」と稱し、中央部幾分狭くなりて「音越」の山をなせり。革は牛皮又は馬皮を用ひ、小鼓の革より厚し。「縁」の内に鐵輪あり。革は周縁より折り返して之を包む。縁を綴る縫目を「千綴」、その内方に沿ふ調べ緒の通し孔(六孔)を「調べ孔」。裏面に胴の簸る所を「胴當り」、「胴

當り」の外周を縫ふ綴目を「十六」、「十六」の部分革にて厚く盛り上りたる所を「腰敷」と云ふ。大鼓の革は數回使用すれば廢物とし、いつも新革を用ふ。又常に炭火にて焙じ上げ乾燥せしめて打つ。大鼓は革を胴へ強く締め當つる故、「調べ緒」は麻の太く撚られたるを用ふ。「調べ緒」の一筋は調べ孔を通して二枚の革の間を千鳥掛にするもの、之を「豎調」と云ふ。今一筋は横に掛くれども、裝飾的に掛くるものにて之を「胴繩」と云ふ。此の二種の調べ緒は何れも朱色を用ふ。又「豎調」數條を更に堅く締め束ぬる打紐あり。之を「小締」と云ふ。

大鼓は左手に持ち、腰に構へて、右手を大きく廣げて打つ。

大鼓の符號——大鼓打音の符號左の如し。
△(チョン)大きく強く打ちて「チョン」と發する音を示す。「頭」又は「甲」とも稱す。實際上には大小高低の差あり。

▲(ツ)小さく且つ軽く打つ音を示す。前の△を小さく軽くしたるもの。之を「小音の甲」とも「刻ミ」とも稱す。

○(ドン)習慣上ドンと呼稱すれども、實際上大鼓がドンと發音するにあらず。前の▲と略ぼ同様なるが、打ちたる音を手にて抑へて響かざるを特色とす。依て之を「乙」と稱す。打つ位置は本地の第八拍。トリの第四拍、片地の第六拍に限る。

大鼓の掛聲——「ヤ」「ハ」「イヤ」「ヨイ」の四種と、外に「ハホンヤア」の特殊なるものあり。

おほとびで〔大飛出〕〔面〕目大きくして圓く、口大きく開きたる面。朱塗と金泥とあり。各流にて賀茂、嵐山、國栖の後に用ふ。觀世にては其他江島の後にも用ふ。

おほのみ〔大呑ミ〕〔節〕「呑ミ節」の右肩に「大」の字を添記したるものと、「呑ミ節」の内部に「大」の字を記入したるものと二種あり。

等しく大呑ミと稱すれども、謡ひ方に差異あり。

ち 字數又は拍子上の關係により普通の呑ミ節よりも大きく謡ふ。又剛吟中音の句末に限りてあるものは俗に「草ノ大呑ミ」と稱す。邯鄲の「長生殿の裏には」の「は」、養老の「唯此水に残れり」の「り」の如き其一例にて、常の呑ミ節の前に振り又は小廻シを附したるが如き謡ひ方をなす。

おほのり 強吟中音の句末に限りて稀にあり、「眞ノ大呑ミ」と稱す。頼政の「上に立つも」の「も」通小町の「我が袂も」の「も」の如き其の一例にて、常の呑ミ節の前に肩中を附けたる如き謡ひ方をなす。

おほのり 大乗り、大ノリ（拍）謡曲文七五調の上の七文字へ八個拍子、下の五文字へ八個拍子といふ如く、二連に配分する拍子組織を「大ノリ」又は單に「ノリ地」と云ふ。八個拍子に對して十二文字を配分したる「平ノリ」

よりは、八個拍子に對して七文字又は五文字を配分したるものは其の拍子間隔異なり。暢び／＼として大きく乗る謡ひぶりとなるが故に「大ノリ」と稱するなり。

おほはぎしはや 大萩柴屋（作物）六尺に三尺の萩柴屋。三方を萩柴にて圍ひ、一方明け放しにす。寶生、喜多の大蛇に用ふ。

おほべし 大癡（囃）後シテの出場に先き立ち囃す囃子事の一つ。笛（拍子合）主にして大小太鼓の之に付き合ふもの。早笛の靜かにして重き如きものなり。天狗物の外、玉井、皇帝、鍾馗にもあり。大癡は元來天狗に用ふる面の名にて、天狗の出づるに早笛にては天狗らしき感なきが故に、別に豪宕なる囃子を案出し、面の名を其儘囃子事の名に轉用したるなり。

おほべし 大癡見（面）異常に大きな面にて、口をむツと結ぶ。「ベシミ」とは即ち口を結ぶの謂なり。各流とも、鞍馬天狗、善界、

大會、車僧等の後シテ天狗に用ふ。

おほべしもの 大癡物「大癡見」の面を着くる曲の總稱。天狗物に同じ。

おほまはし 大廻シ（節）「小廻シ」の反對にて、廻シを常よりも大きく謡ふもの。廻シ節の右肩に大の字を添記す。

おほやしる 大社（謡曲）脇能。シテ杵築大神、ツレ天女、ツレ龍神、ワキ朝臣。毎年十月出雲に國中の神々集ひ給ふにより、他國にては神無月といひ、出雲にては神有月といひて神事あり。朝臣之に參詣して龍神が小龍を捧ぐる奇特を見る。（觀、剛、梅）

おほわらや 大藁屋（作物）一疊臺一杯の大ききなる藁屋。實生の大蛇に用ふ。觀世にては之に青蔦を這はして大原御幸に、又紅葉蔦をまとひ三方に菊花の垣を作りて枕慈童に用ふることあり。

おまく 御幕 出役が鏡ノ間より橋懸へ出でんとする時、幕を揚げさす爲の呼び言葉。又揚

幕の敬稱。「あけまく」参照。

おもて 面 演能の時、シテ又はツレの顔にかくるもの。直面と稱して面を着けざる役の外、大直面を用ふ。ワキ及び子方は總べて面を着けず。但し狂言には面を着くるものあり。

面の作を神作、十作、六作、古作、中作、中作以後に分つ。猶刀劍家の古刀新刀など區別して評價するが如し。

神作——聖德太子、淡海公、弘法大師、春日。

十作——日光、彌勒、夜叉、福原文藏、石川龍右衛門、赤鶴重政、日水宗忠、越智吉舟、小牛清光、徳若忠政。（人名に異説あり）

六作——増阿彌久次、福來石王兵衛、春若、寶來、千種、三光坊。

古作——般若坊、眞角、東江、千世若、ヒコイシ、心能、虎明、等月。

中作——愛宕、慈恩院、宮野、財蓮、吉常院

智恩坊。

中作以後——角ノ坊、ダンツマ、山田嘉右衛門、野田新助、棒屋彌十郎。

面の種類——面には一曲に限りて用ふるものと、數曲に併用せらるゝものとあり。老人の類、男の類、女の類、變化の類などは數曲に併用せらるゝものなり。現今用ひらるゝ面の種類凡そ左の如し。

老翁(尉)——白式尉、小尉又小牛尉、石王尉、朝倉尉、笑尉、三光尉、皺尉、小惡尉、大惡尉、茗荷惡尉、鼻瘤惡尉、鷲鼻惡尉、重荷惡尉等

老婆——姥、老女、檜垣女、小町、山姥等。

男——中將、平太、今若、若男、邯鄲男、十六、敦盛、慈童、童子、喝食、俊寛、頼政、

瘦男、河津、栗男、三日月、怪士、千種、

眞角、筋男、鷹、男増髪、錦木男等

盲目——弱法師、蟬丸、景清。

女——小面、若女、増、孫次郎、萬媚、近江

女、増、泣増、十寸髮女、曲見、深井、浅井、泥眼、鐵輪女、靈女、瘦女、生成、橋姫等。

神佛——天神、神體、釋迦、不動等。

鬼畜——大飛出、小飛出、泥小飛出、猿飛出、

小猿飛出、釣眼、黒髭、泥黒髭、大癡見、

小癡見、長靈癡見、熊坂、黒癡見、牙癡見、

髭癡見、獅子口、小獅子、鬻しん、般若、眞蛇

泥眼、狐蛇、男蛇、野干、狸々、鷲等。

おもてつかふ〔面使フ〕(型)面を動かして何か

物を見る型。其の使ひ方に二様あり。一は先

づ左方へ面を使ひ、次に逆に右方へ使ひ、次

に眞中即ち正面にて面を留む。他の一は前と

反對に、先づ右方へ使ひ、次に左方に、終り

に眞中にて留む。又、以上の使ひ方によら

ず、左ならば左一方、右ならば右一方へ面を

動かす場合を、どこそこを「見廻ス」と云

ふ。

おもてをきる〔面ヲ切ル〕面使ひのキビ〜と

強き扱ひ方を云ふ。之は必ずしも物を見る爲ならず、凜としたる印象を興へんとする藝術効果の目的よりすること多し。

おもならひ〔重習〕習物中特に重しとする物。

「ならひもの」を見よ。

おもに〔重荷〕觀世流の戀重荷を梅若流にて重荷と改稱す。

おもに〔重荷〕(作物)高さ八寸七分、中九寸五分、長さ一尺五寸程の箱を錦にて包み、紺木

綿二反を繩になひて、キの字掛けに縛りたるもの。戀重荷に用ふ。

おもにあくじよう〔重荷惡尉〕(面)觀世にて戀

重荷の後シテに用ふる面。

おもひたちので〔思立之出〕融の小書(協方)。

「思ひ立つ心ぞしるべ」と謡ひながら幕を出づるなり。

おろしあふぎ〔下シ扇〕(型)「霞の扇」の別稱。

おんぎよくむこ〔音曲聲〕(狂言)「吟聲」に同じ。

かいこう〔開口〕舊幕時代に、禁裡、江戸幕

府、京都本願寺に於ける大禮能の場合、協能

の開始に臨み、先づワキが開口文を謡吟する

式にて、脇役の尤も重しとするものなり。開

口之式にては、協能の次第名告の順序を顛倒

し、開口、名告、次第、道行の順に變ず。開

口文は其の能の都度、豫め上司より作文して

下げられたるを、脇役の者節附して吟するな

り。

かうう〔項羽〕(謡曲)五番目。シテ項羽の靈、

ツレ虞氏の靈、ワキ草刈男。項羽の亡靈、烏

江にて草刈男に昔を語ることを作る。(六流)

がうぎん〔剛吟〕謡曲吟聲の一種、「強吟」又は

略して「ツヨ」といひ、謡本には「ツヨク」

と記入するを例とす。剛吟の音調は、森嚴、

豪宕、悽愴等の氣分を表すに適し、神能物、

修羅物、現在男物、鬼物等に用ひらる。而して一曲を通じて剛吟なるもあれば、剛吟柔吟相半ばするもあり。又曲中の一二句のみ他の吟を交ふるもあり。

剛吟の音階は柔吟と異なつて、「上」「中」「下ノ中」「下」の四音階を基本とし、「上」の上「カングリ」「クリ」「下」の下に「呂」の三音階、通計七音階より成る。此の七音階を圖表をば左の如し。

(カングリ)クリ (上) (中) (下ノ中) (下) (呂)

剛吟にては「中」と「下ノ中」と「下」との音階の差程は高低明瞭なれども、「上」と「中」とに限りて他の音階の如く判然たる高低を有せず、音位頗る接近せるものなり、たゞ上昇の餘韻を有すると下降の餘韻を有するるとによりて區別するのみ。

かうじ〔柑子〕(狂言) 大名、冠者を召し、昨夜預けたる柑子を渡せと云ふに、冠者、それを食ひ

しことを面白く言譯することを作る。(三流) かうじだはら〔柑子俵〕(狂言) 柑子買ひの臆病男、柑子を買ひ俵に入れて貰ふ。賣り手の子、柑子を盗み食ひ、風流の面を着て、潜に俵の中に入る、柑子買、俵を受取り、歸途山中に日暮れ道に迷ふと、俵の中より子供指圖し、果はさあ食はうと云ふ。男、柑子が鬼になつたと恐れて逃ぐ。(泉、鷺)

かうせいじらうりう〔幸清次郎流〕小鼓の一流。幸流二代正能の次男久次郎友能より分れて一流を樹てたるもの。幸本流(五郎次郎流)に對して清次郎流といひ、略して幸清流とも呼ばる。十二代清次郎は奇骨を以て鳴り、技藝秀拔、波瀾に富む一生を送りたる名人なり。現十四代義太郎はその孫なり。

かうやくねり〔膏藥煉〕(狂言) 鎌倉の膏藥煉、都の膏藥煉と出合ひ、互に素姓を聞合ひ、系圖比べをなす。系圖には勝負なしとて、藥味を明し合ひ、膏藥を鼻の尖につけて吸合せを

なす。都、鎌倉を引こかして去る、鎌倉、今一度と跡を追ふ。(三流)

かうやものぐるひ〔高野物狂〕(謡曲) 四番目。シテ高師四郎。子方平松春滿、ワキ高野山の僧、狂言平松ノ下人。平松の家臣高師四郎、主君の忘形見春滿丸が書置して遁世せしを悲み、狂氣して尋ね歩き、遂に高野山にて廻り逢ふことを作る。(觀、實、喜)

かうりう〔幸流〕囃子方小鼓の一流。幸の本流、分派清次郎流に對して五郎次郎流と呼ぶ。流祖は四郎次郎忠能、道性と號す。二代目五郎次郎正能、月軒と號す。二子あり、長子は三代目小左衛門、次子は久次郎友能、これより幸清次郎流分る。現家元悟朗は三須錦吾の養孫、諸流の推輓により十七代家元を繼ぐ。

かかつて〔カカツテ〕又は「氣ヲカケテ」と云ふ。勢ひて謡ふべきことを示す謡方の用語。勢ふといふも荒々しくなるにあらず、氣を乗

せかけて謡ふの謂なり。

かかへあふぎ〔抱へ扇〕(型) 右手に構へたる扇の手の内を緩めて上部の親骨を内側へ向けて下げ、扇を平にすると同時に其儘右の方へ少し放すやうにして左足右足と二足出で、此の動作一杯に扇を平にしたるまゝ左の肩へ上げ、身を少し左へ引いて扇面に對向する方を見る。此の型は「雲ノ扇」と反對に右方を見る時になす。

かがみ〔鏡〕(小道具) 圓形の鏡、野守の後シテ持つ。

かがみいた〔鏡板〕能舞臺に向つて眞正面奥、後座の羽目板、及びそれと矩の手なる笛座側の羽目板を云ふ。正面の鏡板には老松の繪、側面には若竹の繪を描く。

かがみだい〔鏡臺〕(作物) 羯鼓臺に似たるものにて上に鏡を載す。皇帝、昭君、松山鏡等に用ふ。

かがみのま〔鏡之間〕能舞臺の樂屋より橋懸へ

出づる手前の板張の一室。此處に姿見の大鏡ありて、諸役者登場前に己の姿態裝束の整否を映し見るなり。故に鏡ノ間と稱す。

かがみをとこ〔鏡男〕〔狂言〕〔土産の鏡〕に同じ。

かかる〔カカル〕觀世流にて所謂「カ、ル」は謡曲を組織する一部の稱。寶生の「セル」喜多の「サシコエ」などに同じ。主として對者に向ひ謡ひかくる謡（對者も之に應じて謡ふる時は掛合となる）なるが、多く上音にて謡ひ出し、その節附及び發音の高さ、並に拍子に合はざること等、すべてサシに同じきも、サシは概ね對者の關係なき謡なり。觀世以外の諸流に於て所謂「カカル」は拍子にかゝる事、即ち拍子に合はすることを云ふ。

かがりぶね〔篝舟〕〔作物〕舟の臺輪より細き竹を立て、篝火をさげたるもの。通盛に用ふ。

かきつばた〔杜若〕〔謡曲〕三番目。シテ杜若の精。ワキ旅僧。旅僧三河國八橋にて業平に歌

はれし杜若の精に逢ひ、成佛せしむることを作る。（六流）

かきやまぶし〔柿山伏〕〔狂言〕大峰葛城より下向の山伏、途中物欲しくなり、柿の木に登りて盗み喰ふ。柿主、之を見付け、なぶり物にせんとて、猿が居ると云へば山伏猿の眞似をし、猿かと思へば犬だといへば、犬の鳴聲をし、犬かと思へば鳶だといへば、飛ぶ眞似して木より落ち腰を抜かし、却つて腹立ちて山伏の手柄に目に物見せんと祈りをなす。（三流）

かく〔樂〕俗人の舞樂に擬したる舞なりと云ふ。拍子のノリ好く、而も位の比較的靜なる舞。シテの仁體は、神靈、仙人、老翁、女性等様々あり。又扇を持ちて舞ふと唐團扇にて舞ふとあり。笛へ大小太鼓にて和すると大小鼓のみにて和するとあり。依つて「太鼓入の樂」と「大小鼓の樂」との別あり。
太鼓入の樂——鶴龜、寢覺、大社、輪藏、東

方朔、一角仙人、唐船、枕慈童、邯鄲、三笑等。

大小鼓の樂——天鼓、梅枝、富士太鼓の三番。
かくいり〔樂入〕絃上の小書（剛）。前シテは師

長より琵琶を渡され、越天樂の譜を彈す。小鼓と笛と琵琶と合奏するなり。此時後の舞を替ふる事あり。

かくしだぬき〔隠シ狸〕〔狂言〕主、冠者を呼び、昨夜捕りたる狸を渡せと云ふ。冠者、無しと偽り、狸を賣りに行く、主、跡をつけて市にて見付け、冠者を促して共に酒を飲み、強ひて舞を舞はす。冠者、狸を隠しながら舞ふ。主、左右へ廻れと責め、相舞にせうとて、終に狸を見付けて取上ぐ。（泉）一名「狸賣」

かくすい〔角水〕〔狂言〕舅、藝ありて和歌の心ある人を娘の聲にせんとて冠者に高札を打たす。候補者三人順次に來る。舅、舞をすゝめ更に歌を所望す。一の聲「播磨紙いかなる人

がかくすいて筆は走れど文字は止まる」二の聲「信濃なる成田の小田をかくすいて一もと植ゑて干本をぞ刈る」三の聲「西の海の千尋の網をかくすいて水は洩るれど魚は漏らさじ」舅感じ三の聲に娘と對面せしむ。立寄り被衣を取らすれば稀代の醜婦なり、驚き逃げ去る。（泉、鷺）鷺にては「角水聲」

かくや〔樂屋〕演能の仕度をする諸役者の詰所、能舞臺橋懸の裏より舞臺へ續ける室。諸役者は仕度終れば出演前「鏡の間」へ詰めて登場を待つ。
かぐら〔神樂〕神舞が男體の神の舞なるに對し神樂は女體の神の舞とも云ふべきものにて、シテ（稀にはツレ）の神女、天女、巫女の舞ふもの、拍子のノリ好く且つ豊かなる舞なり。笛主にして大小太鼓之に和す。普通三段にて其あとに二段の神舞を付け加ふ。其の神樂部分より神舞部分に移るを「直り」と云ひその直り方に依つて「地直り（幣捨）」と「段

直り」との別あり。又、神舞に直らずして神樂のみ五段なるもあり、之を「五段神樂（總神樂とも）」と稱す。

「地直り」を「幣捨」と云ふは、神樂三段幣を持ちて舞ひ、終りに幣を後見に渡す、これ「幣捨」にして、其後の神舞は扇にて舞ふ、これ「直り」なり。

神樂は龍田、三輪、卷絹（之には序の部分無し）、現在七面、其他、鱗形、室君、内外詣にもあり。繪馬は觀世にては前の神樂部分をつレ天女舞ひ、後の神舞をつレ力神舞ふ。喜多にては「女體」の小書の時然り。

かぐら「神樂」葛城の小書（實、剛、喜）常の序之舞替りて神樂となり、天冠に蔦紅葉をかざす。

かぐらどめ「神樂留」龍田の小書（觀）、神樂三段のみにて、後の直り部分無し。

かぐらのでん「神樂之傳」卷絹及び道明寺の小書（觀）。

かけきり「カケキリ、掛切」（囃）太鼓及び大鼓の簡單なる手。太鼓入りの處にては太鼓大鼓共に打ち。太鼓無しの處にては大鼓のみ打つ。此の手は拍子合の謠の中に多く用ひらるれど、拍子不合の謠より拍子合の謠に移る間にも屢々あり。此の場合には之を正しく聞きて謠ひ出す用意を要す。即ち拍子不合の謠の終りにカケキリありて、之を聞いて謠ひ出す謠は一般に大ノリ謠なり（大鼓のみのカケキリの後には平ノリもあり）。其の謠ひ出す謠は當然ヤア又はヤアの寸法にて、其の寸法を定むるがカケキリの手なり。

カケキリの前には主に太鼓は「刻上」又は「オロシ」、大鼓は「ツマケ」又は「オロシ」の手ありて、「カケキリ」單獨にて打出さるゝこと無し。

かけきりのま「カケキリの間」「ヤアの間」の異稱。

かけきよ「景清」（謠曲）四番目。シテ景清。ツ

レ景清の女人丸、トモ從者、ワキ里人。景清の女。日向に流されて盲目の乞食となれる父を尋ね行きて、八島の戦功の物語などを聞きて歸ることを作る。（六流）

かけきよ「景清」（面）盲目なる老人の面。景清一曲にのみ用ふ。

かけすはう「掛素袍」（裝束）素袍の下（袴）を穿かすして、大口の上に素袍の上ばかり着るを云ふ。簾、敦盛、知章、大佛供養の前シテ、春榮のシテ、望月、清經、柏崎等のワキ、卷絹の男などは是れなり。

かけて「カケテ」（謠方）又「前へカケテ」と云ふ。掛合の如き場合に、前の謠へ追ひかけて謠ふ。即ち相手の謠の最後の一字を謠ひ終るか終らぬうちに謠ひ出すを云ふ。

かけて「カケテ」（拍子）中ノリ地中、普通ならば當るヤ又はヤの間となるべき句格なるに、その間を取らずして、本間（即ち間ナシ）に出づることを云ふ。

かけて、や「カケテ、ヤ」（拍子）「ヤの間」の句を技巧上「本間」に近づけて謠ふこと。結果の上にては「當るヤの間」に等しくなるもの多し。

かけて、やあ「カケテ、ヤア」（拍子）「ヤアの間」の句を技巧上「ヤの間」に近づけて謠ふこと。

かけて、やを「カケテ、ヤヲ」（拍子）「ヤアの間」の句を技巧上「ヤアの間」に近づけて謠ふこと。結果の上にては「ヤア、ハヅシテ」と變りなし。

かけて、やをは「カケテ、ヤヲハ」（拍子）「ヤアの間」の句を取扱により「ヤアの間」に近づけて謠ふこと。「當るヤヲハ」に同じ。

かけひきたれ「掛直垂」（裝束）直垂の下（袴）を穿かすして、大口の上に直垂の上ばかり着るを云ふ。之には前身だけ腰帶を結び、後身を放し置くこと多し。小袖會我、夜討會我的兄弟、盛久、蘆刈の物着後は掛直垂なり。

かけり〔カケリ、翔〕(型)「イロエ」又は「立廻」に似たる所あれど、其の趣を異にし、大小鼓を主に、笛之に和す。(太鼓の無きを原則とす、但し一二の例外あり)。普通大小鼓の「カケリ」の型は、常座より目附柱へ行き、角取り左へ大きく廻りて脇座の前へ行き、身を更へ大小の方を向くと、大小鼓急調に變る。其のシカケに誘はれて大小前へ行き、廻り返して開き、更に乗込み開き、又角の方へ出で、大小の方を向き、再びシカケに誘はれて常座へ行き、廻り返し、左右打込み開く順序なり。(太鼓入にては型之に異なれり)。概して修羅物と狂物とにあり。尤も、その型は兩者同じ事ながら、気分は全く相違せり。大小鼓のカケリ——修羅物にては、田村、忠度、八島、通盛、經政、箴等。狂物にては、班女、雲雀山、水無月祓、玉葛、浮舟、三井寺、柏崎、櫻川、花筐、角田川、蟬丸、女郎花、歌占、蘆刈、高野物狂等。善知鳥にもカ

ケリあれど、前記の型と全く異なる。)太鼓入のカケリ——阿漕(立廻ともイロエとも)山姥(立廻りともハタラキとも)。かけりいり〔翔入〕正尊の小書(觀)。後に斬組の囃子(大小鼓)入る、その囃子を「カケリ」と呼ぶなり。但し前項の「カケリ」とは型全く異り、單に數人の斬合わざなり。かさ〔笠〕〔小道具〕黒塗のかぶり笠にて、之に男笠と女笠とあり。男笠は大佛供養の前シテ、望月、鉢木、清經のワキ、通小町、善知鳥の後シテ、春榮のシテ等。女笠は鐵輪、葛城の前シテ、富士太鼓、角田川のシテなどに用ふ。(但、葛城には笠の上に雪綿を着く)かさ〔傘〕〔小道具〕柄の長き爪折の傘。蟻通に用ふ。かざし〔カザシ、翳〕(型)先づ指し扇をし、次に其の扇を持てる手を水平に右方へ開き、十分開き切つたる所にて扇を持ち替へ、徐に扇をカザシ行く。カザシは扇にて顔を高く隠く

す如き様にするなり。扇を持ち更ふる時には今迄内側なりし地紙は外側へ向け、今迄外側なりし地紙は内側へ向く、同時に要尻を持つ手も變る。翳し行く時通例扇を伏せず。又扇を伏せて翳すこともあり。又上を見て翳すもあり。「カザシ」はカザシて左へ廻ると云ふ如く連続的の型なり。かざし〔カザシ〕昔時高貴の人の姓名などの曲中にあるを憚り、原作者の作意に係らず、妄に辭句を改作したることあり。之をも「カザシ」と稱す。鉢木に「松はもとより烟にて、薪となるも理りや」とあるを徳川氏の松平姓に憚り「松はもとより常盤にて、薪となるは梅櫻」と謠ひ變へ、今日猶二三の流儀にて斯く謠へるが如き是れなり。かさねぶし〔重ネ節〕〔節〕直節二個を重ねたるものにして、直節の二倍の長さに引きて謠ふ。一句の半途に在るは少なく、廻シと連用して句末にあるもの多し。

かさのうちきり〔笠ノ打切〕(拍)又「アシラヒ打切」と稱す。笠を着たるワキ、或は笠無くともワキヅレを従へたるワキの道行の前などに多く用ふる打切の手なり。かさのした〔笠ノ下〕〔狂言〕「地藏舞」の一名。かさのだん〔笠之段〕芦刈の「あれ御覽ぜよ」より「おもしろや」までの一段を云ふ。一調謠五曲の一。かさので〔笠之出〕邯鄲の小書(寶)。シテ塗笠をかぶりて出づ。かさので〔傘之出〕邯鄲の小書(喜)、寶生の長柄に同じ。樂は盤渉に替る。かさのでん〔笠之傳〕三井寺の小書(剛)後シテ笠をかぶりて出づ。かざをりゑほし〔風折烏帽子〕(裝束)立烏帽子の頂を筋違に折り撓めたるもの。之に黒風折と金風折との二種あり。普通は黒風折を用ふ。金風折は仲光の滿仲、船辨慶及び正尊の判官の如き武將に多く用ふ。

かしこみのまひ〔恐之舞〕難波、七騎落、盛久小督の小書（観）

かしはざき〔柏崎〕〔謡曲〕四番目。シテ柏崎某の妻、子方花若、ワキ柏崎の臣小太郎、ツレ善光寺の僧。柏崎殿の妻、鎌倉にて夫は身まかり、一人子の花若遁世したる由を家臣小太郎より聞き、終に狂氣して善光寺に迷ひ行きしが、偶如來堂にて花若に廻り逢ふことを作る。（六流）

かしら〔頭〕〔装束〕役者の被る頭髮。前は顔に蔽ひかゝり、横は兩肩に及び、背後は背丈にも及ぶ程の長き假髪にて、之を單に「カシラ」と稱す。之に黒頭、赤頭、白頭の三種あり。各其の項参照。

かしら〔頭〕〔囃〕太鼓にては「テン」と打つ音。即ち撥を大きく振り上げ強く打ち響かす音を云ふ。符號「天」を用ふ。大鼓にては、大きく強く打ち「チョン」と發する音。又「甲」とも稱し、符號△を以て表

す。小鼓にては、強く打つ甲の音にて「タ」と響く音。符號△を以て表す。

囃子にて「頭」と云ふは、「イヤ」と聲をかけ（或は特にかけざるもあり）、以上の太鼓なり大小鼓なりの打つ粒を云ふ。

打出頭——前より引續きたる手にあらずして、先づ頭より打ち出して以下囃し續け、謡はその頭を聞いて謡ひ出すなり。

頭キク——頭を聞いて謡ひ出すこと。頭ニツク——又「頭當リ」とも「頭ニ當ル」とも云ふ。頭に當て、謡ひ出すこと。

かしらさす〔頭ヲ指ス〕〔型〕普通開キの型をしながらする型にて、扇をつぼめて居る時は、開キの左足を引き、右足を引きかけると扇を眞直に前へ出し、左足を引く頃に右肩の眞上へ上げ、今迄握りぬたる手の内を離して肩を後方へ倒す。又扇を廣げ居る時には、開キの左足を引くと共に今迄握りぬたる手の内

を離して地紙の端を下へ向けて垂らし、右足を引くと共に地紙面を前へ向けて出し、右肩の眞上まで上げ、左足を引くと共に扇を後方へ倒す。倒す時は更に手の内を緩めて、要の上を親指の端にて受け、要尻は他の四指の中間の凹みの處へ當るやうにす。

かすがりうじん〔春日龍神〕〔謡曲〕五番目。前シテ時風秀行、後シテ龍神、ワキ明恵上人。梅尾の明恵上人、渡唐入天の志ありて、春日明神に詣でたるに、明神奇特を現じて思ひ止まらしめ給ふことを作る。（六流）

かすまふ〔蚊相撲〕〔狂言〕大名、角力を抱へに冠者を都へ上す。途中近江の守山にて、究竟なる者を一人抱へて戻る。待ち受けたる大名、其者と手合するに、不意に氣を失うて倒る。不思議なる男は蚊の精なり。（三流）

れ」とも稱す。「國土にこれを」と扇を松の横に捨て又捨てずにも、後は橋懸の型となり、「霞に紛れて」と幕に入り、謡はそれにて止め、後を謡はず。ワキ留拍子踏む。

かすみのあふぎ〔霞ノ扇〕〔型〕廣げたる扇の要の處を持ち、高き所より前へ下すやうにする型。其の順序は、先づ右斜へ向き、左足右足と二足引きながら扇を後方へ遣り、正面へ向き直りながら扇を上げて來、全く向き直れば左足を引き着け、同時に扇を下して胸の前方向にて止む。又「下シ扇」とも云ふ。

かせづゑ〔鹿背杖〕〔小道具〕撞木杖に木の葉を附けたるもの。山姥の後シテ使用す。鞍馬天狗の白頭の時には檜の木の枝葉ある皮付の鹿背杖を用ふ。

かせん〔歌仙〕〔狂言〕大果報の者、歌仙の繪馬を玉津島明神に奉納し、社前に拜してゐると、その繪馬の人物、繪馬より抜け出で、車座となりて歌の會を始め。小町に味方するは僧正

通昭、他の歌仙は皆々二人をなぶる。(泉、驚)

かせん〔歌仙〕多人数の素謡會に番數の多きを必要とする場合、三十六歌仙に因みて、三十六番の謡を謡ふことあり、之を「歌仙」又は「歌仙謡」と稱し、又此の半數の十八番謡ふを「半歌仙」と稱す。

かたあげ〔肩上げ〕又「肩取ル」とも云ふ。水衣の袖付の肩筋に當る所を双方つまみ寄せ、襟の所にて糸にて結び置くを云ふ。高砂、弓八幡など大口を穿く神能の前の尉、八島、兼平など着流しの修羅物の前の尉、及び國栖、融等の尉も肩上げて出づ。肩上げは大抵中入前に其の糸を切りて肩を下ろす。

かたさゆう〔片左右〕(型)「左右」を見よ。

かたちゆう〔肩中〕(節) ャ、此の節は古來一定の名稱なかりしを、近時俗稱せるもの。剛吟の中音の章に限りてある節にて、中音より出で中程を突き込む如くに扱ひ、廻シ尻を一音

位隔てたる下音に落す。通常の「廻シ下ゲ」は廻シの前半中音ならば下ノ中に落すものなるが、此の節は下ノ中の一音位を隔て、下音まで下ぐるなり。觀世特有の節。

かたち〔片地〕(拍子)又「一ツ地」とも云ふ。六個拍子一連のもの。本地の四分の三に相當し、字數に於ても本地の約四分の三を以て本格とす。

かたとる〔肩取ル〕「肩上げ」に同じ。

かたぬぎ〔肩脱ギ〕法被又は長絹の右の袖をぬぎて疊み、後方へはさむこと。修羅物の後シテ、又龍神はシテ及びツレとも、其の他、錦木、船橋、松虫、鶴、小鍛冶などの後シテは肩をぬぐ。ワキも紅葉狩などは肩をぬぐ。但し左の袖なり。すべて弓を持つ者の肩ぬぎは左袖なり。

かたま〔片幕〕演能に於て、幕全部を掲げずして、幕の横を少しく捲りよするを云ふ。囃子方又は後見方が鏡ノ間より橋懸へ出るには

此の片幕なり。

かたみのでん〔筐之傳〕花筐の小書(觀)籠を打ち落されて「あらいまはし」と云ふ所を「あら勿體なの」と云ふ。其時籠はシテ取りて提ぐ。クルヒは扇を持たぬ方の片手へ籠を持ちかへくしながら舞ひ、イロエ前に置く。其他型の替る所多し。

かたり〔語〕シテ、ワキ又はツレが詞を以て一場の物語をなすを云ふ。シテ及びツレの語は多けれど、さまで重要ならず。ワキの語には其の役柄として頗る大切なる謡ひ所とするもの多し。角田川、道成寺、攝待、藤戸、鉢木七騎落等その例なり。

かたりあひ〔語間〕前後二場ある曲の前場中入の間に、後場への繋ぎとして、ワキに對し、狂言方單獨の「語り」をなすもの。これに「居語り」と「立語り」との二種あれども、一般に「語間」とは「居語」の方を指す。
かたをりど〔片折戸〕(作物)板にて臺を作り、

竹の柱を立て、藁屋根をつけ、萩の片折戸(一方のみ開く折戸)をつけたるもの。流儀により折戸は萩を用ひずして竹のみにて作るもあり。兩側に五枚の柴垣を並ぶ。柴垣も板にて臺を作り、竹を立て、萩柴を附く。小督に用ふ。

かちぐり〔勝栗〕(狂言)大和の葛下郡と高市郡との百姓、上堂へ上納に上り、葛下は野老芋、高市は勝栗の歌を詠む。(泉、驚)

かちしゆら〔勝修羅〕修羅物は多く敗軍の状を演ずるものなれども、田村、八島、箴の三番は勝軍の事を演ずるものなれば、勝修羅と稱す。祝言の能に用ひらるゝを以て「祝言の修羅」とも云ふ。

かつぎ〔被衣〕装束を着けたる上に頭より被る衣を云ふ。國栖、通小町のシテは無地鬘斗目を被り、夜討會我の五郎丸、橋辨慶の牛若は白水衣を被り出づ。

かつこ〔羯鼓〕(舞)シテ又稀に子方が、帯の上

邊に結び着けたる羯鼓を、兩手に持ちたる撥にて打ちながら舞ふ舞。初部と末部とを中之舞とし、其の中間に特殊なる羯鼓囃子挿まり、其の部分は殊に拍子のノリ好くして、恰も位の軽き「樂」の如き感あり。但し初部は全く中之舞に等しく、末部は中之舞を一層輕快に運ぶ。囃子は笛へ大小鼓和し、太鼓は加はず。自然居士、放下僧、花月、東岸居士、藤榮、望月（子方）にあり。

かつこ「羯鼓」(小道具) 小鼓を更に小さくしたる形のものにて、革には綺麗なる彩色を施せり。胸につけ、二本の撥にて打つ。又羯鼓臺に載せて飾るもあり。

かつこだい「羯鼓臺」(作物) 竹を組み立て櫓の様に作り、臺輪の上に立て、羯鼓を載せ、撥を添ふ。臺輪は白布にて巻き、其他は紅段にて巻き、竹と竹との間には紅段を千鳥に掛く。難波、天鼓、富士太鼓、梅枝等に用ふ。

かつこもの「羯鼓物」シテが羯鼓の舞を舞ふ

曲。自然居士、東岸居士、花月、放下僧、藤榮の五番。

かつこわさなべ「羯鼓炮碌」(狂言) 又「かつこほろろく」とも云ふ。「鍋八撥」に同じ。

がつし「合膝、臥膝」(型) 片膝づゝ下に突きて、前へ出づること。その順序は、先づ下に居立ち(左膝を立て、その膝頭の上に左手を載せ右手は下げ、臀部は右足の踵の上に附けず少し離す、俗に云ふ浮き腰に近し)此の準備的姿勢の次に、右の膝を立て替へながら前方へ其の一ト膝だけ出で、この動作と同時に右手を前へ出し、左手を下す。此時も居立ち居るなり。次に左の膝を立て替へながら前方へ其の一ト膝だけ出で、同時に右手を下し、左手を前へ出す。殆ど最初の準備的姿勢に似たれど、左手を前方へ出し居る所異なり。此時も居立ち居るなり。

がつしがへし「合膝返シ」(型)「ガツシ」しながらキリ、と廻ること。

かつしき「喝食」(面) 顔に前髪を切り下げたる毛書をなせる年若の面。自然居士、東岸居士

花月等に用ふ。前髪、毛書の大小形状によつて、大喝食、小喝食、銀杏喝食等の別あり。

かつしきあふぎ「喝食扇」(小道具) 花月以外の喝食物の用ふる中啓。觀世にては、白骨にて兩面共に村雲に月の繪、この繪を雲月と稱す。

かつしきかづら「喝食鬘」喝食の面を着くる者の被る鬘。普通の鬘と髪に分け方結び方を異にし、後ろの髪先をわがね返して結び垂る。

又鬘帯を用ひず。喝食物以外にても、蟬丸の蟬丸にも用ひ、又繪馬、三輪などの替の型に用ふることあり。

かつしきもの「喝食物」シテが喝食面を着る曲。自然居士、東岸居士、花月の三番。

がつしやう「合掌」(型) 兩手を合せて拜すること。但し普通の如く掌をピッタリ合すにあらず、指頭を寄するなり。扇を持てる時の合掌

は、扇のツマの方を後に、要尻を前にし、筆

を持つ如く、扇を左手と殆ど平行に持ち更へ(親骨は上下へ向けず左右に向け)左手と共に前へ出す。又前に扇の開きである時は、つぼめて骨の一ト間だけ明けて合掌す。手を下す時は先づ右手、次に左手と下す。

がつしやうどめ「合掌留」夕顔の小書(剛)、切の型替る。野宮の小書(觀、實、剛)破之舞の留に鳥居に扇置き合掌す。切の型も替る。杜若の小書(喜)、「すはや今こそ」と指し、大

小前に扇たゝみ合掌す。

かつぼ「合浦、合甫」(謡曲) 切能祝言物。シテ鮫人、ワキ里人。里人、鮫人といふ魚の命を救ひたるに、魚の精、報恩の爲に里人の家に至り、壽命長遠、息災延命の寶なる合浦の玉

を贈る。(觀世、梅若)

かづら「鬘、葛」女姿にかぶる假髪。真中より左右へ分け、耳を蔽ひ、後方にて元結もて結ぶ。其上に鬘帯と稱する鉢巻を締む。女は總

て之を着け、面を着けざる子方の女も着く。
かづらあふぎ〔鬘扇、葛扇〕(小道具) 鬘物即ち女シテの用ふる中啓。各流何れも黒骨色入り。觀世にては、表、唐美人の花車、裏、花車を正式とすれど、替模様種々あり。寶生にては櫻山又は簾に葵の繪。

かづらおび〔鬘帶、葛帶〕 鬘の上に締むる鉢卷。

かづらき〔葛城〕(謡曲) 三番目又四番目。シテ葛城の神(女體)ワキ山伏。葛城の神、役の行者の呪詛にあひて三熱の苦絶えざるを歎き、山伏に加持を乞ふことを作る。(六流)

かづらもの〔鬘物〕シテが女性なる曲の總稱。三番目物、略三番目物の大部分、四番目の女物等。

かづらをけ〔鬘桶〕(小道具) 又「腰桶」とも云ふ。もと鬘を入れ置く桶にて、役者の腰掛に用ふ。修羅物後シテの大部分、其他、松風、山姥等使用す。

かどのりう〔葛野流〕 唯子方大鼓の一流。流祖を葛野九郎兵衛定之と云ふ。大倉平藏に師承し、後一流を成すに至る。豊臣秀頼、徳川家康、紀伊侯頼宣に仕へ紀州家の抱へとなる。徳川秀忠に召されて公儀御用も勤む。現家系の人はいれど家藝に與らず、門流の川崎利吉、藝事を委托せられて管掌す。

かなめのまつ〔要ノ松〕 橋懸欄干前なる「一ノ松」の異稱。

かなづちざう〔金津地藏〕(狂言) 草庵の佛を求めんとて都へ上りたる田舎者、佛買はうと呼び歩く。すつば欺きて悴を地藏に拵へて渡す。田舎者、負うて下り、草庵に入れ、在所の者二人参りて香花を供ふ。子、香花はいやだ、饅頭が食ひたいと云ふ。在所の者、地藏が物言ひたりとて、酒を酌み交して興じ、地藏も踊り出す。(三流) 大藏にては「金津」

かなわ〔鐵輪〕(謡曲) 四番目。シテ女、後に鬼女、ワキ安倍晴明、ワキツレ下京の男。夫

に捨てられたる女、恨みの餘り、貴船の社に丑の時参りをして鬼となり、男と後妻とを呪ひ殺さんとしたるも、安倍晴明に祈られて果さず逃げ去る。(六流)

かなわ〔鐵輪〕(小道具) 鐵輪の後シテの頭上に戴くもの。五徳の鼎の三足に火を灯し、丑の時参りに擬したるもの。

かなわをんな〔鐵輪女〕(面) 寶生にて鐵輪の前シテに用ふ。

かなをか〔金岡〕(狂言) 天下に隠れもなき繪書きの金岡、禁中の上臈を見初め、現なく戀ひわぶる。金岡の妻之を思ひ止まらしめんとて、妾を上臈の如くくまどりて給はれと云ふ。金岡、妻を隈取り(舞)「いざく」さらばゑどらんと、くくとて、紅や白粉すりぬりたれど、下地は黒き山鳥、若しもや似ると又立歸り、丹花の唇、柔和の姿に、何とゑどれど此面は、戀しき人には似いで、狐のばけたに異ならず」と女を突き倒して逃ぐ。(泉、鶯)

かにやまぶし〔蟹山伏〕(狂言) 羽黒山の山伏、

大峰葛城より下向の途すがら、行力の自慢話を強力に話す折しも、異形の者出で来る。何者ぞと問へば、兩眼天にあり、一甲地にふす、大足二足小足八足、左行右行して遊ぶ者だが、汝が行力自慢する故現れ出たと云ふ。強力、金剛杖にて甲を破らんとして、却つて蟹にはさまれ、山伏祈れども効無く、蟹、二人を突き倒して去る。(三流)

かね〔鐘〕(作物) 竹にて下地を作り、緞子にて包み、龍頭をつけて鐘の形に擬したるもの。綱をつけて、舞臺の化粧棟に打ちたる滑車に釣り上げ、綱の端を笛柱にある鉄に通し置く。演技中、鐘を落す爲に十數貫の鉛を鐘の口廻りに入れ置く。又鐘の内には後シテに用ふる面、装束、小道具、其他、用意の鏡、水筒などを納め置く。道成寺に用ふ。

かねのだん〔鐘之段〕 三井寺の「かほどの聖人なりしだに」以下の一段。獨吟、仕舞、一調

に謡ふ。

かねのでん「鉦之傳」角田川の小書（剛）。念佛の鐘の打方替る。

かねのね「鉦ノ音」角田川の小書（觀）。念佛の鉦の打方に替りたる習あり。

かねのね「鐘ノ音」（狂言）相模三浦の者、悴の元服に刀を拵へんとて、冠者に鎌倉へ行き、かねのねを聞いて來たれと命す。冠者、鎌倉に行き、五大堂、壽福寺、建長寺を廻り極樂寺に詣で、各寺の鐘の音を聞いて歸る。主、黄金の値と云ひつけたにと叱り付く。（三流）

かねのひやうし「短ノ拍子」「音曲玉淵集」に出でたる一種の地拍子法。大小鼓を短がねに當て、寸尺につもりたるもの。本地を一尺とし、大鼓の間五寸、小鼓の間五寸、文字は十二、（本地八拍子の内、大鼓四つ、小鼓四つ文字は十二字の内、七文字は大鼓の間、五文字は小鼓の間と定むれども、元來は六六と分るゝなり）。打上も一尺。打切も一尺。引取

（トリ地）は五寸、文字六つ。片地は七寸五分、文字九つ。ヲクリは一尺二寸五分。故に引取二つは本地一つに當り、引取と片地と合せて一尺二寸五分にて、ヲクリの間に合ふ。此外に刻返は略にて五寸の間、大返は大體二尺、或は三尺四尺の間なり。（玉淵集に據る）

かねひき「鐘引」道成寺の鐘の綱を扱ふ後見役。綱を引きぬて、シテの呼吸をはかり、髪を入れざる瞬間に鐘を落すは非常に苦心を要するものなれば、鐘引は道成寺を既に演じたものならでは勤め得ざる大役とせらる。

かねひら「兼平」（謡曲）二番目。シテ今井兼平の靈、ワキ木曾の僧、木曾の僧、粟津原に義仲の跡を弔はんとして兼平の亡靈に逢ひ、その昔語を聞くことを作る。（六流）

かはかみざと「川上座頭」（狂言）盲になりし男、川上地藏に七日籠りて祈願せんとて参り。靈驗ありて目明き、喜びて下向する途中、夫の様子を見んとて來れる女房に出逢ひ、「カヘテ」と記入せり。金剛にては、觀世の「クヅシ」の場合の如き謡ひ方を「カワル」と云ふ。

かへし「返シ」次第、道行、上歌等の始め又は終りに、同じ文句を繰り返し謡ふ所あり。之を「返シ」又は「返シ句」と云ふ。

かへしどめ「返シ留」老松の小書（觀）切の文句を返し謡ふ。

かへしやうぞく「替装束」常の装束とは替へて演ずる場合の小書。曲により流儀により種別多々あり、修羅物には替装束の曲多し、特殊のものは、鉢木（觀、剛）卷絹（觀）通小町（觀、剛）海人（剛）雷電（觀、剛、喜）黒塚（春、剛）殺生石（剛）紅葉狩（剛）賀茂（剛）、等。

かへて「カヘテ」「カハル」を見よ。
かへでだい「楓臺」（作物）青葉の楓を立つる臺。作り方松臺などに同じ。六浦に用ふ。
かへのかた「替之型」變式演法たる小書の一

目の明きたるを告げ喜ぶ。悋氣深き女房、夫の斷食しながら色艶のよきは誰ぞ馳走したるならんと疑ひ、喧嘩し、又盲目となる。女だまされる事ではないと追ふ。（泉、鷺）一名「川上地藏」。

かはづ「河津、加波津、蛙」（面）瘦男の眼を凄くしたるが如き幽靈面。通小町、阿漕、藤戸、善知鳥の後、瘦男を用ふるものは亦此の面をも用ふ。

かはらたらう「河原太郎」（狂言）女、河原の新市に酒店を出す。三人酒飲みに來る。夫の河原太郎、歸り來り邪魔して客を去らしめ、鳥目を出せと迫り、女を打擲す。女、酒を飲まず、男、泥酔しながら尙瀧飲をせんと云ふ。女、頭へ酒を浴せて逃ぐ。男、よろ／＼として追ひかく。（三流）一名「河原新市」。

かはる「カハル」觀世にてはサンより下歌に移る場合などに、調子の基本を半調子變ふること、概ね下調に取る。謡本には「カハル」又

種。田村、忠度、清經等、修羅物に多き小書(觀)、何れも型の替る所多し。

かま〔鎌〕〔小道具〕海人の前シテ、木賊などに用ふ。

かまばら〔鎌腹〕〔狂言〕樵りにも行かず遊び歩く怠け者の男を、女房打殺さんと喚く。隣人仲に入り男を山に行かすむ。男山へは來たれど、女房に叩かれて逃げ廻るも口惜し、此の鎌で腹切つて死なんと、色々試みるも臆病にて得果さず。思案をかへて稼ぎに赴く。(三流)

かみあそび〔神遊〕三輪の小書(喜)。神樂に替り多く、重き習物とす。

かみあふぎ〔神扇〕〔小道具〕神舞物、惡尉の樂物、千歳及び直面の直垂物、風折長絹又は單狩衣の男など廣く用ふる中啓。白骨色入りは各流共通、模様は各別にて、觀世は表、七賢人、裏、桐に鳳凰。寶生は兩面とも蓬萊の繪。

かみうた〔神歌〕翁の歌章。一般には「シンカ」と音讀す。

かみがかり〔上懸〕觀世、寶生の二流を上懸、金春、金剛、喜多の三流を下懸と稱す。その由來は古來諸説ありて一定せず。一説に「上懸」は昔京都に住み「下懸」は奈良に住みし故に、都の上下によつて此の區別を附したるならんと云ふ。

かみがく〔神樂〕「翁の舞」の別稱。

かみのう〔神能〕協能中の「神物」の別稱。「神物」を見よ。

かみなり〔神鳴、雷〕〔狂言〕都の籤醫者、東國に下り、武藏野にて、俄に雷鳴し、落雷す。雷、踏みはづして腰を打ち、醫者に療治を頼む。醫者、藥の持合せなく、針を立て、療治す。その謝禮に水損早損なきやうにすべしと諺を諺ふ。(三流) 一名「針立雷」。

かみまひ〔神舞〕男體の神靈の舞ふ爽快に而も氣品高き舞にして、男舞に等しき位の早きも

の、笛へ大小太鼓にて囃し、正式は五段なれど三段にも略演せらる。高砂、難波、志賀、弓八幡、代主、淡路、養老の協能物の後シテ之を舞ふ。

かみもの〔神物〕シテが男體若くは女體の神靈としてその瑞驗を作曲せるもの。協能、略協能の大部分、五番目の或るものなど。

かめ〔瓶〕〔作物〕高さ五尺程の緞子包みの瓶にて、金欄の蓋をかぶせたるもの。大瓶狸々に用ふ。

かも〔賀茂〕〔謡曲〕協能。シテ別雷神(前は女)前ツレ女。ワキ室明神の神職。室の明神の神主、賀茂明神に詣で、奇特に逢ふことを作る。(六流)

かもものぐるひ〔加茂物狂〕〔謡曲〕四番目。シテ狂女、ワキ男、ワキヅレ神職。相別れて三年になりし男女、賀茂の祭に廻り逢ふことを作る。現今は後のみを演ず。(寶、喜)

かよひこまち〔通小町〕〔謡曲〕四番目。シテ四

位の少將の靈、ツレ小野小町の靈、ワキ僧。山城八瀬の山里に一夏を送る僧の許に、毎日木の實爪木を持ち來る女あり。その名を問へば、市原野に住む小野と云ひて消え失す。僧市原野に行きて小町の跡を弔ふに、四位の少將の靈、小町の靈と共に現れ、互に妄執を語り、やがて弔ひの功德により成佛す。(六流)

からおり〔唐織〕〔裝束〕蜀紅の錦に擬して織りたる錦織物、地は生絲にて各種の絲に染めたる練絲と金絲とにて種々の模様を浮織にしたるもの。唐織にて仕立てたるより裝束の名に轉用す。唐織は女姿の上着として用ふるを普通とす。特に赤色の無きものを色無唐織と稱し、三輪、芭蕉、三井寺、當麻、檜垣、嫉捨などの前シテは色無を用ふ。

男には唐織を着付として用ふることあり。(女は唐織を着付とすることなし)。敦盛、清經、忠度、通盛等の公達物の後シテ。

段唐織——唐織の織り方が或る模様によりて

横に段をなしたるもの。熊野のシテ、紅葉狩の前シテ、江口、草紙洗の後シテなどに用ふることあり。

からすて〔烏手〕經政の小書（喜）、シテの出を笛の習にて迎ふる變式。「音取」に似たるもの。但し笛は森田流に限る。烏手とは本來琵琶の譜の名なり。

からすとび〔烏飛〕「翁」の三番叟が「採之段」の末段に横飛びする型を云ふ。又、その時に囃す大小鼓笛の手をも指す。

かりぎぬ〔狩衣〕（装束）元來公家にて鷹狩に用ひし服なるが、中古公家武家の常用服となりたるもの。能に用ふるは、襟は盤領、闕腋にて、前身と後身とを縫ひ着けず、離れ居るを以て、帯にて結び、前は特に絡げ上ぐ。又、袖あり。その紐の袖先に結び垂るゝを「露」と云ふ、地合は、蜀紅、金襴、緞子等種々ありて一定せず。又之に衿と單衣との別あり、脇能の大臣脇及び後シテ、天狗物の後シテ、

融、絃上、舟辨慶の後シテなど多數は衿を用ひ、遊行柳、雨月などの後シテ、西行櫻、蟻通、歌占などのシテ、二人靜、鐵輪などのワキは單衣を用ふ。

かん〔甲〕（謡）上音以上の高き調子のこと。

かん〔甲〕（囃）大鼓にては△を以て表示する大きく強き音。又「頭」と稱す。小鼓にては●を以て表示する小さく輕き音を云ふ。

かんあらしひ〔雁争〕（狂言）（雁つぶて）の一名。

かんかりがね〔雁雁金〕（狂言）河内の百姓と大和の百姓とが、恒例として初雁献上に行く。

一人は「がん」と云ひ、一人は「かりがね」と云ひたるに、奏者より仔細を聞かれ、各詩歌故事などを述べ、奏者目出度しとて祝酒を下され二人謡ひ舞ふ。（三流）

かんぐり〔甲繰り〕（節）「甲グリ」は、觀世梅若の剛吟に限りてあり、實生の柔吟に限りてある節。他三流には剛柔共に無し。「甲グリ」は

特殊なる「クリ節」にして、甲聲を以て謡ふより然か云ふなり。即ち音位は常の「クリ」

よりは一段高し。「甲グリ」は必ず「入り」を伴ふ。而して「甲グリ」の直ぐ次に「入」のあると、「直節」一箇又は二箇を隔て、「入」の終を示すものなり。謡ひ方は、先づ「甲グリ」の音位まで聲を繰り上げ「入」の附きたる字までその調子にて続け「入」の次なる二音を常の「クリ」の音位に落し、更にその次下を落して上音の位に復するなり。

がんだいみやう〔雁大名〕（狂言）永々在京の大名、歸國に際し振舞せんとて、冠者に肴を買はしむ。冠者、烏屋に至り、雁を持ち來らんとすれども、代物を拂はねば烏屋渡さず。冠者、代物を取りに歸るにより烏を引いて置けと命ず。冠者一計を案じ、大名、行きて雁を買ふ所へ、冠者來りて先約の物を何故賣りたかと横鎗を入れ、大名と冠者と馴合ひ喧嘩を

し、遂に無代にて雁を取り來る。（泉、鷺）

かんたん〔邯鄲〕（謡曲）四番目。シテ盧生、子方夢中の舞童、ワキ夢中の勅使、ワキヅレ夢中の大臣、狂言邯鄲宿の女主。蜀の國の盧生といへる少年、楚國の羊飛山に大智識を訪ひ、教を受けんとする途次、邯鄲の里の宿に立寄り、不思議の枕に睡りて、粟飯一炊の中に王位に昇りたる五十年間の夢を見、此に名利は一夢の理を悟りて本國に歸る。（六流）

かんたんをとこ〔邯鄲男〕（面）邯鄲のシテに用ふる型の男面。これを多く脇能神舞物の後シテに用ふ。觀世にては、高砂、難波、養老、志賀、弓八幡、代主、尙其他、歌占、女郎花等にも用ふ。他各流にても神舞物に多く用ふ。

かんつづけ〔甲ツヅケ〕小鼓の手。「ツヅケ」の一種。はじめの打粒を甲に打つもの。

かんつぶて〔雁磔〕（狂言）大名、野遊に出で雁を射んとす。通りがりの男、雁を見て磔を投げて當つ。大名、身共が睨み殺したと云ひ、



男、礫で捕つたと争ふ。所の者、仲裁に出で、雁を元の所に置き、今一度射させよ、あの手許で當るまじと男を和む。大名、果して射中せず。男、雁を取りて去る。大名、羽だけでもくれよと跡を追ふ。(三流)一名「雁争」。

かんながぢ「甲長地」小鼓の手。「長地」の一種。はじめの打粒を甲に打つもの。

かんみつぢ「甲三地」小鼓の手。「三ツ地」の一種。はじめの打粒を甲に打つもの。

かんのかかり「干之掛」大小鼓序之舞のかゝりの替る小書。楊貴妃(觀、春、剛)江口(觀、寶、剛)、采女(觀)

かんむり「冠」能にては冠のことを初冠と稱す。「初冠」の項を見よ。

かんやうきう「咸陽宮」(謡曲)四番目。シテ秦始皇。ツレ花陽夫人、ワキ荊軻、ワキツレ秦舞陽、ツレ大臣、狂言宣人。荊軻、秦舞陽の二人、始皇を刺さんとて、秦の叛將樊於期の首級と燕の地圖とを持ちて始皇に見え、既に

事を果さんとしたるも、花陽夫人の琴曲に聞き酔ひて、終に事破れたることを作る。(觀、寶、剛、喜、梅)

ぎうば「牛馬」(狂言)目代、牛馬の新市を立つ。馬博勞と牛博勞と場所争ひをなし、各馬と牛との長所を語り、更に系圖競をなす。目代、決し兼ねて馬競(競走)せしめんと云ひ出し、馬は疾く、牛は遅ければ是非に及ばず、牛博勞の負となる。(三流)

きうみ「九位」能藝の品位を上中下の三位に分ち、其の三位に又各三位ありて合して九位となる。上三位は妙花風、寵深花風、閑花風中三位は正花風、廣精風、淺文風、下三位は強細風、強麤風、鹿鉛風と名づけ、學習の原則としては、中初、上中、下後と稱し、中三位の下位の淺文風より入りて、上三位の上なる妙花風に向ひ、最後に却來して下三位の風體を得べきものとす。世阿彌の「九位次第」に説く所なり。

きかいがしま「鬼界ヶ島」(謡曲)他流の「俊寛」を喜多流にては此の名稱を用ふ。

きかざとう「不聞座頭」「不見不聞」を見よ。

きく「キク」(囃)謡ひ出し方の一種として、「カケキリを聞く」といふところより、單に「キク」と云へばカケキリを聞くこと、又、更に轉じて「カケキリ」の手そのものをも「キク」と云ふ。

きくじどう「菊慈童」(謡曲)切能祝言物。シテ慈童、ワキ魏文帝臣下、他流にて枕慈童と云ふを、觀世梅若にては菊慈童と稱す。(觀世の枕慈童は別曲なり)古くは前後二場の能なりしを、後世祝言能として用ふる便宜上、半能の曲としたるものなり。

きくのはな「菊ノ花」(狂言)無斷にて家出したる下人が歸りしことを聞きたる主、下男の私宅へ折檻せんと行く。下人が京内參をしたと聞きてゆかしがり、勘氣を免して都の様を尋ぬ。下人は菊の花の歌を詠みて上臈に賞めら

れ、酒宴に伴はれしが、馳走せぬを憤り、歸るさに金剛(草履)を懷にして出で、婢に捕へられしことまで語れば、主、汝は都で盜をしたのかと叱る。(泉)

きざみ (刻) (囃) 太鼓にては、撥を低く使ひてツク／＼ツク／＼……と連続的に打つ音にて、最も多く用ふる地の手。大鼓にては▲を以て表示する小さく軽く打つ音。又「小音の甲」とも稱す。

きざみあげ (刻上) (囃) 太鼓の手。撥を高く使ひて、高音に大きく、テケ／＼テケ／＼……と連続的に打つ音。地の手たる「キザミ」より一段落の手に移らんとする場合に用ふ。

きざみかへし (刻返) (囃) 大小鼓にて打つ繋ぎの手。打切を簡略にしたるが如きものにて、打切の寸法本地(八個拍子)なるに對し、刻返はトリ(四個拍子)の寸法のものなり。その役目も打切と略ぼ同じけれど、場所は比較的靜かなる平ノリ拍子地中、下歌又は下歌様

の謠ひ所に往々あり。而して、大小鼓のみにて囃す謠と謠との間にあるものは、前後の謠必ず拍子に合ふ。又、刻返前の謠が拍子不合のもの、及び囃子事と謠との間に刻返あるものには、刻返の前に必ず太鼓加はり居りて、太鼓打上オキにて止め、後、直に大小鼓の刻返となるなり。

きざはし (段階) 舞臺正面の框外、白洲との間に架けたる階段。三級にするを定とす。

きしやうもん (起請文) 謠曲「正尊」中の一節。勸進帳、願書と併せて三讀物と稱し、重き習事とせらる。演能の際、起請文の小書なき時はワキの謠ふべきものなるが、現今は小書附を通常として演ぜらる。

きそ (木會) (謠曲) 四番目。シテ覺明、ワキ木曾義仲、ツレ池田次郎。ツレ從兵。義仲、砥並山にて埴生八幡宮に詣で、覺明の書きたる願書を奉納して戦勝を祈り、やがて平家の軍勢を俱利伽羅谷に敗ることを作る。(觀、梅)

此の曲の願書は、勸進帳、起請文と併せて三讀物と稱せられ、重き習事とせらる。

きたりう (喜多流) 能樂の一流。五流中に於て最後に立ちたるもの。其の由來に就いては異説ありて確かならず。或は金春より出でたりと云ひ、或は金剛の弟子なりと云ふ。何れにしても、金剛は金春の分流なれば、金春を源泉とする下懸の一流たるは論無し。初代左京、又七太夫と稱す。秀吉の取立により一家をなし、が、大阪陣後、落ちて黒田長政の許にありしを、藤堂高虎の推舉により、徳川家に召出されたりと傳ふ。(一説には柳生但馬守の斡旋によるとも云ふ)。九代の古能健忘齋は、此の流中興の宗とも云ふべき人にて、壽福抄、面目利書等の著あり、現家元十四代六平太。きちくもの (鬼畜物) 鬼神、天狗、畜類の精などをシテとする曲の稱。五番目物の多數は是れなり。

きつけ (着付) 装束の用法、又延いて装束その

もの名稱即ち衣類を體に着付ける事、又は着付ける衣類の意。着付に用ふる装束は、尉物にては埴斗目、女物にては箔、修羅物にては厚板の如きものなり。之に丸ぐけの帯を締め結ぶ。

きつてきらず (切ツテ切ラズ) 「切る切らず」に同じ。

きつねづか (狐塚) (狂言) 山田の夜番に遣られたる太郎冠者、後より來たりし次郎冠者を狐の化けたると思ひ、捕へて枕に縛る。主、氣遣ひて見に來れば、太郎亦主を縛り、松葉燻にせんとす。主と次郎は無念がり、自ら縛を解き、太郎を捕ふ。太郎は漸く心付き、許しを乞ふ。(三流)

きとらだな (祈禱棚) (作物) 竹にて二重に棚を作り、四隅に五色の幣を立て、注連を張り、上棚に烏帽子と鬘、下棚に白幣を載す。鐵輪に用ふ。

きながし (着流シ) 大口、半切などの袴を着け

ざる姿を云ふ。前シテの尉、女物、僧脇などに多し。

きながしそう〔着流シ僧〕大口を穿かざる僧のワキを特に「着流シ僧」と稱す。主として旅僧の扮装なり。

きぬおとし〔衣落シ〕葵上の能に、祈の中、シテ橋懸へ行く時、後見の前にて、唐織の腰巻を兩手に廣げ落すを、後見受け取ることを云ふ。道成寺の鱗落しに同じ。

きぬた〔砧、礎〕〔謡曲〕四番目、シテ芦屋某の妻、後シテ其の亡霊、ツレ侍女夕霧、ワキ芦屋某。芦屋の何某、都にありて久しく歸らざりしにより、妻は夫を戀ひわびて終に空しくなりぬ。何某、歸りてその亡魂を弔ふ。妻の夫を慕ふ餘り、涙にくれつゝ砧を搗つことを以て綾とせり。(觀、寶、剛、喜、梅)

きぬた〔砧〕〔作物〕竹を組み紅段をかけて臺とし、上に木の丸棒を架し、それへ白練の絹を懸けたる作物。砧の曲に用ふ。

きぬたのたん〔砧の段〕砧の曲の中「いざいざ」砧打たんとて」以下の一段。又雨月の中の「軒端の松に」以下の一段を云ふ。

きばべしみ〔牙癒見〕〔面〕大癒見面の特種にて、閉ぢたる唇の間より牙の露れたる面。金剛流にのみ天狗物の白頭に用ふ。

きふ〔急〕舞謡等の緩急を大體三段に分ちて、序破急となすその末段部。又、謡本に「急」と記入せるものは、謡の運びの俄に急速度に變るを指示するもの。「序破急」参照。

きふしので〔急進之出〕安達原の小書(觀)。後シテは白頭又は黒頭、早笛にて出づ。幕を出づるに一度出でゝ入り、改めて出づ。切は幕へ飛び込む。

きふのとめ〔急之留〕野守の小書(觀)、切の留め方に習あり。即ち、キリを急に謡ひ止め、あと囃子残り留となる。

きふのまひ〔急之舞〕位の極めて急速なる舞。笛へ大小鼓の和し打つもの。道成寺の亂拍子

の後にあり。又紅葉狩の舞の後半も急之舞の位となる。又、繪馬の力神の舞も急之舞にすることあり(但、これは太鼓入)。

きふのまひ〔急之舞〕淡路の小書(剛)、後の神舞、急之舞に替る、太鼓入なり。装束にも型にも替る所多し。

きやう〔經〕〔小道具〕水晶軸の巻物にして、多く懐中して出づ。盛久、三笑のシテ、張良、海人、當麻の後シテ用ふ。

きやうくわん〔經卷〕〔小道具〕前項の「經」に同じ。

きやうげん〔狂言〕常に能と能との間に挿みて演ぜらるゝ古典的喜劇。狂言の語は狂言綺語と熟し、和漢朗詠集に載せられたる白樂天の文句、これは謡曲本文中にも屢々引用せらる。由なし言、たはれ言などの意にて、滑稽なる喜劇の名稱となりたるものなり。古名を「フカシ」と云ふ。狂言の起原は、古代よりの神樂、猿樂などの

雜藝が、足利時代に至り、一方は幽玄なる能となり、一方は滑稽なる狂言となりたるが如し。作者は叡山の玄惠法師と傳ふれども、玄惠の外、金春四郎次郎、宇治彌太郎なども作りたりと云ふ。狂言名寄に據れば、大藏流二百一番、鷺流、百九十一番、和泉流二百五十八番あり。

以上の一番立狂言の外に、狂言方は能中の一役を受持ちて出場するものあり。安宅の強力、班女の長者、舟辨慶の船頭など少なからず。又能の筋の進行に關係なく、たゞ前後二場の能の中入の間に、時間の埋合せをするが爲に出場して物語するものあり。斯く、能の中に出演するものを「間狂言」又は單に「狂言」とも、略して「間」とも稱す。(間狂言の項参照。)

謡本に「狂言シカク」と記入せるあり。この「狂言」は即ち間狂言の意。「シカク」とは、云々のセリフありとの意。そのセリフを

謡本に省略せる場合、この記入をなすを例とす。

きやうげんおくりこみ〔狂言送込〕中入地終りたる後、ワキの詞により、狂言方がシテを介抱して中入せしむること。藤戸、天鼓にあり。

きやうげんかた〔狂言方〕狂言を演ずる人。「狂言師」に同じ。略して單に「狂言」とも呼ぶ。

きやうげんくちあけ〔狂言口開〕一曲開始の發端に方り、狂言方のセリフを述ぶること。眞之來序のあるものには必ず狂言口開あり。眞之來序以外の曲にても、實盛、班女、自然居士、鐵輪、現在七面、室君、西行櫻、三笑、鷺等の諸曲には狂言口開あり。

きやうげんざ〔狂言座〕橋懸が舞臺後座の横へ取り附きたる部分にて、奥の方へ引込みたる位置の處を狂言座と云ひ、間狂言役の坐着くべき常位とす。

きやうげんし〔狂言師〕狂言を演ずる人。

きやうげんしだい〔狂言次第〕狂言方の謡ふ次第の謡。安宅にあり。之には地謡は次第の地取を謡はず。

きやうげんはやつづみ〔狂言早鼓〕シテ、ワキ等の諸役早鼓にて中入すると、入替りに間狂言役の出場するに對して、尙引續き打つ早鼓を云ふ。

きやうげんばしら〔狂言柱〕舞臺、シテ柱の後方、橋懸の狂言座より最も近き柱なるが故に斯く云ふ。又後見座に最も近き柱なる故「後見柱」とも云ふ。

きやうだい〔經臺〕小道具。竹に紅段を巻き、机の形に作りたるもの。文臺に似たり。二個各經五巻を載せ、輪藏に用ふ。

きやうだいあらそひ〔兄弟諍〕〔狂言〕〔舍弟〕に同じ。

きやうぢよあふぎ〔狂女扇〕小道具。狂女物のシテの用ふる中啓。黒骨色無し。觀世流は松

に鐵線花。其の他は秋草の繪。

きやうぢよもの〔狂女物〕シテが狂女なる曲の總稱。四番目物中の主要曲。子を失ひて狂ふ愛の狂女には、櫻川、柏崎、百萬、三井寺、隅田川、夫に別れて狂ふ戀の狂女には、班女、花筐、加茂物狂、水無月祓、富士太鼓等。

ぎやうのかまへ〔行ノ構〕扇子の持方の一方式、筆など持つ如くに扇子を直立させて拇指と食指中指とにて、立てたる扇の地紙の下を摘み、残りの二指はその下の方の内側へかゝめて添へ、右の膝頭に當て、持つ持ち方を云ふ。この構へは各流を通じて、能の地謡の謡ふ時に取る構なり。

きやうもん〔經文〕小道具。經。經卷に同じ。

きやうらんのがく〔狂亂之樂〕富士太鼓の小書〔喜〕。觀世の「現之樂」と略ぼ同様なり。樂に緩急多く、又橋懸より見込む型などあり。きよくするのみひ〔曲水の舞〕融の小書〔喜〕。觀世の「酌の舞」と略ぼ同じ趣のもの。

きよつね〔清經〕謡曲。二番目。シテ平清經の

亡靈、ツレ北の方、ワキ清經の臣淡津三郎。

平清經の家臣淡津三郎、豊前國柳が浦にて海に投じたる清經の形見を持ちて京に歸る。清經の妻、その形見を見て悲む所に、彼の亡靈現れて敗戦の状などを語る。(六流)

きり〔切、キリ〕謡曲組織の一部の稱。各曲末段の一節。その謡は必ず拍子に合ふものなるが、曲により「平ノリ」「中ノリ」「大ノリ」となり居れり。

きりかねそが〔切兼會我〕謡曲。四番目。シテ曾我太郎祐信、ツレ從者、ツレ曾我兄弟の母、ツレ頼朝、ツレ畠山重忠、子方一萬、子方箱王、ワキ梶原景時。ワキツレ從者。一萬、箱王の兄弟、由比が濱にて斬らるべきを畠山重忠の申乞によりて助けらる。(剛)

きりくみ〔斬組〕烏帽子折にては常に、又正尊の小書のカケリにも斬合の模様を演ず。その型及び囃子を特に斬組と稱す。

きりこし〔切越〕〔拍子〕上下句間に特殊の句讀ありて、それをたつぷり句切るが爲、下句が常の如く第五指と第六指との間より出づるを得ずして、第六指に當りて謠ひ出さるゝを云ふ。

きりとぐち〔切戸口〕舞臺、側面の鏡板の奥の隅にある片引の板戸の出入口。又「忘れ口」とも「臆病口」とも稱す。

きりのう〔切能、尾能〕演能番組の最後に置かるゝ曲。若し最後に祝言能を附せざる時は、五番目物がすべて切能。又祝言能はすべて尾能にて、觀世流に於ける定まりの切能祝言物は、狸々、大瓶狸々、石橋、合浦、金札、岩船、枕慈童、菊慈童の八番なり。

きりまく〔切幕〕「揚幕」の異稱。(揚幕の項參照)。

きるきらず〔切ル切ラズ〕二つの語を切るが如く切らざるが如く心持して謠ふ謠ひ方。

きろくだ〔木六駄〕〔狂言〕雪の日、都の伯父へ

木六駄、炭六駄を届けに行く冠者、峠茶屋にて酒欲しくなり、進上物の樽を明けて好い氣持となり、木六駄は茶屋の亭主に興へ、炭六駄を引いて伯父の家に着く。伯父、口上書と引合せて、木六駄はと問ふ。冠者、それは今度つけ替へた私の名で御座る。(三流)

ぎわう〔祇王〕〔謠曲〕四番目。シテ佛御前、ツレ祇王、ワキ瀬尾太郎。祇王、平清盛に寵せられてゐたるに、加賀の國より佛といふ白拍子推參し、祇王の情にて見參を許されしが、舞の巧さに反つて佛に清盛の寵を奪はれしことを作る。(寶、剛)

ぎせん〔祇園〕〔狂言〕「太鼓負」の一名。

きんさつ〔金札〕〔謠曲〕脇能又は切能祝言物。

シテ伊勢神宮の使天津太玉神、ワキ桓武天皇の臣下。遷都の大宮造の爲、伏見に下りたる朝臣、伊勢太神宮の御使なる神に逢ひ、天より金札降り下る奇特を見る。(六流)。觀世梅若は常に半能として切能のみに用ふ。

きんさつ〔金札〕〔小道具〕駒の形をしたる金色の板。羅生門に用ふ。又、金札の後シテの輪

冠の立物も金札なり。

きんや〔禁野〕〔狂言〕禁野の里の者、殺生禁斷の處に何者か毎日殺生する者あり、捕へて成敗を加へんと思ふが、一人にては心元なしとて、今一人を語らひて待つ。大名、殺生程面白き慰はなしとて獵に來る。前の兩人欺きて弓矢を借り、嚇しつけて、刀、上下、小袖まで取り上ぐ。(泉)

きんじむこ〔吟聲〕〔狂言〕無智の聲、聲入の辭儀の仕方を六郎兵衛に教はりに行く。六郎、無意味なる戲言を教ふ。聲、舅方へ至りて聞きし通りの挨拶をなす。舅は聲の詞を怪みながら、其の詞うつり、酒宴となりて、聲に音曲を所望し、兩人合舞をなす。(泉。驚)一名「音曲聲」。

くらのいのり〔空之祈〕葵上の小書(觀)。イノリの間シテは橋懸へ出ぬけ、ワキはそれを追ひかけずに、置小袖を前にして宙空に向ひ祈る。シテ、ワキ共に習とす。シテは緋の長袴を穿く。

くらのはたらき〔空之働〕鶉飼の小書(觀)。特殊なる舞働入り、乃ち其間シテは橋懸に安坐して立ち廻らず。重き習とす。

くさなぎ〔草薙〕〔謠曲〕四番目。シテ日本武尊の神靈、ツレ弟橘姫の靈、ワキ惠心僧都。日本武尊、橘姫の靈、熱田の宮に現れ、惠心僧都に神劍の威徳を語る。(寶)

くじざいにん〔贖罪人〕〔狂言〕祇園會の當番なる主、冠者を召し、人々を集め、山の相談をなす。その結果、冠者の、山を作りて裾を野にし、鬼が罪人を山へ責め上ぐる所を囃さん

との案に決し、役を闇引きにす。主は罪人に冠者は鬼に當る。冠者、罪人の主を責め打擲し、主怒る。(三流)

くじしんぼち〔公事新發意〕(狂言) 寺へ新發意を上げたる母、久し振りにて住持を見舞ふ。住持、新發意を持って餘し居る折柄、引取りくれよと迫れど、母、引取を拒む。住持、地頭に訴ふ。新發意、住持の内證事を發く。

くず〔國栖〕(謡曲) 五番目。シテ藏王權現(前は其化身の漁夫) 前ツレ山神の化身、後ツレ天女、子方清見原皇子、ワキ供奉臣下、ワキツレ同、狂言追手の兵。大海人の皇子、大友の皇子に襲はれて吉野に遁れ給ひし時、山神の化身なる漁夫夫婦の家に息ひ給ひて、危き命を助かり給ふことを作る。(六流)

くすのつゆ〔楠露〕(謡曲) 四番目。シテ楠木正成、ツレ恩地満一、トモ從者、子方正行。櫻井の里に、正成、正行を諭して郷里に歸らしむることを作る。(觀、梅)

くすりぶくろ〔藥袋〕(小道具) 沙金包の形の袋。錦にて作り、赤色錦を以て口を封ず。寢覺の龍神持ち出づ。

くせ〔クセ、曲〕 謡曲組織の一部の稱。特に一曲の中樞として最も肝要なる部分なり。「クセ」は曲舞の略稱にして、もと觀阿彌、世阿彌が能を創作せし當時既に曲舞と云ふものあり。之を能に取り入れしなり。故に謡曲中には在來の曲舞を中心とし、その前後に或る趣向を施して脚色したるもあれば、又在來の曲舞を取らざるも、一曲の中心に自作せるクセの一章を置きたるもあり。何れにしてもクセは謡曲の節調及び拍子の根源をなすものなれば、その謡も舞も重要なると共に、その形式も亦多種多様なり。型との關係よりいへば、シテ(稀に他役)が謡と共に舞ふものを「舞グセ」といひ、舞はずして地の謡のみなるを「居グセ」と云ふ。又謡の構造より見れば、眞本、行、草の四種の別あり。

眞のクセ——世阿彌が「クセ舞は次第にて舞そめ、次第にてとむる也」と云へる如く、先づ地次第ありて、次にクリ、サシ、クセとあり、クセの終句は前なる地次第と同文句にて止むるものを云ふ。杜若、百萬、歌占、山姥、東岸居士の五番是れなり。

本グセ——次第の有無に關せず、クリ、サシ、クセの形式完備せるもの。最も多し。

行のクセ——クリ無くして、サシ、クセとあるもの。

草のクセ——クリ、サシ共に無くして、他の上歌等の謡よりクセとなるもの。

又クセ自身の組織より見れば、地の謡の間に挿入せられたる役謡、即ち「上グ端」が一箇所なるを「一段グセ」二箇所なるを「二段グセ」又上げ端全く無きを「片グセ」と稱す。

くせなかあしらひ〔曲中應答〕 清經の小書(觀)クセの中「かへらぬは古」と下に居て、ツレへあしらふ型あり。

くせのと〔九世戸〕(謡曲) 脇能。前シテ採桑老人の化身、前ツレ同從者、後シテ龍神、後ツレ天女、ワキ朝臣。丹後九世戸は天笠五臺山の文殊を勸請の地なればとて、朝臣、こゝに參詣し、龍神の灯明を捧ぐる奇特に逢ふ。(觀) くだんのみだれ〔九段之亂〕 狸々の小書(剛) 亂の舞に於ける段數替る。

くちあけあひ〔口開間〕 能の演奏に方り、曲によりて先づ間狂言役のセリフを以て開始するを云ふ。「狂言口開」參照。

くちきどめ〔粹留〕 遊行柳の小書(觀、剛) 切を作物の内にて留め、残り留とす。

くちまね〔口眞似〕(狂言) 「柳樽」を見よ。

くちまねむこ〔口眞似舞〕(狂言) 無智なる舞、舞入の辭儀を知らずして權六に聞きにゆく。權六、舅の云ふ通りにせよと教ふ。かくて舞入し、舅に對面し、悉く舅の口眞似をなす。舅怒り、つかみ合ひとなり、舞をこかして入る。舞、亦冠者を打ちこかして這入る。(泉)

くつ〔沓〕〔小道具〕張良の能に、後見持ち出で舞臺へ投ぐ。之を龍神拾ひ取るなり。
 くつかむり〔沓冠〕誓願寺の小書（剛）常の能と替へて、或る部分を前後せしむ。
 くづし〔崩シ〕〔節〕「クヅシ」はシテ、ツレ又は子方の謡ふ「サシ」「カ、ル」又はサシ調の所に往々にあり、又稀に拍子に合ふ地の中にもあり。柔吟より轉化したる一種の言調にて、概ね中音に始まり、下音又は呂に終る。而してその音階も柔吟音階の法則とは少しく異り、僅少の範囲内にて上下するものなり。
 くつろぎ〔窠〕早舞の變式にて、諸流共早舞物には大抵「クツログ」の小書あり。觀世にては、融、當麻等の小書。舞の中に橋懸へ行き、暫しくつろぐなり。
 くつろぐ〔クツログ〕能の中にて暫し休むこと。後見座に至り、下に居て休み、又常座邊へ行き一寸氣を抜き、次の謡又は所作を待つ場合もあり。

くつろげ〔クロゲ〕〔節〕金剛流にて謡本に「ク」と記入するもの。強吟の所に限りてあり、調子を浮かして下ぐる節。喜多の「浮き抑へ」に似たるものなり。
 くどき〔クドキ〕シテ（又曲によりてはツレ、子方）が愁歎の情を綿々と陳ぶる一段の謡にして、拍子に合はず、且つ之には一般に大小鼓のアシラヒの無きを通則とす。春榮、草紙洗、梅枝、攝待、俊寛、葵上、海人等（以上シテ）松風（シテ、ツレ）烏帽子折（ツレ）松山鏡（子方）等その例なり。
 くひかひとか〔枕か人か〕〔狂言〕臆病者の冠者、留守を言ひ付けられ。顛へながら夜廻りす。主、窃に歸り様子を窺ふ。冠者、何者かぬるが、人か枕かと問ふ。枕だと答ふ。枕なら物を云ふまいと問ふ。人だ、この鎗で突くぞと嚇す。冠者助けてくれと實物のありか迄云ふ。主、身共だと明し、常々手柄立てするから試みた、あちらへ行けと鎗にて突く。（泉）

くびひき〔首引〕〔狂言〕鎮西八郎爲朝、寶物を取り來らんと鬼が島へ行く。鬼共姫を連れ來り、生き人の食ひ初めをさせようと云ふ。八郎勝負して負けたらば食はれんと、姫と腕押し、脛押しをして、ともに勝つ。鬼共首引を強ひ、姫の味方して總がよりとなり、えいさら〜と囃し立つ。（三流）
 くまさか〔熊坂〕〔謡曲〕五番目。シテ熊坂長範の靈。ワキ旅僧。熊坂長範の亡靈、旅僧に昔語をなし、廻向を請ふことを作る。（六流）
 くまさか〔熊坂〕〔面〕寶生にて烏帽子折の後に用ふ。觀世にては長靈戀見の面を熊坂ともいふ。
 くもぬすびと〔蜘蛛盜人〕〔狂言〕連歌好きの男。初心講の支度出來ず、知人の家に忍び入り、見出されて蜘蛛の巢にかゝり、蜘蛛の歌を詠みて免さる。（大、泉）
 くものあふぎ〔雲ノ扇〕〔型〕開きたる扇と左手とを前にて合せ、扇を右斜上へ、左手を斜下

へ引き離す型。その順序は、先づ指込し、扇を下して持ち替へ（今迄内側の地紙は外側へ向く）伏せる様にし前へ出すと同時に左手も前へ出し、扇を手の先へ伏せ、さて左右左と三足引き、此の動作の内に扇を右方斜に上へとあげ、夫と反對の方へ左手を下し、最後の左足を引き終ると共に、扇は頭の高さ位まで上げ、扇面に對向する上の方へ目を着く。夜の明くる場合などにする型。
 くもる〔曇ル〕〔型〕面の少し俯向くこと。物を思ひ、考へ、憂ふるなどの心情を表はす型。「テル」の反對語なり。何か下にある物を見る場合には「面ヲ伏セル」と云ひ、同じ型ながらも其間に差異あり。
 くらままり〔鞍馬參〕〔狂言〕「福渡し」の一名。
 くらまむこ〔鞍馬掣〕〔狂言〕大果報の男、二人の掣を持つ。三條の掣と鞍馬の掣と同日に掣入す。鞍馬、三條を見て驚く。嘗て商賣事に

て口論したることありしなり。相撲を取り、三條勝つ。(泉)

くらゐ「位」位は元來朝廷に於ける臣下の席次の標示なり。能に所謂位も亦その曲の資格にして、一曲表現の基調となるものなり。協能、二番目乃至五番目は即ち大體に於ける曲の位なり。されど協能は協能として、三番目は三番目として、それ／＼に共通の位はあれど、其中に亦一曲一曲各特殊の位あり。一曲特殊の位はその曲に具備する各種の條件によりて定まる。その條件は、一にシテの身分の貴賤上下、二にシテの年齢の老若(老年を重しとす)三に能柄、シテの身分は低くとも能柄として重きを置くものあり、老女物の如き其の一例なり。四に舞の格、序之舞物を中之舞物より重しとするが如し。而してシテの心持も位に關係あり。戦勝を語ると、敗軍を語るとは心持に差異あるが如し。更に曲の背景も亦關係あり。背景が一曲構成の最大要素となれるも

の、三井寺の月に於ける、櫻川の櫻に於けるが如し。斯くの如く各種の條件集りてその曲の動かすべからざる位を生ず。一曲の曲是、演舞の方針は皆之より出發するなり。

くらまてんぐ

〔鞍馬天狗〕(謡曲) 五番目。シテ大天狗、子方沙那王、ワキ東谷の僧、狂言西谷の能力。沙那王(牛若丸)鞍馬山にて大天狗に兵法を學ぶことを作る。(六流)

くり(クリ、繰り)「クリ」には「クリ節」の略稱たるものと、音階を指せるものと、謡の一章をいふものとの三様あり。節の「クリ」は「クリ節」を見よ。

音階の「クリ」は、剛吟にては「上音」より一段高く、「カングリ」より一段低し。柔吟にては「上音」より二段「上ノウキ」より一段高き最上位の音階なり。

「クリ」の一章は、上音に始まり「クリ節」「入り節」などありて中音に終る、稍賑やかなる短き章段なり。これに、シテ稀に他役の謡に

て始まるものと、初めより地の謡のまゝなるものとの二種あり。地にて謡ふを「クリ地」と名づく。「クリ」の章は、クセ前にサシのある曲にはそれ等に先き立ちて大抵は存するものなれど、必ずありとは定らず。又「クリ」の章は、「クリ」「入」「廻シ」等の節ある所を大きく扱ひ、此等の節なき所(即ち直節の所)は遅

緩なく運びて謡ふも、聲調は、サシ、上歌などよりも高く確かりと取る。尙何の曲に於ても、「クリ」の前にて必ず一段落付き、さて「クリ」より更めて説き起し、サシ、クセに及ぶを定型とするを以て、たとひ靜かなる曲にても、「クリ」は常に多少聲調を引立たしむべき位置にあり。故に調子高に扱ふことは「クリ」の一特徴と云ふべし。

くりくましんめい(栗隈神明)(狂言) 神明前の茶屋。山城國久世栗隈神明の由來を語る。

(大藏)。和泉流には「今神明」。

くりぢ「クリ地」始めより地にて謡ひ通すクリ

の一章を云ふ。

くりぶし(クリ節、繰り節)(節) クル、柔吟にては上音より二音階高く、剛吟にては、上音より一音階高く、音を張り上ぐる節。謡本には直節に「クル」の記號を附す。又時として振りに附せらるゝことあり。

「クリ」は高く音を張り上ぐるものなれば、一句二句の長きに互りて、その音位を續くる事無し、多くは二音三音、長くとも七音八音に限りて謡はれ、必ず再び上音に復す。而して「クリ」は「入」又は「入廻シ」稀には「入呑ミ」を伴ふを通例とし、その「入」又は「入廻シ」若しくは「入呑ミ」は、「クリ」の終を示す符牒ともなり居りて、「入」の場合はその次の字にて上音に復し、「入廻シ」「入呑ミ」の場合は、廻しなり呑みなり其節の後半にて上音に復するものとす。

三音以上に互る「クリ」は、「クリ」と「入」又は「入廻シ」若しくは「入呑ミ」との間に一

簡以上の「直節」を挟み、「クリ」の調子は。「入」又は「入廻シ」若しくは「入呑ミ」の字まで繼續す。従つて此の「入」又は「入廻シ」若しくは「入呑ミ」は、繼續し來れる「クリ」の音位にて謡ふものにして、「クリ」の音階より更に高く謡ふにあらず。但し、稀には「クリ」より「入」の間にて一音又は二音を聊か落して謡ふ異例もあり。又「クリ」の五六音以上に及ぶものは、概ね「クリ」の章中にあるを普通とす。稀には「クセ」の章中にもあれど、こは寧ろ破格に屬す。

くりやき 「栗焼」(狂言)冠者、到來の栗を焼き居る内、一個食べて見るとその旨さに、到頭皆食べ盡し、言譯に作り謡を謡ふ。(三流)

くるひ 「クルヒ」「狂ヒ地」とも稱し、物狂曲中にありて、情迫り心亂るゝ趣を見する一段を云ふ。謡ひ方に於ても亦、氣合、緩急を最も大切とする箇所なり。而して「狂ヒ地」に於ける緩急の推移はクセとなり、序破の順序に

従はずして、先つ破の位より始まるを定型とす。

くるひざさ 「狂ヒ笹」(小道具)「ささ」を見よ。

くるひぢ 「狂ヒ地」「くるひ」を見よ。

くるま 「車」(作物)竹にて家形を作り、屋根には絹を蔽ひ、紅段を千鳥にかけて物見に擬し、左右に車輪をつけ、前に轆を出す。家形の柱及び臺輪には白布を巻き、其他にはすべて紅段を巻く。熊野、善界等に用ふ。

くるまぞう 「車僧」(謡曲)五番目。シテ天狗、ワキ車僧。車僧、天狗と禪の問答をなし、又行徳を比べて之を降伏することを作る。(六流)

くるまだし 「車出」(囃)熊野の「牛飼車寄せよとて」の謡初句のあと、其の返シ句との間に挿む大小鼓の特殊なるアシラヒ囃子にて、其間に後見、車の作物を舞臺へ持出す。依つて囃子に此の名稱あり。

くるまだし 「車出」野宮の小書(實、剛、喜)

後一聲の前に、車を常座へ出し、舞の前に橋懸へ直し、切の「打のりて」といふ時再び車に入る。

くるまのだん 「車之段」百萬の一節。涉り拍子の「南無阿彌陀佛」より、上歌前の「南無阿彌陀佛」まで。

くれは 「呉服」(謡曲)脇能、シテ呉織の靈、ツレ穴織の靈、ワキ臣下。朝臣、攝津國呉服の里に、呉織穴織の幽靈に逢ひ、奇特を見ることを作る。(六流)

くろがしら 「黒頭」全部黒毛にて作られたる頭髮。用途廣く、先づ童子又は慈童の面を着くる曲、田村、小鍛冶、大江山等の前シテ、天鼓の後シテ、枕慈童のシテの如きもの。瘦男、河津、怪士類の面を着くる通小町、藤戸、舟辨慶、松虫等の幽靈物。角田川の子方の幽靈。其他、弱法師、邯鄲なども黒頭を着く。又常には後シテに赤頭の野守、小鍛冶、鬘の安達原など、替の型の場合に黒頭を用ふるも

あり。

くろがしら 「黒頭」後シテが黒頭を被る替の型。小鍛冶の小書(觀)、最も重き習事にて位頗る早し。鍾馗の小書(觀)、同じく位早くして強くなる。野守の小書(觀)、モキドウ姿にて出で位早し。安達原の小書(觀、剛)早笛にて出で、モギドウ姿。土蜘蛛の小書(觀)、等。

くろたれ 「黒垂」黒毛にて作る頭髮の一種。顔の左右より背後へかけて、肩下の邊まで放し垂るゝもの。邯鄲男の面を着け、透冠を戴く脇能の後シテ神體、高砂、難波、養老、弓八幡の如きもの。天神の面を着け輪冠を頂く淡路、金札(シテ)第六天、舍利、大會等(後ツレ)の神體又は之に類する者。平太又は中將今若の面にて梨打烏帽子を被る修羅物の後シテ、田村、八島、簾、兼平、忠度等。天冠を戴く女神又は之に準する呉服、葛城、龍田、右近等。其他ツレの天女は皆黒垂を用ふ。

くろづか〔黒塚〕(謡曲)五番目。觀世にて「安達原」と稱する曲。他四流にては皆「黒塚」と云ふ。

くろひげ〔黒髭〕(面)大飛出に似て口の左右に黒く髭を描きたる面。シテとツレとを問はず龍神にはすべて此の面を用ふ。各流皆同じ。

くろべしみ〔黒癒見〕(面)觀世流にて熊坂、烏帽子折の外、野守の替の型の場合に用ふ。

くわいちのまひ〔懷中之舞〕海人の小書(春、寶、剛、喜)、早舞の前に經卷を子方に渡さず、懷中して舞ひ、舞上げに子方に渡す。其他型替る。

くわうてい〔皇帝〕(謡曲)五番目。シテ鍾馗の靈、ツレ楊貴妃、ツレ鬼神、ワキ玄宗皇帝、ワキヅレ大臣。鍾馗の靈、玄宗皇帝に奏して明王鏡に病鬼の影を映さしめ、之を退治して楊貴妃の病氣を鎮む。(觀、寶、剛、喜、梅)

くわげつ〔花月〕(謡曲)四番目。シテ花月、ワ

キ旅僧(花月の父)、狂言清水寺門前の者。左衛門家次、僧となりて諸國を廻り、清水寺の花の下にて、尋ねる子の花月に逢ふ。(六流)くわら〔掛絡〕(裝束)袈裟のこと。(もと禪宗にて用ふるもの、他宗には此の名稱を用ひず)赤裂の有無によつて色入色無の別あり。盛久高野物狂、檀風等は色なし。自然居士、東岸居士、大會等は色入を用ふ。

くわん(管)能管の略。笛の異稱。くわんじんちやう〔勸進帳〕安宅の一節。起請文、願書と併せて三讀物と稱し、重き習事とす。安宅演能の際、勸進帳は山伏一同の連吟なるを、「勸進帳」の小書附の場合シテの獨吟となる。但し現今はシテ獨吟が普通となり居れり。

くわんじんのう〔勸進能〕勸進能の名は世阿彌の申樂談儀にも見ゆれど、その文献の最も著しきものは、寛正五年四月(足利義政時代)、山城鞍馬寺の堂宇再興の資財を得んがため、

僧善盛、幕府の公許を得て、京都糺河原に興行したるものは是れなり。爾後社寺の改築等の場合に淨財を勸募集する手段として、特別なる公開能を催し、官民上下の觀客を延きたるものなり。徳川時代となりては、義捐勸進の爲ならずして、能役者の營利的興行となれり。故に幕府に於ては大夫一代に一回を限りて許し、之を「一世一代能」又は「御免能」と稱せり。

くわんぜざ〔觀世座〕大和猿樂の結崎座の後なりと云ふ。徳川時代四座の筆頭、觀世大夫の統率せる團體。

くわんぜしんくらうりう〔觀世新九郎流〕囃子方小鼓の一流。觀世小次郎信光の系族にして、足利義輝の頃、彦右衛門豊次、宮増より相承し、其の子又次郎重次を經、其の子新九郎豊勝、非凡の技倆ありて一家をなし、新九郎流と稱するに至る。明治維新頃、新九郎豊成歿して後嗣なく、今は此の流を汲む者殆ど

絶えたり。

くわんぜりう〔觀世流〕能樂五流の一。能樂の元祖觀阿彌を初代とす。二代世阿彌は能樂大成の偉人、三代音阿彌に至つて藝道確立せり。徳川幕府の能を以て式樂となすや、觀世を以て四座一流の首席となす。九代忠親(後身愛、又黒雪と號す)の時なり。現家元二十四代左近。

くわんぜりう〔觀世流〕囃子方太鼓の一流。もと金春家より出で、三郎貫阿を初代とす。二代は音阿彌の子與四郎吉國、三郎に學びて養子となり觀世座附となりて觀世を姓とす。三代吉久、權頭の稱號を許され、五代與左衛門、似我の渾名を以て聞ゆ。七代左吉、慶長十二年徳川家康に召出され、秀忠、家光に歴仕す、爾來左吉流とも呼ばる。十五代元規歿して嗣子家藝を繼承せず。

くわんばいのまひ〔勸盃之舞〕松虫の小書(觀)後の黄鐘早舞に替の型あり。

けいめい〔雞鳴〕〔狂言〕「雞流」に同じ。(大)
けいめう〔雞猫〕〔狂言〕伊豫國高野の藤三郎、

何某の愛猫を殺す。某、訴人を求む。藤三郎の
一子父を訴人し、代償として親の助命を乞
ふ。某、その孝心に感じて藤三郎を免す。牛
盗人と同工の狂言。(大、泉)

けいりう〔雞流、雞立〕〔狂言〕主、不精者の冠
者に、明朝一番雞のうたふ時來れと命ず。
冠者寝過して遅刻し、雞の鳴くを待ちたれ
ど、鳴かずに日の出となりたりと云ふ。主、
雞はうたふものにて鳴くものにはあらずと云
ふ。冠者「鳥が鳴く東の奥の……」鳴けばこ
そ別れもうけれ鳥のねの」など詩歌を擧ぐ。
主、「雞立の江の邊には、其の雞もうたふなり
けり」を擧ぐるのみ。冠者に迫られ、作謡を
謡ふ(三流)大藏にては「雞鳴」。又古名「雞

立の江」。

けさづきん〔袈裟頭巾〕白地の袈裟にて、顔を
包むやうにしたるもの。正尊、橋辨慶の後に
用ふることあり。

けしまはし〔消シ廻シ〕〔節〕廻シ節の變種。前
半は廻シの通りに謡ひ、後半の生ミ字を次の
字に密著せしめ、それを恰も一音の如くに發
聲す。即ち廻シの後半が次音と合して消さる
ゝにより、「消シ廻シ」と名けたるなり。而し
て、「消シ廻シ」の後半と密著して一音的に謡
はるゝ次の字は「イ」と「ン」と促音の「ツ」
との三音に限らる。尤も音便にて「イ」と發
音するものならば「ヒ」「キ」を問はず、「ン」
と發音するものならば「ム」も連續し、國家
一切の「く」「つ」の如く促音「ツ」とつまる
ものならば一音的に合成立得るなり。

けす〔消ス〕〔節〕謡本に「廻シ」又は「振り」
の傍に「ケス」と細記せるもの。この場合に
は「廻シ」又は「振り」を常のゴマ節の如く

に扱ひ、その代り前字へ持合せて謡ふものと
す。

げだつのでん〔解脫之傳〕海人の小書(觀)、早
舞短くなり、其他型に替りあり。

げつきうでん〔月宮殿〕〔謡曲〕「鶴龜」の別名。
喜多流にては此の名稱を用ふ。

げのまはし〔下ノ廻シ〕〔節〕剛吟「下ノ中」に
ある「廻シ」を、同調のまゝ恰も「中廻シ」
の形に謡ふもの。

けん〔劍〕〔小道具〕鍾馗、調伏會我の後シテ、
咸陽宮、張良のワキ等之を用ふ。

げんざいしちめん〔現在七面〕〔謡曲〕四番目。
シテ龍女、ワキ日蓮上人。日蓮上人、法華經
の功德により、七面の池に棲める龍女を成佛
せしむることを作る。(觀、剛、梅)

げんざいともゑ〔現在巴〕〔謡曲〕四番目。シテ
巴、ツレ義仲、ワキ恩田八郎。ツレ兵數名。
栗津の戰にて、巴落つべきやう命ぜられたる
を肯んぜず、栗津の原にて戰ふ事を作る。(剛)

げんざいもの〔現在物〕シテが神佛鬼畜或は幽

靈にあらざる現在人間なる曲の總稱。四番目
物、略二番目物の多數。三番目物五番目物の
一部。而して狂女物なども當然現在物なる
が、普通には現在男たる直面物を専ら現在物
と呼ぶが如し。其の限定は曖昧なり。

げんざいをとももの〔現在男物〕「直面物」の別
稱。

げんじくやう〔源氏供養〕〔謡曲〕三番目。シテ
紫式部の靈、ワキ安居院の法師、ワキヅレ從
僧。安居院の法師、石山の觀音に詣でんとす
る途に、紫式部の靈に逢ひ、その請のまゝ石
山寺にて源氏物語の供養をなす。(六流)

けんじやう〔絃上〕〔謡曲〕五番目。シテ村上天
皇の靈、前ツレ梨壺女御の靈、後ツレ龍神、
ツレ藤原師長、ワキ及ワキヅレ師長の從者。
師長、琵琶の奧義を究めんとて入唐の志あり
日本の名殘に須磨の月を賞せんとしたる夜、
村上天皇、梨壺女御の靈現れて、琵琶の祕曲

を弾じ、その入唐を思ひ止まらしめ、又龍宮より琵琶の名器獅子丸を持ち來たらしめて授け給ふ。(觀、寶、剛、喜、梅)

けんたい〔見臺〕謠ふ時、謠本を載せて見る具。大小、形状、材料に様々あり。元來素人の用ふるものなれば一定の法式とて無し。觀世流にては、見臺の左右の足に瓢箪と片割月との剝貫あるを用ふ。

げんだいふ〔源太夫〕(謠曲)脇能。シテ手名槌(源太夫の神)の靈、前ツレ足名槌の靈、後ツレ橋姫の靈、ワキ當今臣下。朝臣、熱田に参りて熱田神宮攝社の一なる源太夫の神の奇特を見る。(春)

げんぶくそが〔元服會我〕(謠曲)四番目。シテ會我祐成、ツレ團三郎、子方箱王、ワキ箱根別當、狂言能力。箱王、箱根にて出家すべかりしを、兄祐成、別當と謀りて連れ出し、道の宿にて元服せしむ。(剛、喜)

けんぶつざゑもん〔見物左衛門〕(狂言)見物左

衛門と云ふ者、加茂の競馬、深草祭を見んとて友達を誘ふ。既に出て居ざれば、興少なきを歎じつゝ行く。途に九條の古御所を見、競馬を見て色々雑言を吐き、次に小供の角力を見てよまひ言を云ひ、人に喧嘩を吹きかけなどす。獨り狂言なり。

こいあひ〔コイ合〕(囃)太鼓及び大鼓の手。太鼓入又は大小鼓の囃子の一段落に、太鼓と大鼓、又大鼓がコイ合を打つ事多し。而して其の次にある謠はコイ合を聞き、又はコイ合の中より謠ひ出す。その謠ひ出す謠は必ず拍子不合なるを常とす。例へば出端や一聲の如き役の出場の囃子にては、大概その囃子事の終りのコイ合を聞いて謠ひ出し、又舞事類の終りにコイ合あれば、その中又は直前より謠ひ出すが如し、

又拍子合の謠と拍子不合の謠との間にも、コイ合を聞かねばならぬ事あり。之を特に「コイ合キク」と云ふ。

場合などには、直に代りて勤むべきものなり。故に後見は十分に技藝に達せる人たることを要す。未熟の輩又は少年を後見とするは非なり。但し、道具の取扱のみを任とするものは後見の助手にて、これは「舞臺働キ」とて、正後見の如き資格を要せず。

こうけんざ〔後見座〕舞臺、後座の中、向つて左の隅、後見の坐るべき處を云ふ。

こうけんばしら〔後見柱〕舞臺、シテ柱の後方、後見座に最も近き柱を云ふ。又「狂言柱」とも云ふ。

こうしじょう〔小牛尉〕(面)小牛とは面工の名にして、その小牛の創めたる型、平穩にして上品なる老翁の面なり。觀世流以外にて小尉と稱するものに同じ。觀世にては、高砂、難波、老松、養老、氷室、弓八幡、代主、逆矛道明寺、東方朔、淡路、放生川の脇能物、嵐山、蟻通、春日龍神、皇帝、雨月の前シテに用ふ。

こうた「小唄、小歌」花月及び放下僧にある特殊なる謡ひ所の一段。蘆刈笠の段の後半も之に屬す。其の拍子は大ノリに似たる一種特殊の小唄拍子なり。

こうたひ「小謡」一番の謡の中より一部分を抜き出して謡ふものを云ふ。短きを尙ぶを以て、上歌の一節、クセの上ゲ端後、或は短きキリなど多く用ひらる。

こうばいどの「紅梅殿」老松の小書（春、實、剛、喜）、後に紅梅をかざしたる天女出で、地所を謡ひ、眞之序之舞三段舞ふ。後シテ松をかざして出で、「老木の神松」のあとイロエ（彩色）を舞ふ。返し留。流儀によつてはシテと天女と相舞に眞之序之舞を舞ふものあり。

こおもて「小面」面若くして美しき女面。江口、楊貴妃、誓願寺、羽衣、松風、熊野、杜若など各流共多く使用す。連面と稱する面も、ツレ専用の小面なり。

ごおんきよく「五音曲」世阿彌の「五音曲條

條」に説く所。五音曲とは、祝言、幽曲、戀慕、哀傷、闌曲これなり。祝言とは、直に安々と謡ひ下す安樂音、幽曲とは、祝言に趣致を添へ優美の中に面白味を含め、而かも正しき謡ひぶり。戀慕とは、柔和の内に哀れを添へ、何となく感慨籠りて哀れに物凄き風情ある謡ひ方。哀傷とは、哀れに感涙を流す様なる謡ひ振り。闌曲とは、最上の謡ひぶりにて、萬曲の謡ひぶりを會得して、様々の謡ひ振りを一音に混じ、普通の謡とは均しからぬやうに謡ふ。故に闌曲は同音すべからざるものと云へり。

こがう「小督」謡曲四番目。シテ源仲國、ツレ小督局、ツレ侍女、ワキ大臣。仲國、仲秋明月の夜、高倉院の勅命を蒙り、嵯峨野に小督局の隠れ家を尋ね、宣旨を傳ふことを作る。（六流）

こがき「小書」能の演法に變式を用ひて、常式と異なるものとなすに、夫々その變式に一定

の名稱あり。故に變式の演奏をなす場合には、一般に番組面に於ける曲名の左下方に、その名稱を小記する慣例あり。此の小記を

「小書」と稱へ、該變式を指して亦「小書」とも呼び、その小書に従ふ變式能を「小書能」「小書附能」又は單に「小書附」とも云ふ。

こかた「子方」能の時、子供の演ずる役を云ふ。子方はシテ方に屬す。能の子方には二類あり。一は其のまゝ、兒童を表するもの、一は成人を殊更に子方に充つるもの、（船辨慶の義經、正尊の靜の如し）。扱ひの上には別に甲乙なく、何れも位取らずに謡ふ。素謡にても然り。

こかぢ「小鍛冶」謡曲五番目祝言能。シテ稻荷明神、ワキ三條小鍛冶、ワキツレ大臣。三條小鍛冶宗近、稻荷明神の神助により、勅命の御劍を打ち奉る。（六流）

こがへし「小返シ」景清の小書（觀）、「大返シ」に似て、手数それより簡なるもの。「景清これ

を見て」の初句と返シ句との間に入る。金剛流は大返シなり。

こがらかさ「小傘」狂言法事に懺法を勤めてくれと頼まれし僧、懺法を心得ず。新發意に用意させて田植歌をうたふ。「いとしの小傘、今日も通れかし」と謡ひて行道する内に、小傘の内へ布施物を取り込みて見つかる。（泉、鷲）

こころ「心」文意を聞かするため、又は假名音を穢く耳立たせぬやう、注意して發音すべき箇所を指示する謡本の記入。又抑へて謡ふ場合、意を籠めて謡ふ場合をも併せ表することあり。「心シテ」「心持シテ」などいふも同じ意なり。

こし「輿」作物竹にて四角に杵を組み輿の屋根に作り、紅段を巻き、上に絹を覆ひ、白布にて巻きたる轆を取り付けたるもの。杵は二尺二寸四方。轆は五尺。國栖、盛久、蟬丸等に用ふ。何れもワキツレ二人にて、乗り手を

間に挟み、高くその頭上に差しかけて持つ。

こしいのり〔腰祈〕〔狂言〕羽黒山の山伏、大峰葛城の修行を果し、歸途久しく見舞はざりし祖父を訪ふ。祖父の年老いて腰のいたく屈めるを見て、行力により直さんと、一祈すれば、後へそり反る。行力强過ぎたりとて、後より祈れば前へ屈まる。冠者に前にゐて、つばりをかへと云ふ。シャギリ留め。(三流)

こしおび〔腰帯〕〔装束〕水衣、法被、狩衣、側次などの上より締むる帯にて、一回りにて前に結び垂らす。後背に當る所と、前に垂るゝ所だけ、硬き心を入れ、種々の模様を附く。之に數種あり。

白腰帯——白無地のもの。鷲のシテ、角田川の子方、嫉捨、砧の後シテ等に用ふ。

緞子腰帯——翁を始めとし、尉面物の前シテ全部殆ど之を用ふ。

縫紋腰帯又紋付腰帯——白地に黒にて紋を三つ縫ひたるもの。用途最も廣し。脇能、修羅

物、四五番目の男物などの後シテ、又脇能、修羅物等の前ツレ男も之を用ふ。

縫入腰帯——紋にあらずして、種々の縫模様を施したるもの、女に用ふるを原則とし、稀には優美なる男にも用ふ。

箔地腰帯——本三番目物の後に用ふるを原則とす。

箔地縫入腰帯——定家、住吉詣、當麻などに用ふ。

錦腰帯——大原御幸の法皇、住吉詣の源氏、蟬丸の蟬丸、草紙洗及鷲の王など、身分高き役柄に用ふ。

こしき〔古式〕道成寺の小書(剛)鐘入り替り、後シテ赤頭に眞蛇の面を着く。

こじし〔小獅子〕〔面〕本來は石橋のツレ獅子用の面。寶生流にて舍利、土蜘蛛、千引の後にも用ふ。

こじつ〔故實〕蟻通の小書(觀)、立廻り、常と替る。

こしまぎ〔腰卷〕〔装束〕女物の専用にて、着付の上に縫箔を腰に巻き、兩袖を後方に垂らす。即ち兩肌をぬぎて後方へ垂らしたる恰好なり。腰卷をする時には多く水衣又は長絹を着るを普通とす。

こしみの〔腰篋〕〔装束〕蜚人の腰に着くるもの。普通、麻にて裾藍に染む。八島、融、絃上、鶉飼などの前、藤戸、阿漕などの後に用ふ。一角仙人には木の葉を綴り合せたるもの。觀世の善知鳥には鳥の羽にて作りたる羽篋を用ふ。

こじよう〔小尉〕〔面〕觀世流にて小牛尉と稱する面に同じ。

こしをけ〔腰桶〕〔小道具〕〔葛桶〕に同じ。

こすみつぢ〔越三地〕〔拍子〕又「ヒロフ三地」とも云ふ。小鼓の手。下句が字數節附等の關係より、その拍子雨垂風に並ぶ時に打つもの。第一打と第二打との間を常の三地よりも大きく間を取る。

ござざとう〔替女座頭〕替女、清水觀音に籠り好き夫と得んことを祈る。同時に座頭亦籠りて妻乞ひを願ふ。二人は夢想により、目出たく夫婦となる。

ござんがかり〔御前掛〕翁の諸役の進退に、將軍大名の御前に於けるが如く、本式の儀禮を用ふること。

又盛久の小書(剛)、七騎落の小書(剛)、觀世の恐之舞に同じ。

こそでそが〔小袖會我〕〔謡曲〕四番目。シテ會我十郎祐成、ツレ同五郎時致、ツレ兄弟の母、ツレ團三郎及鬼王。會我兄弟、富士の裾野の卷狩に仇を討たんとて故郷に歸り、母に暇を乞ひ、兼ねて時致の勘當を許されんことを乞ふことを作る。(觀、寶、剛、喜、梅)

こだうぐ〔小道具〕能に於いて、役者の携帯し又は使用するものゝ中、實物、又はその擬したる形狀が實物と同様なるものの總稱。殆ど多數の持つ物は扇、僧の珠數、鬼の打杖、武

人の太刀、小刀、長刀、其他、笠、水桶、經卷など。(形の大體を擬し、又演能の都度々々作らるゝものは、手道具にても作物に屬す) ことたてゑほし「小立烏帽子」翁烏帽子に似て、稍小形に、高さも低きもの。小督、歌占等のシテに用ふ。

ごだんかぐら「五段神樂」神樂に直り無く、五段共、神樂の手を奏するもの、又「總神樂」とも云ふ。又常の神樂(直りあるもの)の變式として、特に五段神樂とする場合の小書の名。龍田(觀)卷絹(實)にあり。

ごち「五智」世阿彌の「覺習條々」に舞に五智あることを説けり。五智とは、手智、舞智、相曲智、手體智、舞體智なり。手智とは、合掌の手より五體を動かし、手をさし引き、舞一番を序破急に舞ひ納むる曲道を習得すること。舞智とは、手足を扱はず、只體のみにて舞の姿をあらはす工夫、譬へば飛鳥の風に從ふが如し。相曲智とは、前二者の手の働きと

體の働きとを調和する舞曲。手體智とは、前者の和合する中にも手を體とし、舞を用とする舞風。男體に適す。舞體智とは、舞を體とし、手を用とする舞ぶり。女體に適すと。

こつづみ「小鼓」能樂四樂器の一。小鼓の構造は、木製の「胴」を二枚の「革」を以て挟み、「調」にて絡め締む。胴は又「筒」とも書く、木質は概ね櫻なり(黒柿などの特殊品もなきにあらず)。胴の全長は多少の異同あれど、最短八寸一分より最長八寸五分、平均八寸三分位なり。胴の外形は三部より成り、兩端の椀形部とそれを連絡する筒形部にて、椀形部を「乳袋」といひ、筒形部を「如弧」又は「巢合」と呼ぶ。乳袋の丈は普通二寸六分位、如弧の丈は普通三寸一分位なり。乳袋即ち椀形の口縁に相當する箇所は正圓形にして、革の裏面へ當る部分なり、之を「革口」といひ又「キヤウグチ」とも呼ぶ。革口外圓の直徑は普通三寸三分位、内圓の直徑は二寸

六分位、此の内圓の方を「受口」と云ふ。次にその内部は、椀内即ち乳袋の内面全體を「受ヶ」とも「海」とも「懷」ともいふ。此の部分普通漏斗形なり。受ヶの終り(椀の底)亦小圓形をなす。之を「丸」と云ひ、そこは角立ち居るを以て、其の角を「風切」と云ふ。風切より奥、他方の受ヶの風切に至る迄を「巢」と云ふ。即ち如弧の内部なり。次に革は、直接に之を打ち鳴らすものにて、當歳又は二歳位までの壯健なる若駒より取る。胴を挟む爲に二枚より成り、打つ方を「表革」、反對の方を「裏革」と云ふ。革の大きさは直徑六寸六七分位、外縁は内部に丸鐵製の輪を入れ、それへ菅又は竹の皮を巻く。その鐵輪を包み綴ぢたる細かき縫目を「千綴」又は「小綴」と云ふ。此の縫目より外が「縁」にて黒漆にて塗らる。千綴の内方に沿うて等距離に六個の小孔を穿つ、調べ緒を通す孔なれば「調べ孔」と呼ぶ。此の孔の一側に三片

の花弁形を漆もて盛り上げて描きたるを「花形」と云ふ。裏から胴の箴りたる邊りの外面に、漆にて描ける蛇の目の形を「化粧輪」と云ふ。直徑三寸九分位、化粧輪は漆の下に縫ひ目を隠す爲の化粧なり。それが十六個の綴目になり居るを以て「十六」と呼ぶ。革の裏面には、縁より十六までの間の平らなる部分に大抵金箔を置く。十六に當る所は特に厚く尖り上り、之を「腰敷」と云ふ。腰敷より内は直に胴の箴る部分にて、之を「胴當り」と云ふ。次に附屬品としての第一は「調べ緒」なり。略して「調べ」と稱す。表裏二枚の革を絡めて胴を其間に挟む麻の撚り緒なり。調べ緒に二筋あり、一筋は直接に調べ孔を通りて二枚の革の間を千鳥掛にするもの、之を「堅調べ」と云ふ。一筋は胴の中央の上邊りにて堅調べへ横に掛けて二廻シして結ぶもの、之を「横調べ」と云ふ。染色は兩者共に普通朱色な

り。總紫の緒は許し色、總茶の色は一層重く老齡の手に非されば用ふるを得ず。又鼓の使用前に一時革を緊張せしむるため、横調べの上より重ね縛る丸打の絹紐を用ふ。之を「胴締ドクジメ」と云ふ。使用する時に解く。小鼓は以上二種の調べ緒を左手に握り、その手の開閉によりて緒の一弛一張を自在ならしめ、種々の音調を發せしむるなり。

小鼓の符號——小鼓打音の符號左の如し。
△(タ) 小鼓の調べ緒を握り締めたるまゝ強く打つ音にて「タ」と響く。之を「頭カシラ」と稱す。實際上は大小輕重の差あり。

○(ホ) 小鼓の打音中最も多くあり。鼓の調べ緒を締めつ弛めつして其間に發せしむるポの音。之を「乙オ」と稱す。

⊖(プ) ○に似て少しく異なり、調べ緒の扱ひの相違により「プ」と聞ゆる如き音。

●(チ) 調べ緒を握り締めたるまゝ小さく軽く打ち「チ」の音を發す。△の小さく且つ輕

きものなり。之を「甲カシ」と稱す。

ツ、極めて稀なるものにし、△に似たれども、掌を小鼓の革の縁より離さずして、手首より先きだけの動きにて革面を打つもの、△の一種なれど、それ程大きくなく、又音に響きなし。

小鼓の掛聲——「ヤ」「ハ」「イヤ」の三種。但し實際上には「ヤ」を「ヨ」の如く「ハ」を「ホ」の如く發聲し、且つ大小高低輕重の差あり。又同じ「ヤ」にても「ヤア」と引くもあり、同じ「ハ」にても「ハア」と引き、或は「ハン」と鼻音に發するもあり。

こてふ「胡蝶コトフ」(謡曲) 三番目。シテ胡蝶の精、ワキ旅僧。胡蝶の精、梅花に縁無きことを歎き、梅花の下に旅僧の讀經を乞ひて佛果を得ることを作る(觀、寶、剛、梅)

このだん「琴之段」咸陽宮の一節。「さらば祕曲を奏すべし」より「眠れるが如くなり」まで。

ことば「詞」謠本の本文に節附の無き部分を「詞」と云ふ。詞には、一句中「開キ」と稱して、必ず聲を起す所あり。

ことびで「小飛出コトビ」(面) 大飛出より相貌の幾分穩やかに作られたる面、形も稍小振りなり。殺生石、小鍛冶、鶴の後に各流共に用ひ、觀世にては其他合浦にも用ふ。

こぬすびと「子盗人コヌスビ」(狂言) 女房、子を寝させて茶を飲まんとて去る。盗人忍び入りて、道具衣類に目を付くる折しも、寝たる子を見、その愛らしさに抱き上げ、色々とすかす。女と主、座敷の騒がしさに來て見れば、盜賊なり、一討にしてくれんと、息巻き出づれば、盜人子を捨て、逃ぐ。(三流)

こねのかん「小音ノ甲コネノカン」大鼓にて小さく且つ軽く打ち ツと發する音、▲を以て表示す。△の甲を小さく軽くしたるが如き音なれば、小音の甲と稱するなり。

このは「木ノ葉キノハ」(作物) 正物の木の葉を用ひ、

神詣、佛參の意を表す。忠度、芭蕉、野宮、采女、三輪の前シテ、通小町のツレなど持つ。

このふでのでん「此筆之傳」海人の小書(觀) 中入前「此筆の跡を御覽じて」と子方に扇を渡す所に習の替あり。

このみ「小呑コノミ」(節) 拍子上謠方等の關係により、普通の呑ミ節よりも小さく謠ふ節。謠本には呑ミ節の肩又は内に「小」と細記せり。

このみあらそひ「菓爭コノミアラソヒ」(狂言) 橘、栗の山に入りて遊ぶ。栗之を見て争ひとなり、柑子大勢と栗の配下多數と、各得物を持ちて喧嘩する内、大嵐吹き起りて双方散々になる。(泉)

ごばんめもの「五番目物」四番目物に次ぎ、第五番に演ぜらるゝ曲の總稱。シテは神體、鬼形、畜類、天狗、其他種別様々あり。觀世流の五番目曲左の如し。鶉飼、紅葉狩、融、安達原、當麻、海士、鞍馬天狗、春日龍神、皇

帝、山姥、善界、船辨慶、大會、龍虎、鍾馗、項羽、熊坂、野守、張良、羅生門、車僧、第六天、土蜘蛛、舍利、小鍛冶、松山鏡、大江山、絃上、飛雲、須磨源氏、國栖、雷電、昭君（計三三）其他四番目と共通曲。鶴、正尊、殺生石、谷行、烏帽子折、一角仙人、現在七面。二番目と共通曲、碓潜（太鼓入の時五番目）。

又觀世流に無くして實生、金剛、喜多にある大蛇、金剛の松山天狗は五番目物なり。

こひのおもに〔戀重荷〕（謡曲）四番目。シテ山科庄司、後シテ庄司の幽靈、ツレ女御、ワキ官人、狂言下人。女御を垣間見て戀になりたる菊作りの賤しき老人、彼を思ひ止まらしめんとて、持ち難き重荷を興へ、之を擔ひて御庭を歩まば、女御の姿を拜するを得べしと云はれたるを眞と信じ、彼の重荷を擔ひ得ずして終に空しくなる。後幽靈となつて女御に恨を述べ（觀、梅）梅若にては「重荷」。

こひのねとり〔戀之音取〕清經の小書（觀、春梅）、シテの出に、笛の音を聞きながら足の運びを譜に合はせつつ出づ。

こひのまひ〔戀之舞〕杜若の小書（觀）、クセを省き、地次第より直ぐ「花前に蝶舞ふ」となり、舞は二段のオロシに橋懸へ行く型あり。其他にも型替る。

こぶらり〔昆布賣〕（狂言）北野參りに、自分で太刀を持ち居る男、似合はしき者通らば持たせんと思ふ所へ、若狭の昆布賣來る。詞をかけて同道し、嚇して太刀を持たせ、己の家人の如く扱ふ。昆布賣怒り、太刀を振揚げ、反對に嚇し付け、昆布を賣れと命じ、昆布賣の歌を、謡、淨瑠璃、小唄節に謡へと強ひ、遂にその太刀を持ちたるまゝ去る。（三流）

こぶかき〔昆布柿〕（狂言）毎年の御年貢として、淡路の百姓は柿を、丹波の百姓は昆布を持ちて、上洛の途次、道連れとなり、同じ館に參る。奏者、二人の同時に參れることを喜

びて、歌を詠めと云ふ。淡路「今年より所領の日記かきまして」丹波「よろこぶまゝに所繁昌」尚二人はたはひもなきことを名のりたる後、シヤギリ止めとなる。（泉、鷺）

こぶし〔小節〕（節）織巧なる節扱ひにして、アタリに似てアタリ程強からず、イロに似てイロ程大きからず、むつくりと生ミ字を出して美しく一種の綾を出す謡ひ方。

こべしみ〔小癒見〕（面）大癒見より小形にて、相貌も幾分穩やかに作りたる面。鍾馗、皇帝野守、鶺鴒、昭君、松山鏡の後などに用ふ。

こま〔ゴマ〕（節）「ゴマ節」の略。「直節」〔落節〕の俗稱。いづれも其の形胡麻の種に似たるを以て名づく。

こまち〔小町〕（面）實生流にて關寺小町に用ふる老女面。他各流に用ひず。

こまのだん〔駒之段〕小督の一節。「あら面白の折柄やな」より「想夫戀なるぞ嬉しき」まで。

こまはし〔小廻シ〕（節）拍子上又は謡方の關係にて、廻シを小さく謡ふものを云ふ。拍子によるものは廻シ節の肩に「小」と細記し、謡方によるものは廻シの内に「小」の字を記入す。而して、拍子上より小なるべきは其の節の前半にして、後半は必ずしも小ならざることあり。又謡方より小なるは常に節全體に小なりとす。

こまはり〔小廻り〕（型）小さく廻ること。廻る場所と曲柄とによりて、廻り具合に異同あり。

こまひ〔小舞〕狂言の舞ふ舞。

こみおほくち〔込大口〕（裝束）形は大口の通りにて、後側は疊表の如きものを入れ、絹にて包む。指貫又は直垂の袴を着する時、其の内へ下穿きに穿く。

こゆひゑぼし〔小結烏帽子〕（裝束）侍烏帽子の一種にして、紅白打交ぜたる組緒にて飾る。烏帽子折の子方など子方のみ用ふ。

こんがうがへし〔今向返シ〕三井寺の小書(觀)

「枯れたる木にも」の處に習事あり。

こんがうざ〔金剛座〕大和猿樂の坂戸座より出でたりと云ふ。徳川時代能樂四座の一。金剛大夫の統率せし團體。

こんがうつゑ〔金剛杖〕(小道具)長さ五尺程の太き丸竹を用ひ、強力金の剛杖に擬す。安宅に使用す。

こんがうりう〔金剛流〕能樂五流の一。能樂創成の初期より存せる流儀なれども、當時の歴史詳かならず。十二代氏正は鼻金剛と渾名せられ、此流の興隆に與つて力ありし人なり。維新後、屢變災に遭ひ、流勢甚だ振はず。現家元二十四代右京。

こんくわい〔吼噓〕(狂言)「釣狐」に同じ。

こんばるざ〔金春座〕大和猿樂圓満井座の後なりと云ふ。徳川時代能樂四座の一にして觀世座に次ぐ。金春大夫の統率せし團體。

こんばるりう〔金春流〕能樂五流の一。聖徳太子の時代なる秦河勝を猿樂の遠祖とし、村上天皇の時代なる秦氏安を中興の祖とする大和圓満井座(竹田座とも)より出で、其の由緒の最も遠くして正しきものなり。金春氏信(禪竹と號す)世阿彌の女婿となり、又世阿彌の藝風を繼承す。著述多し。現家元光太郎奈良に住す。維新後、流勢振はず、名人櫻間伴馬(後左陣)獨り東都に在りて、卓抜の技藝を以て流風を發揮し、今はその嗣子金太郎東都の重鎮として此流を維持す。

こんばるりう〔金春流〕唯子方太鼓の一流。金春大夫家の支流にて、流祖を三郎と云ひ、金春禪竹の伯父に當る。四代彦九郎氏重、技藝拔群にて、權頭の稱號を許さる。六代惣右衛門一峰、徳川家康に召出さる。現家元十九代林太郎、惣右衛門と改む。

さいう〔左右〕(型)先づ體を少し右方へ斜に向

けながら兩手を前へ出し、次いで、左手は其儘にして右手ばかりを徐に下げながら、左方へ向きて、先づ左足、次に右足と二足出づ。

次に反對に右方へ向きながら、前とは逆に左手を徐に下すと同時に右手を上げて、先づ右足、次に左足と二足出づ。此の普通の左右の外に、片左右、中左右、大左右の三種あり。

片左右——左右と同じ様にして、左方へ二足出づ。又稀に右方へだけ出づることもあり。

中左右——左右と同じ様にして、左方へ左右左と三足出で、その三足目の左足をかけて、右方へ右左右左と四足出づ。

大左右——中左右と同じく、左方へ三足出で(こゝにて多く拍子を踏む。又踏まぬこともあり)、三足目をかけて右方へ出づ。此の出足

の數には定まり無し。

さいしき〔彩色〕「イロエ」の音讀。小書の稱。「いろえ」を見よ。

さいぎやうざくら〔西行櫻〕(謡曲)四番目又三番目。シテ老木の櫻の精、ツレ花見の人々、ワキ西行法師、狂言西行の從者。西行法師の西山の庵の櫻盛りなる由を聞いて、下京邊の者相伴ひて庵を訪ふ。西行「花見んと群れつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける」と一首を口ずさむ。その夜、老木の櫻の精現れ、櫻のとがと云はれしをかこち、舞を舞ふ。(六流)

さいとう、りきどう〔碎動、力動〕世阿彌は舞ならざる動きの所作、即ち働きを表演するに、碎動風と力動風と二種の體風ありとし、「碎動」は形は鬼なれども、心は人にて、動作が細やかに碎くるの義、心身に力を入れずして身を軽く動かす人體なりと説き、又「力動」は形も心も鬼にて、専ら力を主にして働

く風なりと説けり。而して「碎動風」は軍體の末風と見て、稽古の次第（習藝の基礎階梯）には加へざるも、その風の鬼面を取れるが、「力動風」は風情なしとて「此風形は當流に心を得ず」と排斥せり。

さいのめ〔賽ノ目〕〔狂言〕又「賽ノ目掣」と云ふ。「算勘掣」に同じ。其項を見よ。

さいはう〔財寶〕〔狂言〕西翁三人の子を持つ。その子成人したるにより、改名して下されと云ふ。三人の名を「けうがり」「やよがり」「面白う」とつく。子供達喜びて囃物をなす。（三流）鶯流にては「西翁」

さうし〔草紙〕〔小道具〕色紙形の鳥の子紙の五色を大和綴にしたるもの。草紙洗小町に用ふ。

さうしあらひこまち〔草紙洗小町〕〔謡曲〕三番目、シテ小野小町、ツレ紀貫之、ツレ歌人數名、子方帝、ワキ大伴黒主、狂言黒主從者。清涼殿の御歌合に、黒主、小町に勝たんと

て、前夜其の私宅に忍び入り、小町が明日の歌を詠吟するを盗み聞きて、萬葉の草紙に書き入れ、當日小町の歌は古歌なりと訴ふ。小町悲みて其の草紙を洗ひ、入筆の文字を洗ひ落して冤を雲ぐ。（觀、寶、剛、喜、梅）、寶生と梅若とは「草紙洗」。

さうのかまへ〔草ノ構へ〕扇の持ち方の一方式。右手の小指を扇の要の所へ當て、握り、扇の先を左の膝へ渡しかけ、左の膝には左手の掌を上向にして扇の地紙の所を軽く受けて保つ。即ち兩膝の上に兩手にて扇の本と末とを持つ持ち方なり。上懸にては能の申合などの時に此の式を取ることあり。喜多流にては之を「眞ノ構へ」とす。扇を兩手にて保つを最も丁重の式としたるなり。素謡、又は仕舞、囃子の地を謡ふ場合此の式を用ふ。

さうのまひ〔双之舞〕狸々の小書（觀）、二人にて亂を舞ふ。

さがりは〔下り端、下り羽〕〔囃〕後場又は前後

無き曲にて、シテ又はツレの出に先き立ちて囃す一種の囃子事。笛主となり大小太鼓の附合ふもの。之によりて出場するシテ又はツレは概ね神女天女の類なるも、又狸々の如きもあり。シテの出には、西王母、吉野天人（協能の時）狸々等、ツレの出には、寢覺、東方朔、嵐山、室君等あり。

さがりはぢ〔下り端地〕〔謡〕又「涉り拍子地」とも云ふ。主として下り端囃子の後にある謡。此の謡は平ノリ拍子に合ひて、而かも太鼓入なるを其の特性とす。

さかほこ〔逆矛〕〔謡曲〕協能。シテ瀧祭の神、前ツレ化身、後ツレ天女、ワキ官人。朝臣、逆矛を納めたる龍田の社に詣で、奇特に逢ふことを作る。（觀、梅）

さぎ〔鷺〕〔謡曲〕四番目。シテ鷺の精、ツレ帝、ワキ藏人、ワキヅレ大臣。帝、神泉苑に行幸ありし日、洲崎の鷺を捕へよとの勅諭ありしに、鷺、勅をかしこみ、藏人の捕ふるに任せ

たれば、帝、殊勝に思召し、五位の位を授けて放ち給ふ。（觀、寶、剛、喜、梅）

さぎりう〔鶯流〕狂言方の一流。本姓長命。初代を鷺太夫と云ふ。四代仁右衛門、慶長十九年徳川家康の命により觀世座附となる。明治となり十四代勘太夫に至つて家元絶え、門流、能界と絶縁し、漸次衰微して、今は全く廢滅せり。

さくらがは〔櫻川〕〔謡曲〕四番目。シテ櫻子の母、子方櫻子、ワキ磯部寺住僧、ワキヅレ人商人。櫻子といふ幼兒、母の貧困を救はんとて、人商人に身を賣り、東に下りたる爲、母、狂氣して尋ね下り、常陸國櫻川のほとりにて廻り逢ひしことを作る。（六流）

さくらだい〔櫻臺〕〔作物〕櫻の造花を立つる臺。雲林院、吉野天人、右近等に用ふ。

さげ〔下ゲ〕〔節〕下音階を示す下にあらずして、「落チ」と同意味に使用せらるゝもの。此の「下ゲ」と「ヲ」の記號の「落チ」と用

此の「下ゲ」と「ヲ」の記號の「落チ」と用

例の異なる所は、「ヲ」は其の一音のみ音位の下ることを示し、「下ゲ」は二字以上に連続して下ることを示す原則なり。

さげうた〔下歌〕謡曲組織の一部の稱。下調（音階は中音）にて謡ふ歌の意にて、必ず拍子に合ひ、大抵は二三句の短章なり。又「下歌」に續いて概ね「上歌」あるを普通とす。

さげぶし〔下ゲ節〕「落テ節」に同じ。

さこんさぶらう〔左近三郎〕（狂言）狩人の左近三郎狩に行く道にて僧に出遇ひ、強ひて道連れとし、なぶり言を云ひ、果は僧に弓を持たす。僧、狩人の弓と聞いて投げ捨て、五戒の話をなし、鹿を射殺したらば鹿になるといへば、三郎、さらば坊主を射て出家にならうと嘲弄す。トゞ僧怒りて三郎を追ふ。（大）一名「鹿狩」。

ささ〔笹〕（手道具）又「持チ笹」「狂ヒ笹」とも稱す。寒竹の枝にて、狂人の表徴として大抵は持つ物。百萬のシテ、三井寺、柏崎、高野

物狂の後シテ等用ふ。

ささえ〔榮螺〕（狂言）備中下津浦の僧、東國修行より故郷に歸る途中、貝殻濱にて榮螺の精に逢ひ、經を讀みて成佛せしむ。能がりの狂言（驚）

ささげぶし〔捧ゲ節〕（節）この節の古稱。昔は「ササゲ節」と「ハネ節」と區別したれど、後世その差異曖昧となりし爲か、今は一様に「ハネ節」と呼べり。

ささのだん〔笹之段〕百萬の一節。「げにや世々毎の」より「我子に遇はん爲なり」までを云ふ。

ささのでん〔笹之傳〕班女の小書（觀）。後シテ笹を持ちて出で、クセの「せめてもの形見の扇」の所にて笹を捨て、懷より扇を取り出す。それ迄は笹にて舞ふ。

又三井寺の小書（梅）、觀世の「無俳之傳」に同じ。

ささのとめ〔笹之留〕柏崎の小書（觀）、物着前、

笹を捨つる所に習あり。

ささのひやうし〔笹之拍子〕柏崎の小書（梅）、

狂ひ地留めの型に習あり。

ささらのだん〔笹之段〕自然居士の一節「それ筑の起を尋ぬるに」より「今は助けてたび給へ」までを云ふ。

さし〔サシ〕謡曲組織の一部の稱。「サシ」は「サシ聲」の略語にて、聲明の「指聲」より來れるものか、金剛喜多には今も「サシ聲」の稱を用ふる部分あり。概ね上音にて謡ひ出し、其の謡は拍子に合はざること觀世の所謂「カカル」に同じ。但し「サシ」は對者に關係なき謡にして、「カカル」は對者に向ひて謡ひかくるの差異あるのみ。（他流の「カカル」は意義異なり、「カカル」の項参照。）

シテ（他の役にても）一聲囃子にて出場すれば、一セイ謡の後にサシを謡ふを通則とし、又一聲囃子の後直ちにサシを謡ふも尠なからず。又シテ（ツレにても）が次第にて出場す

るものは、次第の後殆ど必ずサシあるを定型とす。又クリの後、クセの前には、概ねサシ謡あり、即ち多くはシテのサシを以て始まり、次いで地のサシとなりてクセに移る。但し異例もあり。

さしあふぎ〔指扇〕（型）先づ左足、次に右足と二足引き、この動作一杯に、扇を右方より前へ大きく上げて、目の前に水平に出す。

さしこみ〔指込〕（型）右手を胸高に指し出す型。此の型は多く「開キ」の前にし、又目當となる物を指す意にする場合にあり。この場合には「開キ」の前にする型より手を少し高く目の先位をまで上ぐ。素手と持物ある時とあり。

さしでおほち〔差出祖父〕（狂言）舅、何事にもよく差出口する祖父をうるさがりて寺へやり、其間に聲祝を濟さんとす。祖父それと知りて、色々差出口す。（驚）

さしなは〔繕繩〕（狂言）繩なひの一名。

さしぬぎ〔指貫〕(装束)袴の一種。長き袴にて、下端に輪と稱する所ありて、之に紐を通し、膝の下まで内へ捲り込みて緊め括り、下は袋の底の如くなる。下に込大口を着込みて穿く。地は、精好、平絹等。色は薄紫か淺黄地に、八ツ藤、橘などの丸模様を織り出したるもの。直衣又は狩衣の下に穿く高貴の服装なり。翁に用ふる外、絃上、融、小鹽、雲林院の後シテ、住吉詣の源氏。蟬丸の蟬丸等に用ふ。又草紙洗、花筐の玉(子方)の如きは緋の指貫にて、絃上、融も重き替の型の場合には緋無地の指貫を穿くことあり。

さしまはし〔指廻〕(型)先づ指扇をし、其儘右方へ右左右と三足出づ。指して廻すの意なり。又立留りたるまゝ指し廻す場合もあり。其の時は足を引かずにサシ扇をし、其儘にて體を右方へ斜に向くるのみ、足は使はず。

さしわけ〔指分〕(型)右方へ右左と二足出ながら、左手を横より大きく目の前へ出し、左足

を引くと同時に、左方へ分ける様に手を扱ひ、次に右足を引くと同時に、右手をサシ扇の如く目の前へ出して右方へ分ける様に扱ふ。左右へ指し分くる意なり。

さす〔指ス〕(型)物を指す意にて、多くは右手に持ちたる扇を前へ出すこと。又左手にて何も持たずに指すこともあり。

ざせん〔座禪〕(狂言)「花子」の別名。「花子」を見よ。

さたのでん〔蹉跎之傳〕藤戸の小書(觀)、中入前、後シテの型替る。

さつくわ〔挨拶、擦過〕(狂言)都の伯父を迎ひに遣られたる冠者、その住所を忘れ、伯父御座らぬかと呼び歩く。挨拶といふ無頼漢、その伯父なりと欺き、同道して來る。主に詰られ、挨拶は田舎に甥あれば、それと間違へたりと詫ぶ。主、人違ひはある事とてもてなし。冠者に色々命するに、冠者間違ばかりす。主、身共のなす通りにせよと云へば、冠

者一言一口主の口眞似す。主怒り、冠者を突き倒して去れば、冠者亦挨拶をつき倒して去る。(泉、鷺)

さつまのかみ〔薩摩守〕(狂言)茶屋の亭主、休息せる僧の茶代も置かず、錢の持合せなきを憐み、此先の神崎の渡は渡守秀句好きなれば、たゞ乗る秀句を教へんとて、「平家の公達薩摩守忠度」と云へと教ふ。僧、舟に乗り、川中にて渡守船貨を促す。僧、秀句にて渡さんといへば、渡守喜びて諾す。僧「平家の公達薩摩守」といひて後を忘れ、船の着く頃「青海苔の引干」と云ひ違へ、渡守に追はる。(三流)

さどぎつね〔佐渡狐〕(狂言)越後の者と佐渡の者と都へ年貢納めに行き、道連れとなり、同じ館に納め祝酒を頂きたる後、越後は佐渡に狐は居らぬと云ふが眞かと問ふ。佐渡は嘘だと答ふるに、越後は狐の形など問ひ試み、はては牛を賭祿にせんとて、狐の鳴聲を問ふ。

佐渡案ずれども出でず、「ちゝくわい」と鳴くと云ふ。越後、それ違つた牛を取らう、佐渡やることはならぬと追ふ。(三流)

さねもり〔實盛〕(謡曲)二番目。シテ齋藤別當實盛の靈、ワキ遊行上人、ワキツレ從僧。實盛の靈、廻國の遊行上人の説法の場合に來りて甲を請ひ、昔語をして成佛することを作る。(六流)

さはべのまひ〔澤邊之舞〕杜若の小書(寶)、物着に、垂纓、緩つきの冠に藤の花の心葉を挿し、日蔭の糸を下けたるを被り、長絹を着る。序之舞の中にて、橋懸へ行き、欄に出で、見廻し、舞臺へ歸り、更に袖巻き上げ、見廻すなどの型ありて變化に富む。

さほやま〔佐保山〕(謡曲)脇能。シテ佐保姫、前ツレ侍女、ワキ藤原俊家。俊家、佐保姫の神靈に逢ふことを作る。(春)

さむらひゑぼし〔侍烏帽子〕(装束)又「折烏帽子」とも云ふ。頂にて三角に折りたるもの。

恰も三角なる物を載せたるが如し。上より紫の紐を懸く。直垂又は素袍を着用する武士の被り物なり。小袖會我、夜討會我のシテもツレも用ひ、其他用例多し。翁にては千歳、面箱持、並に囃子方一同之を被る。

さらへ〔竹杷〕〔手道具〕松葉を搔き寄する竹の熊手。高砂の前シテ持つ。

さりきらひ〔去嫌〕目出度き席にて忌み嫌ふべき謡の文句を云ふ。例へば、婚禮に、のく、さる、かへる、かさねて、かへす、かずく、なほく、又、秋、返シ句を謡ふこと。轉宅新居に、もゆる、火、焼く、煙、くづる、倒る。船中、又は船出に、かへる、しづむ、波風、あらし。追善佛事に、迷ふ、沈む、闇、くらき、地獄の事。諸祝儀に、死ぬる、冥途、苦しむ、亂る、涙、くつる、あはれ、など。又其の家の主人の姓名に當る文字ある謡も避くべき事とす。

さるがく〔猿樂、申樂〕漢土渡來の散樂をサル

ガクと發音し、平安朝時代には之をサルガウとも呼び、進んでサルガフの動詞を生じ、サルガク、サルガウと共用せられ、之に猿樂、散更の字を當て簀めたり。猿樂の猿は猿女の舞の聯想より作られ、申樂の申は猿猴と聯想するの不快を避け、神聖化せんが爲、神の字を分割して作られたるものなり。而して平安朝の所謂散樂即ち猿樂は滑稽なる物眞似、呪師、田樂等の雜藝、品玉、八玉などの曲藝等、凡そ眞面目なる舞樂以外の雜伎雜藝を包括したるものにて、社寺の祭禮法會などに、神樂や舞樂の餘興として演ぜられたるもの、如し。鎌倉時代となりて猿樂は稍向上し、舞女、兒童の優美なる歌舞に伍して滑稽なる演藝をなししが、歌舞と猿樂との交渉の深まるに従ひて歌舞的發達をなし、一方高級なる貴族的文藝は衰へて、卑近なる民衆的演藝漸次歡迎せられ、各地に職業的猿樂師の團體を生じ、大社巨刹に附屬して猿樂座と稱せり。か

くて南北朝時代には、法勝寺申樂、大和申

樂（四座）、近江申樂（上三座、下三座）、伊勢申樂（二座）を數ふるに至れり。而して猿樂の内容も漸次改善せられ、從來の雜伎曲藝の方面を捨て、戯曲的方面に發達し、足利時代に入りて大和申樂結崎座より觀阿彌世阿彌父子の天才現はれ、申樂能を大成するに至りしなり。（佐成氏の研究に據る）

さるかへこうたら〔猿替勾當〕〔狂言〕〔猿座頭〕の古名。次項を見よ。

さるざとう〔猿座頭〕〔狂言〕勾當、女共に頼まれ、花を嗅いでなりと慰まんと、女を連れて清水に至り、花の下に小宴を張る。茲へ猿引來り、勾當の目の見えぬを幸ひに女を誘ふ。勾當、女の舉動を怪しみ、帯にて結び附く、猿引、女の代りに猿をつけかへ、女を負うて逃ぐ。勾當、女を探れば、猿となつて毛が生へてゐ、きやつきやと飛びつく。勾當、ア、悲しや許せくと叫ぶ。（三流）鷲流にては

「花見座頭」と稱す。

さるとびで〔猿飛出〕〔面〕目圓くして猿に似たる飛出の面。觀世、實生にて鶴に用ふ。

さるべしめ〔猿癒見〕〔面〕小癒見の特種なる面にして、相貌の猿に似たるもの。實生にて鶴の後に用ふ。其他の流に無し。

さるむこ〔猿掣〕〔狂言〕嵐山の替へ間。猿の掣入にて、多數の猿出で、酒宴を開き、一同謡ひ舞ふ。

さを〔棹〕〔手道具〕竹の棹にて、舟の櫂として使用する。多く舟の作物を出す時に用ふれども、又舟を出さざる場合にも、舟の意味を現す爲に用ふ。岩船、兼平、項羽、國栖の前シテ、自然居士、鳥追舟のワキなど用ふ。又狂言に於ては、能と異なりて、舟辨慶、船渡掣の如き、櫓として使用する。

さんかんむこ〔算勘掣〕〔狂言〕舅、算勘に達する人あらば掣にせんと高札を打つ。候補者一の掣來り、算を知らずして追ひ歸され、二の

聲亦失敗して歸る。三の聲、五百具の采の目を誤らず答ふ。鼻感じて聲に取らんと、娘を連れて出づ。娘被衣を取れば稀代の醜女なり。聲驚き逃げ歸る。(泉、鶯)鶯にては「賽目聲」。

さんきよく「三曲」初瀬六代、東國下、西國下を云ふ。蘭曲中最も重き物とす。

さんくわうじよう「三光尉」(面)面工三光坊の創めたる型の尉面。小尉よりは品位落ち、朝倉尉、笑尉に比して少しく強き感じのある老翁の面。實生にては實盛、頼政、忠度、融、絃上、鶉飼、阿漕、野守、國栖等の前に用ひ、喜多にては、右の外、養老、白樂天、嵐山、和布刈等の如き脇能の前にも用ふ。(喜多の前シテ尉は小尉にあらざれば三光尉と云ふ如く兩者各大半をなせり)觀世にては用ひず。

さんじおち「三字落」(節)、又「三字落シ」「三字下ゲ」とも云ふ。一字落、二字落と同

じく、サシ、カ、ル又はサシ調にて謠ふ所に於て、上音にて連続したる句の末三字に落ち節の付き居るもの、落ちを三字に互りて謠ふなり。

さんじおとし「三字落シ」(節)「三字落ち」に同じ。

さんじさげ「三字下ゲ」(節)前項に同じ。

さんしゆら「三修羅」修羅物中の難曲とせらるゝ實盛、頼政、朝長の三番を云ふ。

さんせう「三笑」(謠曲)四番目。シテ慧遠禪師、ツレ陶淵明、ツレ陸修靜。慧遠禪師、廬山に白蓮社を結びて淨業を修しむるに、一日、陶淵明、陸修靜訪ひ來りたる時、酒を酌み談に興じて、思はず禁足を破り、虎溪の石橋を越えて始めて心づき、三人顧みて大笑したる故事を作る。此の曲ワキ無し。(觀、寶、喜、梅)

さんぜじつばうので「三世十方ノ出」朝長の小書。(觀、春、剛、喜、梅)前の地中「三世十

方の前に特殊の打切入り、それより謡出に習あり。後の出端も靜かに、所々替る事多し。重き習とす。

さんだう「三道」種作書の三道。種は能の本質的材料を選択すること。作は能の作曲、序破急を定むる事。書は能の詞章、文辭を曲柄に適すべく修飾する事、此の三道の理論を、老、女、軍の三體、及び放下、碎動、力動に當てはめて説きたるもの世阿彌の「能作書」なり。

さんだんのまひ「三段之舞」中之舞をツレ及び子方にて舞ふ場合、常に短く三段となるを定則とするによりて云ふ。而してツレが天女なるものには、特に「天女之舞」と稱す。大小鼓の三段之舞、住吉詣、正尊、關寺小町の子方。太鼓入り三段之舞、鶴龜、嵐山のツレ等なり。

さんだんのまひ「三段之舞」小書。融(觀)、弓八幡(觀)熊野(春、寶、剛、喜)。何れも舞

の手順替るも、常の五段を略したる三段に非ずして、神舞なり中之舞なるを替の三段に舞ふ習なり。

さんどのしだい「三度之次第」芭蕉の小書(觀)前シテの出方に習あり。

さんなんくせ「三難クセ」白髭、花筐、歌占のクセはいづれも剛吟にて、容易に謠ひ難きむつかしき謠所なれば、俗に「三難クセ」と稱す。

さんにながたは「三人片輪」(狂言)主、片輪者を召抱ふる旨の高札を打つ。邊りのならず者、一人は盲に、一人は躄に、一人は啞に化けて來り召抱へらる。主、外出するに當り、三人に各倉番を命ず。その留守に、盲は目を開き、躄は足を伸ばし、啞は物を言ふ。三人元より知合の仲なれば、酒倉を開けて大いに飲み、謠ひ舞ふ狼藉中へ主歸り來る。三人狼狽して躄片輪の體を取り違へ逃げ出す。(三流)

さんになひやくしやう〔三人百姓〕〔狂言〕淡路と尾張と美濃との百姓、上堂へ年貢上納に参る途中、道連れとなり、同じ館に至る。奏者より、三人して歌詠めと望まれ、「淡路より種蒔きそめてみつ葉さし、花咲き尾張、美濃なるは稻」と詠み、御感に入り、祝酒を頂き、舞ひ謡ふ。(三流) 一名「三人夫」。

さんのまつ〔三ノ松〕舞臺、橋懸欄干前に植ゑられたる三本の松の中、幕口に最も近き所にあるもの。

さんばさう〔三番叟、三番三〕翁に狂言方の勤むるもの。翁がへり濟めば、小鼓三人に大鼓も加はり打ち出す。狂言柱の下に居たる三番叟は「ア、」と掛聲しながら「お、さいく、喜びありや……」と走り出づ、之を「揉出シ」と云ひ、拍子を踏みて、それより舞となる。之を「揉之段」と云ひ、末段に「鳥飛じ」の型ありて終る、揉之段濟みて後見座にくつろぎ、黒式尉の面をつけ、シテ柱に出で、面

箱持と問答し、鈴を受取る。これより「鈴之段」を舞ひ、其中に「種蒔キ」面ガヘリ」などの型あり、末段に「ユリアハセ」の型ありて終る。

さんばんめもの〔三番目物〕正式番組の二番目に次いで、第三番に演ぜらるゝ曲の總稱。シテは概ね女性なれども例外無きにあらず。観世流三番目物——江口、千手、井筒、楊貴妃、采女、姨捨、大原御幸、誓願寺、熊野、遊行柳、杜若、二人静、松風、定家、夕顔、雲林院、源氏供養、檜垣、芭蕉、關寺小町、東北、佛原、野宮、羽衣、半菰、吉野天人、草紙洗小町、六浦、吉野静、身延、胡蝶、藤梅。(計三十四番) 四番目にて三番目を兼ねるもの、——龍田、三輪、鶯。四番目三番目共通の曲——西行櫻、鸚鵡小町、葛城、小鹽、住吉詣。其他、寶生流の祇王、金剛流の雪、墨染櫻は三番目に屬す。

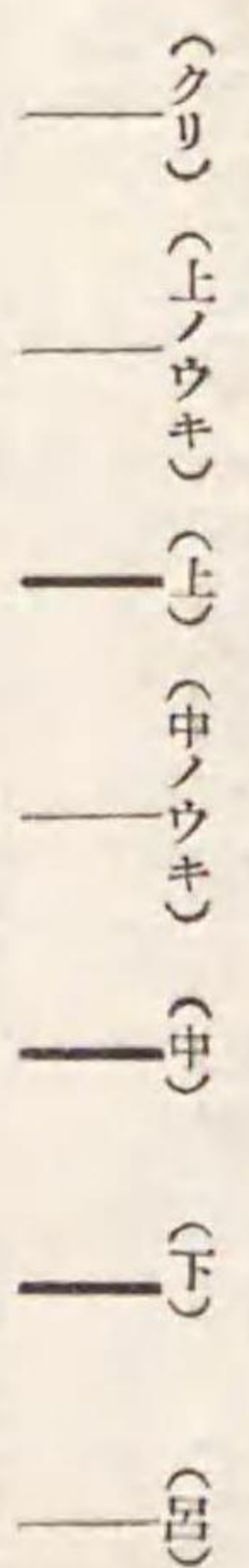
さんふじん〔三婦人〕楊貴妃、定家、大原御幸の三番を云ふ。

さんぼんばしら〔三本柱〕〔狂言〕大名、太郎次郎三郎の三冠者に、金藏を建つる爲伐り置きたる三本の材木を一人二本宛持ち來れと命ず。冠者等、三本の木を一人二本宛持てと云ふは、我等の知慧を試さん爲ならんと考へ、三本を△様に組み合せ、各その角を擔げ持ち目出度き折なればとて囃物をなす。(三流)

さんよみもの〔三讀物〕安宅の勸進帳、正尊の起請文、木曾の願書を云ふ。
さんらうちよ〔三老女〕檜垣、姨捨、關寺小町の三番を云ふ。

じうぎん〔柔吟〕謡曲の聲の扱ひ方に剛吟柔吟の二種あり。柔吟は「弱吟」又略して「ヨワ」とも云ひ、謡本には「ヨワク」と記するを例とせり。概して優美に謡ふものなり。一曲全體を柔吟に謡ふもあり、剛柔兩吟相半ばするもあり、或は一曲中の一二句のみ他吟を交へたるもあり。
柔吟の音階は七音階にして、謡ふ時には連続したる聲を以て此の七音階を上下し、或る時は氣息急となり又緩となり、或は重きより輕きに移り、又は一音階より一音階に移る間に於て時に其の間中の音出づることあるを以て、七箇以上尙多數の音階あるが如く聞ゆることあれども、骨子とも云ふべきものは七音階の外に出でず、七音階とは「上」「中」「下」の三基音、及び「上」より一段高き「上ノウキ」

「上ノウキ」より一段高き「クリ」又「中」より一段高く「上」より一段低き「中ノウキ」「下」より一段低き「呂」の四音階なり。かくて柔吟は常に此の七音階中の「上」「中」「下」の三階段にて謡はれ、他の四階段は種々の節附によりて之が綾をなすものなり。此の七音階を高低の順に表示すれば左の如し。



「上」にて謡ひ續けたる所に「下」とあるものは「中」更に又「下」とあれば「下」の音階となる。又「上」に「ウ」(浮キの略)とあるものは「上ノウキ」「中」に「ウ」とあれば「中」の音階となる。斯く、「上」と「中」とには各「ウキ」の一階あれども、「下」には「下ノウキ」と稱する別箇の音階を挿むことなく、直に「中」の次位にあり。又「上」に「入」と

あるは「クリ」の音階、「中」に「入」とあるは「上ノウキ」の音階、「下」に「入」とあるは「中」の音階となり、「入」が「上」にある時は二段、「中」にある時は三段高く、その間各「ウキ」を謡へども、「下」にある時に限り唯一段高くなるのみにて、その中間に「ウキ」の音階無し。

以上は柔吟本来の音階なるが、「サシ」及び「カ、ル」の章に於ては少しく變體の音階を有す。「サシ」「カ、ル」の初の謡ひ出しは一種「上」の調子なれども、その一度「下」に落つるに、常の所の如く二段下らず、之より少しく高き音位に下るものとす。即ち「サシ」「カ、ル」の最初の「上」「下」の音階の距離は、他の「上」と「中」との距離よりも少しく近きものなり。依つて前者と對照せしめて、「サシ」「カ、ル」の最初の「下」を「中落シ」と名づけ、その一度「中落シ」に落ちたる後は此の「中」音を基礎とし、前記七音階の法則に

準據して上下するものなり。

しうくからかさ (秀句傘) (狂言) 大名、冠者を呼び出し、彼方此方の參會に、何やら言うてはドツト笑ふは何事かと尋ね、秀句をなすとの事を聞いて、冠者に命じ、秀句を知れる者を抱へたるが、その者傘につけて秀句を云ふに感じ、上下小袖迄與へ、ト、秀句は寒いものだと落ち。(三流)

しうくだいみやう (秀句大名) (狂言) 前項「秀句傘」の古名。

しうげんのう (祝言能) 脇能以下諸曲順演の最後を完う結ぶ意にて添ふる祝儀曲を「祝言能」と稱し。正式五番立の番數以外とす。故に五番立の演能に於ては祝言能を併せて六番、更に翁附ならば七番となる。而して翁附には必ず祝言能を添ふるを正式とし、然らざる場合には略して附祝言を謡ふ。(「附祝言」参照) 脇能の大部分は半能の演式を以て祝言能となすを得、又猩々、大瓶猩々、合浦、石橋は五

番目物、菊慈童、鶯は四番目物にして祝言能たるが故に、此等は他の五番目物の後に祝言能として添へ得らるゝと共に、此等の曲を切能とする時は、最早其後に他の祝言能を附するの要なきものとす。

しうげんのしき (祝言之式) 高砂其他脇能物に多き小書。脇能を祝言能として切りに用ふる場合に、特殊の演式をなすもの。各流共にあり。

しうげんのしゆら (祝言ノ修羅) 「勝修羅」に同じ。

しうしやうのみひ (愁傷之舞) 仲光(満仲)の小書(觀、剛、梅)、男舞の中にシナル型あり、舞ひながら亡兒を悼むなり。

しうろん(宗論) (狂言) 身延山より歸る法華坊主、善光寺より下向の淨土僧と出逢ひ、道連れとなり話し合ふ内、各己の宗旨になれと云ひ、互に珠數を戴かせて興がる。法華逃げ出し宿を取れば、淨土追ひかけて同宿し、兩僧

滑稽なる法問をなし、我れ劣らじと題目、念佛を唱ふる内、互に取り違へ、トッ「法華も彌陀も隔てはあらじ」の謠に終る。(三流)

しが「志賀」(謡曲)脇能。シテ大伴黒主の神靈、前ツレ杣男、ワキ朝臣。朝臣、近江國志賀にて黒主の神靈に逢ふことを作る。(觀、寶剛)

しかみ(顰)(面)獅子口と飛出との間の如き鬼相の面。各流共、紅葉狩、大江山、土蜘蛛、羅生門、飛雲、雷電、谷行、舍利などの後に用ふ。

しきさんばん「式三番」翁の別稱。「おきな」を見よ。

しけみづごろも「桂水衣」(装束)桂絲織の平絹にて作りたる無地の水衣。色は、白、黒、茶、縹、紫、木賊色などあり。

白水衣——松風のシテ及ツレ、卷絹、葛城の前シテ等、特殊の女性に限らる。

黒水衣——旅僧ワキ及びワキヅレ僧など最も

多し。

紫水衣——高僧の法衣とし、道成寺、關寺小町のワキ等に用ふ。

茶水衣——普通僧ワキにも用ひ、神能、修羅物、其他尉物の前シテは多く之を用ふ。

淺黄水衣——多くは狂女に用ふ。

其他、縹、萌黄の類も用ひらるれど、白、紫の外は嚴格なる制規無きが如し。

しざいちりう「四座一流」徳川時代、幕府の秩祿を興へ保護したる、觀世、金春、寶生、金剛の四座と喜多の一流。喜多は流と呼ぶも座號を許されず従つて家元も太夫とは稱へざりき。

じさんべんのでん「二三返之傳」咸陽宮の小書(觀)琴之段の終り方「聖人の御助と」とあるを、「御助」にて切り、更に戻りて「七尺の屏風」より繰返して謠ふなり。

しし「獅子」(囃)獅子舞の囃子を云ふ。笛に大太鼓の和して打つ最も豪快急調なる囃子事なり。舞の序部には特殊なる一般の囃子事あ

り。之を「亂序」と稱す。

ししがり「鹿狩」(狂言)大藏流の「左近三郎」の古名。

ししぐち「獅子口」(面)大きく口を開き、牙を露したる獍猛なる相貌の面。各流共、石橋に用ふ。觀世にては其他、龍虎、谷行、舍利にも用ふ。

ししじふにだん「師資十二段」石橋の小書(觀)次項「師資之式」にして更に獅子舞の段數及び型に替りあり。

ししのしき「師資之式」石橋の小書(規)、親子の獅子出づ。親獅子は白頭、子獅子は赤頭。

ししまひ「獅子舞」獅子の狂ひ戯るゝ狀に擬したる豪壯活達なる舞。石橋は獅子現れて牡丹の花に遊び狂ふもの、望月や内外詣(金剛)は常人が獅子の狂ふに擬したる舞なれば、その氣分に異なる所あり。石橋には、大獅子、連獅子、師資、十二段等替の舞あり。

じしやく「磁石」(狂言)シテ遠江の者、都見物

せんとて坂本に來れば、邊りの不正直者、田舎者と見て案内せんと、人買宿へ連れ込む。

シテ、その裏をかい朝早立す。アド跡を追ひ來り、一打にせむと迫る。シテ太刀を見るや、ア、ア、と叫ぶ。何故と問へば、磁石の精にて刀を呑みたと云ふ。アド刀を鞘に納むれば、シテ死にたる眞似をなす。アド刀を枕元に置いて活かさうとする所へ、シテ起き上りて切りかゝる。アド狼狽して許せ〜と逃ぐ。(三流)

じせんせき「二千石」(狂言)大名、冠者が無斷にて家出したるを折檻せんとて、其の私宅へ行く。京内参したりと聞きて、先づ都の様子を尋ぬ。冠者、近頃流行る謠を習ひたりとて「二千石の松にこそ、千歳を祝ふ後迄も、其名は朽せざりけれ」と謠ふ。大名、この謠の謂を語り手打にせんとす。冠者泣き出し、打つて捨てようと云はれる御手許が、大殿様に似てゐるから懐しいなど云ひ、大名之を許

し、昔を思ひ出して悲しけれど、歎く所でない、目出度う笑はうと共に笑ひ止め。(三流) **しだい**「次第」三句より成る謡曲組織の一章の稱。古人之を「序歌」と譯せり。ワキ、シテツレ等の諸役の立場に當り、最初に謡ふを原則とし、之を「役ノ次第」と云ふ。又往々地にて謡ふもあり、之を「地次第」と云ふ。「役の次第」の謡には、之に先んじて概ね「次第ノ囃子」あり。各其項参照。

しだいのさんべんがへし「次第ノ三遍返シ」神物協能に於て、最初にワキとワキヅレとが次第を謡ひ、次に地謡方は第二句を省きて、首尾二句のみを低音に、拍子に合せて繰返し謡ひ、ワキ、ワキヅレは更に今一度三句を謡ふ。

しだいのはやし「次第ノ囃子」役の登場最初の謡が次第たる場合に、其の次第の謡に先んじて囃す囃子事。大小鼓主となり笛之に和す。(其役が次第以前に他の謡又は詞を謡ふものは次

第の囃子無し) 次第の囃子ある場合には、其の囃子の終り打切となり、之を聞いて次第の謡を謡ひ出すものとす。次第の囃子に、眞之次第、常ノ次第、替ノ次第等の種別あり。眞之次第は五段、常ノ次第は三段を正式とすれど、略して二段、一段、段無しともし、それ〴〵次第三段、次第二段、次第一段、段無しなど、稱す。

したにあだつ「下ニ居立ツ」(型) 右膝を板に着け、左膝を半ば立つ。背後は兩足共に爪立て、臀を踵へ載せず離す。

したにある「下ニ居ル」(型) 片方、立て膝をして坐ることを云ふ。上懸にては左膝を立て、下懸にては右膝を立てる定めなり。

しちきおち「七騎落」(謡曲) 四番目。シテ土肥實平、ツレ源頼朝、ツレ從騎五人、子方土肥遠平、ワキ和田義盛、狂言船頭。頼朝、石橋山の合戦に敗れ、舟に乗りて安房上總の方に開かんとする時、主従八騎なりしを不吉の例

なりとて、實平の子遠平を陸上に残して出

づ。翌日海上にて和田義盛の來り會ひしに、遠平救はれて其の舟にあり、實平父子邂逅を喜ぶ。(六流)

しちきおち「七騎落」(狂言) 狂言男の獨白にて、謡曲七騎落の筋に同じ。

しちだんのみだれ「七段ノ亂」狸々の小書(寶)、段數の替なり。

しつかう「膝行」熊野の小書(六流共)、短冊の段の所にて、常は立ちてワキの前へ行くを、膝をおろしたるまま二足半程歩み寄るなり。

又狸々の小書(寶)、亂の中に膝行する型あり。

しづかゑぼし「靜烏帽子」立烏帽子の一種。白拍子の被る烏帽子にて、其の名も靜御前より取りたるもの、之に黒と金との二種あり。流儀に依りて差異あれども、普通には黒を用ひ、船辨慶の前シテの如きは金を用ふ。

しづめあふぎ「鎮扇」(小道具) 觀世流にて常の舞扇の別稱。又「つぼめ扇」とも云ふ。「舞

扇」を見よ。

しづめがしら「靜メ頭」(囃) 眞之一聲の登場囃子五段のうち、その末段特に靜肅なる氣分に於て掛聲少なに打つ所。シテ及びツレ橋懸へ出で、留まりて向き合ひたる時より 一聲謡ひ出し前までの間なり。

して「シテ」一曲の中心人物、即ち主人公の役を云ふ。シテは一曲必ず一人にして、二人あること無し。而して、一曲中にワキやツレを缺くものはあれど、シテは必ず有り。但し稀にはシテの謡ふ謡なく、唯能にて所作のみの物もあり。又シテヅレの役の輕からざる時、シテ同様の待遇を以て「兩ジテ」と稱するもの二三あり。前後二場ある曲にては、前場に於けるを「前シテ」後場に於けるを「後シテ」と呼ぶ。一番の曲中、シテの系統に屬する各役を「シテ方」と稱し、ワキの系統に屬するものと區別す。昔はシテの正字を「太夫」と書きたり。

しで「四手」(作物)紙を切りて作る。隅田川、百萬等狂女の持笹、巻絹シテの木綿襪、其他種々の作物に付け、又賀茂(觀世)の後シテの如きは赤頭へ附く。

してづれ「シテツレ」シテ方に屬するツレの意。即ちワキ方のツレと區別せんがため「シテツレ」と云ふなり。「ツレ」の項参照。

してばしら「シテ柱」舞臺四隅の太き角柱四本の中、橋懸の直ぐ取り附きの柱を云ふ。

じどう「慈童」(面)童子面の一種。多く觀世流に用ふ。菊慈童、枕慈童の外、田村、小鍛冶石橋、合浦、大江山、大瓶狸々の前シテ、天鼓の後シテ、又敦盛、經政、知章の後にも用ふ。

しどうはうがく「止動方覺」(狂言)主、冠者に命じ、茶壺と太刀と馬とを伯父御に借りにやる。伯父、使の趣を聞きて快く諾し、且つこの馬は咳拂すれば跳ね出す癖あり、それを鎮むるには「寂蓮童子、六萬菩薩、鎮り給へ、

止動方覺」と云へと教ふ。冠者、歸れば、主、遅しとて散々小言を云ひ、馬に乗りて出づ。冠者、エヘン／＼と云へば、主、落馬す。冠者乗り代りて、咒文を唱ふれば鎮まる。かくて最後に馬逃げ出し、二人之を追ふ。(三流)

しとめ「仕止」(型)小さく左右して、扇を巻指しの時の如く巻き込む型。クセの舞ひトメ、又は囃子舞の上ゲがワカとならざるものなどの終局に、トメの型として演ず。

じねんこじ「自然居士」(謡曲)四番目。シテ自然居士、子方兒童(流儀によりて男兒又は女兒)、ワキ人商人、ワキツレ同、狂言雲居寺門前の者。自然居士、雲居寺にて説法の時、一兒童來りて、亡親供養のため衣一裹を布施として諷誦を請ふ。居士は諷誦文により、兒童の身を賣りて衣に代へたるを覺り、説法を中止して其の跡を追ひ、大津の浦にて追ひつき、衣を人商人に返し、克く忍辱して遂に兒

童を救ひ歸る。(六流)

しばぶね「柴舟」(作物)束ねたる萩柴を舟に結びつけたるもの。兼平に用ふ。

しばりなは「縛り繩」(作物手道具)白木綿をよりに作りたる繩。夜討會我、正尊の立衆、巻絹の狂言方等使用す。

しびり「痺」(狂言)主、冠者に淀鯉を買ひ來れと命ずれど、冠者、度々の使に懲り、作り病をし、痺が起りて行けぬと斷る。主、又伯父御より御振舞の使あり、之より參るが、汝は行けまじと云ふに、お振舞ならお供させて下され、痺は神妙なものにて、云ひ聞かすれば直ると云ふ。冠者の立上るを見て、それならば云ひつけたる肴を買ひ來れと云ふと、冠者又痺が起る。主、憎ひ奴のと叱りつく。(大泉)

じふさんだんのまひ「十三段之舞」海人及び融の小書(觀、剛、梅)早舞を五段にて二度、三段にて一度舞ひ返す。之に五五三、五三五

の二様あり。

じふにだんのがく「十二段之樂」邯鄲の小書(剛、喜)樂の段の取り方を常とは替へて舞ふものにて、段の數を十二段舞ふにはあらず。

じふばんぎり「十番斬」夜討會我の變式(觀世)十郎五郎兩シテ、新田四郎ワキ(常は無し)前場終りて十郎五郎中入せず、間狂言中に物着をし、間終りて出で、立衆と戦ひ、五郎は新開を追うて入り、十郎は新田の爲に討たる。それより後場「よせかけて」へ續く。

じふろく「十六」(面)公達用の若く愛らしき男面。觀世以外の流にて、知章、經政等に用ふ。

しまひ「仕舞」舞囃子よりも一層簡單にて、四拍子無しに、一章又は一段を謡のみにて舞ふを云ふ。

しまみづごろも「縞水衣」(裝束)紺地に幅廣なる白筋とか、茶地に白、黒などの豎縞ある水

衣。天狗物の前シテ、安宅のシテなど、山伏姿の重きものに用ふ。

しめて「締メテ」謠方の用語、次項を見よ。

しめる「締メル」調子を落ちつけ、運びを引き締むること。引き締めたる結果、概ね位は静まるも、「静メル」とは異なり。

しもがかり「下懸、下掛」金春、金剛、喜多の三流を云ふ。「上懸」参照。

しもがかりはうしやうりう「下懸寶生流」協方五流の一。又「協寶生」と稱す。春藤流より出づ。春藤六郎次郎、松平采女正の家臣新之丞を養ふ。新之丞、咸陽宮の秦舞陽を勤め、將軍の囑目する所となり、新に召出されて一流を樹て、寶生座附となる。近代、新朔、金五郎の如き名人輩出し、現家元八代目新、亦現時協方の重鎮たり。協方五流の家元の現存するもの、今僅にこの一家あるのみ。

しやう「正」舞臺「正面」の略語。

じやう「状」(作物手道具)(謠)曲中にて讀む

書状の用紙、又その文言のこと。用紙は白きままの奉書紙なり。「文」と同じやうなれど、赦免状、又は御教書などに限りて云ふ。俊寛春榮、鉢木などにあり。

しやうき「鍾馗」(謠曲)五番目。シテ鍾馗の靈ワキ終南山の麓の者。終南山の者、都に上る途次、山中にて鍾馗の靈に逢ふことを作る。(六流)

しやうぎ「床几」(小道具)軍陣に使ふ形の床几。大小鼓囃子方、能の時腰を掛く。又特に八島の小書、弓流(觀)に用ふ。

しやうぎのかた「床几之型」海人の小書(剛)、「そとまなうで」と真中にて床几にかゝり、そのまゝ語より玉之段に移り、「さすが恩愛の」と立ちて橋懸へ行き、「南無や志度寺の」より舞臺に歸る。

しやうぎべつでん「床几別傳」熊坂の小書(寶)後シテ法被肩ぬぎて出で、床几にかゝり、「具足の隙間を丁と切れば」まで床几の型。キリ

一の松にて袖被ぎ留む。

しやうご「鉦鼓」(小道具)青銅にて作りたる圓き皿の如き鉦。隅田川のシテ念佛の時、紐を頸にかけ手に持ちて打ち鳴らす。

じやうざ「常座」舞臺上、太鼓座より少し前方の部分にて、シテ又はワキなど出場して舞臺に入れば、先づ一旦立ち留まる定りの處を云ふ。

しやうさき「正先」舞臺正面の前部、前框へ近き處を云ふ。

しやうじやう「猩々」(謠曲)切能祝言物。シテ猩々、ワキかうふう。「かうふう」といふ者、親に孝なるにより、靈夢を蒙り、その告に従ひ、市に酒を賣りゐたるに、海中の猩々、常に來りて酒を飲む。一夜、汝の孝なる報ひなりとて、無盡藏の酒壺を與へ、又酔ひて舞を舞ふ。現行の猩々は半能に改作したるものなり。

しやうじやう「猩々」(面)童子の面を赤くした

るが如き面。猩々、大瓶猩々に用ふ。

しやうぞん「正尊」(謠曲)四番目又五番目。シテ土佐坊正尊、ツレ義經、江田源三、熊井太郎、姊和光景、土佐郎等、子方靜御前、ワキ武藏坊辨慶。土佐坊正尊、堀川御所に義經を襲ひ、却つて敗れたることを作る。(觀、寶、剛、喜、梅)

じやうのおさへ「上ノ抑へ」(節)又「上抑へ」とも云ふ。柔吟の上音を抑へて謠ふこと。音階は中落チと同様、中ノウキなれど、上ノ抑へは音に力の籠れる所ありて、彼此聊か趣を異にす。尙、句首を「上ノ抑へ」に謠ふべき場合は、概ね前句の終字を浮かさず。(因に、「中ノウキ」に謠ふべき場合は、句首、句中を問はず、必ず其の前字を上ノウキに浮かすものなり)

じやうのけしまはし「上ノ消シ廻シ」(節)柔吟上音の章中にある「消シ廻シ」を「上ノ廻シ」の具合に扱ふもの。即ち前字より上ノウキに

浮かせて其のまゝ前半を謡ひ、後半の生ミ字を次の字音と密着せしめ、それを恰も一音の如くに發聲して上音に復するなり。

じやうのまはし〔上ノ廻シ〕節〕又「上廻シ」とも云ふ。剛吟柔吟とも上音の章中にありて、末尾即ち廻シ尻を上音より下に落さざる謡ひ方をなすものを云ふ。

じやうまはし〔上廻シ〕前項に同じ。
じやうめん〔正面〕舞臺中央前寄りの部分を云ふ。而して正面は舞臺上の位置のみならず、演者の方向についても云ふ。略して「正」。

じやうわきのう〔正脇能〕「本脇能」に同じ。脇能中、輪藏、道明寺、右近の三番を除きたる他の諸曲を云ふ。

しやか〔釋迦〕面〕金泥を塗りたる佛像其儘の大なる面。喜多流の大會にのみ、後シテの大癡見面上へ重ねて被ることあり。

しやく〔笏〕小道具〕束帶の時、手に持つ笏に擬したる板。長さ一尺五寸、巾三寸程、道明

寺の後シテ「笏拍子」の時持つ。

しやくがかり〔酌掛〕安宅の小書（觀、梅）落ちて巖に」と例の如く拍子を踏み、扇開きて角へ出で、「鳴るは瀧の水」と謡ひながらワキへ酌し、其儘後の詞無くして舞となり、中に橋懸へ行き、扇の酒を欄干の外へこぼす型などあり。

しやくのまひ〔酌之舞〕融の小書（六流共）後シテ笏を持ち、又は扇を笏の如くに構へて出で、舞にも替る所多く、流儀によりて異同様々なり。

しやくびやうし〔笏拍子〕道明寺の小書（觀、剛、喜、梅）後シテ笏を持ちて出で、「笏拍子とうく」と以下樂の初段まで、笏にて所々拍子を取る。

しやくみ〔曲見〕面〕年増女の面。深井より少し老けて、聊かやつれ氣味あり。觀世流にては用ひず。他流にては、觀世の深井を用ふる曲、即ち狂女物一般、其他、藤戸、碓、芭蕉

山姥等に用ふ。

しやつきやう〔石橋〕謡曲〕切能祝言物、前シテ文殊の化身、後シテ獅子、ワキ寂昭法師。

寂昭、唐土の清涼山に至り、石橋を渡らんとして、文殊の化身に逢ひ、又奇特なる獅子の戯を見ることを作る。（六流）

しやてい〔舍弟〕狂言〕弟、兄の處へ行くたび、舍弟か、よく來たと云ふ。弟、シヤテイの意味分らず、與兵衛に聞きに行く、與兵衛なぶつて諍はせんと思ひ、舍弟は盜人の唐名と云ふ、弟、腹立ちて兄を訪ひ、喧嘩す。（三流）一名「兄弟諍」

しやべりあひ〔シヤベリ間〕略して單に「シヤベリ」とも云ふ。「語間」の一種にて、間狂言役の立ちながら語るもの。即ち「立語」の別稱なり。

しやもんぼうし〔沙門帽子〕裝束〕角帽子を着方によりて異稱するもの。角帽子の後を常のやうに長く垂らさず、短く折込みたる上よ

り紐にて結ぶ。故に「角帽子を沙門に着く」とも云ふ。角帽子よりは、品位の高き僧に用ふ。

しやり〔舍利〕謡曲〕五番目。シテ足疾鬼、ツレ草駄天、ワキ旅僧、狂言能力。旅僧、東山泉涌寺に十六羅漢と佛舍利とを拜みぬたるに、足疾鬼、里人に化して來り、舍利を奪つて逃げ去らんとす。草駄天現れ、足疾鬼を追ひつめて、復舍利を奪ひ返す。（六流）

しやり〔舍利〕小道具〕周圍に炎をつけたる火焰珠と同じ。舍利の曲に用ふ。前は舍利塔に載せて、一疊臺の上に出し置き、前シテ塔を踏み潰して持ち逃ぐ。後シテ、それを持ちて再び出づるなり。

しやりとう〔舍利塔〕小道具〕六角の寶座にて、金箔を置き、彩色を施したるもの。此の上は舍利を置く。前シテ、舍利を奪ひて逃ぐる時、踏み潰すやう内部を薄板にて拵へあり。
じゆず〔珠數、數珠〕小道具〕多くは普通の水

晶の珠數を用ふ。大原御幸、自然居士、盛久三笑、攝待等のシテ、井筒、誓願寺、實盛、朝長、巴、三井寺、高野物狂、放下僧、三輪、當麻、熊坂、土蜘蛛等の前シテ、柏崎の子方、其他僧脇はすべて之を携ふ。又山伏の用ふるものは刺高(イラタカ)珠數とて、黒き大珠を繋ぎたる珠數なり。

しゆぢやう(柱杖)(狂言)僧、都へ上り、豫て誂へ置きたる柱杖を取りに柱杖屋へ寄る。亭主、柱杖を出し、一二句禪の問答をなす。亭主、感じ入り、教化に預らんとて奥へ招じ、遂に弟子にしてくれと頼み、剃髮する所へ、女房歸り來り、之を見て驚き、腹立ちてわめく。二人辯すれども聞かばこそ、終に二人逃げ出す。(泉)

しゆぢやう(柱杖)(作物手道具)竹をS字形に曲げて、長き竹杖の上部に通し、之に白垂を下げて拂子に擬す。殺生石のワキ持つ。又放下僧の後シテは之に唐團扇を吊したるを持つ。

しゆもく(撞木)(小道具)角田川のシテの鉦鼓を打ち鳴らすもの。

しゆもくづゑ(撞木杖)(小道具)杖の握りの丁字形となり居るものにて、全體に白布又は紅段を巻く。玉井の後シテ用ふ。

しゆらあふぎ(修羅扇)(小道具)修羅物の後シテの持つ中啓。又小癡見物、般若物、龍神物等にも用ふ。諸流とも一樣に波に日の丸にて、黒骨なるが、模様は構圖には差異あり、觀世にては、勝修羅には、表、荒波に日の丸、裏、松に日の丸、負修羅には、両面共稍細かき荒波に日の丸、日の丸の中に、金にて海松貝を細筆す。寶生は勝修羅、負修羅、觀世と反對なり。

しゆらのり(修羅ノリ)(拍子)「中ノリ」の異稱。「中ノリ」とは、八八調や八七調などの一句へ八個拍子を配分する拍子組織にして、修羅物のキリの如く勇壯に謡ふ部分は、拍子を

活潑ならしめんがために、此の拍子法を用ふること多きを以て、「中ノリ」を一名「修羅ノリ」とも稱するなり。

しゆらもの(修羅物)シテが武將の亡靈にして、その鬪争の状を作曲せるもの。本二番目物の異稱。

しゆろう(鐘樓)(作物)臺輪の四隅に四本の柱を立て、棧を附けて上に屋形を造り、屋根の下には小さき鐘を吊り下げ、その撞木をも取り付けたるもの。臺輪と柱は白布にて巻き、棧と屋根に紅段を掛け、屋根の上には絹を覆ひ、撞木には長き紅段の端を結びて引綱とす。三井寺に用ふ。

しゆんえい(春榮)(謡曲)四番目。シテ増尾種直、トモ小太郎、子方春榮丸、ワキ高橋權頭、ワキヅレ早打、狂言高橋從者。増尾種直宇治橋の合戦に囚人となり、高橋權頭に預けられぬたるを、兄種直、共に誅せられんとて尋ね來る。春榮、家人なりと言ひ罵りて、兄

を助けんとしたるも果さず、終に共に斬られんとしたるが、折しも鎌倉の早打來りて春榮の死罪を免さる。春榮やがて高橋の養子となる。(六流)

しゆんくわん(俊寛)(謡曲)四番目。シテ俊寛、ツレ康頼、ツレ成經、ワキ赦免使、狂言船頭。鬼界が島に流されぬたる流人の中、成經、康頼の二人赦免せられ、俊寛一人、島に取り殘されたることを作る。(觀、剛、喜、梅)喜多流にては「鬼界が島」。

しゆんくわん(俊寛)(面)俊寛一曲にのみ用ふる特殊面。

しゆんぜいだだのり(俊成忠度)(謡曲)二番目。シテ平忠度の靈、ツレ藤原俊成、ワキ岡部六彌太。忠度を討ちたる岡部六彌太、形見の短冊を忠度の師たりし俊成の許に持ち來り、共に忠度のことを語る。茲に忠度の亡靈現れて、修羅の苦患を訴ふ。(觀、寶、剛、喜、梅)

しゆんどおりう(春藤流)協方五流の一。初代

源七、金春源右衛門に學びて同流のワキ方となる。明治となり六右衛門死して、淺草鳥越の神職、鐺木祚胤及びその子息達藝事を繼ぎしも、今は流藝全く廢滅せり。

しゆんにちりう「春日流」囃子方笛の一流。春日市右衛門を初代とす。奈良にありし家元、大正年間に死し、京都の田丸某に家藝を譲る。

じよう「尉」老翁のこと。

じようあふぎ「尉扇」(小道具)尉物に用ふる扇。各流何れも白骨に、七賢人又は山水などの墨繪を描ける中啓。故に又「墨繪扇」とも云ふ。

じようがみ「尉髪」老翁に用ふる假髮。全部白毛(黄色を帯ぶ)にて、後頭より額の上まで蔽ふ大いなる髻を結ひたるもの。尉面を着る前シテに用ふ。

じようめん「尉面」(面)老翁に用ふる面。白式尉(翁に限る)小牛尉(小尉)、朝倉尉、笑尉、

三光尉、皺尉、舞尉、石王尉、惡尉等の別あり。
じようもの「尉物」シテが男性の老體なるもの、即ち尉面を着くる曲の總稱。

しよどう「初同」謡曲組織の一部の稱。一曲中最初の地の謡にして、必ず拍子に合ふ歌地を云ふ。概ね地上歌又は地下歌の類なり。

じよのまひ「序之舞」シテの靜肅なる舞にて、笛を本とし大小鼓之に和す。太鼓の之に加はると加はらざるとによりて、「大小鼓の序之舞」と「太鼓入の序之舞」との別あり。正式は五段なれども、略して三段にも演ぜらる。いづれもかゝりに序ありて、正式には序五ツ、略式には序三ツとす。

大小鼓の序之舞——シテは木賊を除く外悉く女性なり。江口、千手、井筒、楊貴妃、采女、定家、芭蕉、東北、佛原、野宮、半蔀、身延、梅、二人靜、住吉詣、吉野靜、木賊、鸚鵡小町、關寺小町、檜垣の類。

太鼓入の序之舞——シテ概ね女性なれども、二三異性もあり。羽衣、誓願寺、雲林院、小鹽、杜若、六浦、藤、遊行柳、西行櫻、姨捨の類。

眞之序之舞——太鼓入の序之舞なるが、常の序之舞よりは序の數多く(正式は七ツ略式は五ツ)位も一層靜かに重々しき感ありて、専ら老體の神人の舞ふもの。老松、白樂天、放生川、雨月の四番。

じよはきふ「序破急」序破急はもと雅樂の用語なり。世阿彌は「一切の事に序破急あり、申樂も之に同じ」と云ひて能に應用し、その著書到る所に縷述せり。

序破急の意義——世阿彌は「序と申すは、自らの姿、破は又それを和して注する釋の義也」「破と申すは、序を破りて、細やけて色々を盡す姿也」「急と申すは、又その破を盡す名殘の一體也」「急と申すは、揚句の義なり、名殘なれば、限りの風體なるべし」と云へり。さ

れば序は在りのまゝの率直なる姿、即ち變化曲折の加はらざる自然の状態、破はその序をほぐして細かく釋き分け、精細なる變化曲折を残りなく表はす状態、急は破の變化を極めたる最後の趣、終局の状態を指すなり。
序破急の段數——世阿彌は序破急の三別を更に段數に配分し、「序破急に五段あり」とて、序一段、破三段、急一段の五段に分てり。其中、破三段とは、破に亦序破急あるを云ふなり。蓋し序より突然破に變らざるやう、序の後に序の氣分を帯びたる一ノ破を挟み、かくて次に純粹の二ノ破を置き、又破より突然急に變らざるやう、急の氣分を帯びたる三ノ破を挟み、然る後はじめて急に及ぼすの用意、寔に甚深の意義あるを見るべし。而して、此の五段を以て一曲の正格型となすも、尙「體分によりて六段ある事もあるべし、又は品によりて一段足らで、四段などある能もあるべし」と變則の場合をも認めたり。

序破急の配當——序破急五段を五番立番組に配當するについて、「能の序破急の事、脇能は序也、二番三番四番は破にて事を盡して、五番目は急にて、果て、序破急をさまりて、遊樂成就の一會」云々と云ひ、その風體曲趣に就いて、花傳書、覺習條々等に細説せり。又一番の舞は勿論、一章一句一語にまで序破急あるを説き、更に藝道修行の一生にも序破急あるを説き、細大備はらざる所なし。序破急を以て、靜、緩、急の意とし、單に謠の進行上の尺度となすは淺膚の見解なり。

しらす「白洲」能舞臺と見所との間にある砂利敷の空地を云ふ。正式には、舞臺及び橋懸の外廻り三尺程を繞りて、細巾の葛石にて區劃シの類なり。

しあり、其の部分内は「内白洲」とて大砂利を敷き、それより外方見所までの部分は「外白洲」とて、小砂利を敷くべきものとす。しらのなみのでん「白波之傳」船辨慶の小書(剛)前の舞の中にてシラル型あり。後の装束は白式にて、演式は觀世實生の「前後」に似たり。

しらはたらき「素働」八島の小書(觀、梅)弓流しの中にて、弓に擬したる扇を拾ひに行き、流れ足にてシテ柱の方へ流るゝ型あり。切も残り留め、脇留となる。又賀茂、及び鞍馬天狗の小書(觀、梅)後者は白頭にて重き習なり。

しらはやし「素囃子」杜若の小書(觀)シテ、物著の時、冠に梅の心葉を挿し、日蔭の糸を下げ、太刀を佩く。前のイロエ無く、舞は初段に段を取らず。「植ゑおきし」と謠ふ。又三輪の小書(觀)、神樂、短き舞となる。

しらひげ「白髭」(謠曲)脇能。シテ白髭明神

(前は化身の漁翁)前ツレ神靈の隨伴、ワキ勅使。天皇、靈夢ありて勅使を白髭社に遣されたるに、明神出現して社の縁起を語り、又奇特を現じて御代を祝ふ。(觀、春、剛、喜、梅)

しらべ「調」一番の能の始まる前、先づ鏡ノ間にて、囃子の音調を試むるを云ふ。

しらべを「調緒」單に「調べ」とも云ふ。太鼓大鼓小鼓を縛る紐。豎調緒と横調緒とあり。

しろあや「白綾」(装束)白き綾絹にて仕立てたる着附。通小町のシテ、千手の重衡、蟬丸のシテ及びツレ、定家、鷺のシテなどに用ふ。

しろがしら「白頭」純白の頭髮。本來白髪なるべきものゝ外、老體たるを表すに用ふるもの、玉井、合浦、龍虎、戀重荷、現在七面の後シテの如し。又常よりも位を特に重く演ずる替の型に用ふる場合、却つて多し。次項參照。

しろがしら「白頭」常は赤頭なるを、特に白頭

に替へ、概ね老體の意にて演出する場合の小書、隨つて位は重くなり、型にも替る所多し。

鞍馬天狗(六流)鹿脊杖突きて出づ。善界(六流)流儀によりては、雲間の拍子とて、音を立てざる踏み方をなす。小鍛冶(六流)概ね前シテを尉とし、後は流儀に依りて靜になると早くなるとの二様あり。其他、氷室(觀寶、剛、喜、梅)嵐山(觀、寶、剛、梅)國栖(觀、寶、剛、梅)車僧(觀、寶、剛、梅)皇帝(寶)野守(觀、剛、梅)殺生石(六流)鶴(六流)望月(觀)以上は常の赤頭を白頭に替ふるものにて、舞働ある曲はいづれも其の演法大に異なるを一特色とす。又山姥(觀、春、剛)安達原(觀、春、寶、剛)以上は常は鬘なるを替へて白頭となすものなり。

しろしれ「白垂」頭髮、垂の一種にて、白毛のもの。面の左右より背部にかけて肩下の邊まで放し垂る。僅少の例外を除けば、老體の神

靈、若くは精靈の用ふるもの。老松、白樂天、放生川、道明寺、白髭、大社、寢覺、輪藏、東方朔、雨月、遊行柳、實盛、頼政の後シテ西行櫻、三笑、歌占、張良、鷺のシテ、及び鶴龜のツレ龜、嵐山の後ツレ木守神等用ふ。

しろぬし〔代主〕〔謡曲〕協能。シテ事代主神、前ツレ神靈の隨伴、ワキ賀茂の神職。京の賀茂の神主、葛城賀茂の明神に參詣し、奇特を見ることを作る。(觀、梅)

しろねり〔白練〕〔裝束〕白き練絹にて仕立てたる着付。白厚板と同様に取扱はれ、翁、住吉詣の源氏、大原御幸の法皇、絃上の後シテ及び師長等に用ふ。

しろはちまき〔白鉢巻〕〔裝束〕細長き白布にして、額より後頭に巻きて結び、兩端を背に垂らす。梨子打烏帽子を被るものは必ず之を用ふ。又直面にて被り物なきものにも、鉢巻、夜討會我の後シテ、望月の後シテ獅子舞の頭

を脱ぎたる後などあり、なほ斬組物の立衆はすべて白鉢巻なり。

しわじょう〔皺尉〕〔面〕皺多くありて、老々としたる尉面。觀世にては、老松、白樂天、放生川、遊行柳、雨月の後、西行櫻、輪藏に用ひ、實生にては、輪藏、豐干に用ふ。下懸にては之を用ひず。

しをり〔シヨリ〕〔型〕泣く型の稱。掌を眼に近く出す。左にても右にてもすれど、シテは概ね左手、ツレは右手なるを一般の常則とし、之を「片シヨリ」と云ふ。又兩手同時にするを「双シヨリ」と云ひ、これはシテに限らる。

しをりかへす〔シヨリ返ス〕〔型〕シヨリ返シと云ふ。

しをりかへし〔シヨリ返シ〕〔型〕「片シヨリ」を續けて今一度重ぬる型。シテは概ね然り。ツレには殆ど無く、「双シヨリ」には全く無し。しをりかへす〔シヨリ返ス〕〔型〕「シヨリ返シ」

をすること。

しをりどめ〔シヨリ留〕一番の能の終を「シヨリ」の型にて結ぶを云ふ。俊寛、蟬丸、大原御幸などは是なり。

しをる〔シヨル〕〔型〕「シヨリ」の型をすること。

しをる〔シヨル、シホル〕〔節〕下懸三流にて「シヨリ」(シホリ)節を謡ふこと。

しんか〔神歌〕翁の歌章。「かみうた」の通稱。

しんかく〔眞角〕〔面〕面工眞角の作りたる型の男面。怪士アキカシの類。用途亦怪士に同じ。

しんたい〔神體〕〔面〕天神面の異種。實生流にのみ草薙の後、繪馬の力神に用ふ。

しんぢや〔眞蛇〕〔面〕般若より更に更に形相の怖ろしき鬼面。實生、金剛にて、道成寺、梅若にては特に山姥の白頭に用ふ。

しんどらうら〔進藤流〕脇方五流の一。初代進藤權右衛門は觀世黒雪の取立により、慶長八年觀世座附となる。維新以後、廢絶して此流

を傳ふるもの無し。

しんによのつき〔眞如ノ月〕鶺鴒の小書(觀)、「眞如の月や出でぬらん」の後に、替の舞働入り、謡型共に替る。

しんのいつせい〔眞之一聲〕前シテがツレと共に、格段に莊重なる開吟をなすものにて、脇能の大部分にあり。その謡は拍子に合はず。而してその謡に先き立ちて眞之一聲の囃子事あり。又協能にして常の一聲なる竹生島、西王母、右近の如きも、翁附の場合には眞之一聲となる。協能以外にて眞之一聲あるは松風一曲のみ。

しんのいつせい〔眞之一聲〕右近の小書(觀)、常は並の一聲なるが、之を眞之一聲に替ふるなり。

しんのおほのみ〔眞ノ大呑ミ〕〔節〕剛吟中音の句末に限りて、稀にある大呑ミ節の特稱。「大呑ミ」を見よ。

しんのかかりどめ〔眞之掛留〕高砂の小書(喜)

神舞のかゝりと留とに替る型あり。

しんのかた〔眞之型〕高砂の小書（春、剛）松の立木出で、下懸にてはシテ箒を持つが常型なるを、上懸の如くサラへを持つ。後は三日月の面を被り、神舞を急々の位にて舞ふ。又石橋の小書（剛）、シテの獅子は一人なれど、型に替る所あり。

しんのかまへ〔眞ノ構〕謡ふ時、扇子の持方に、眞行草の三様あり。眞ノ構は、扇子の要の所を右手の小指にて挟み、主として小指と薬指とにて扇子の柄を握り、他の三指はたゞ軽く添へて持ち、右の膝の上より左の膝の一、二寸程先の方へ斜に、扇子の先を下に著くる持方なり。上懸にて最も廣く用ひられ、一般素謡の場合、又仕舞、囃子などの地を謡ふ場合にも此の構へをなす。喜多流にては之を「行ノ構」とし、すべて下懸は特殊の場合の外殆ど用ひず。

しんのしだい〔眞之次第〕（囃）協能に於けるワ

キの次第（輪藏、道明寺を除く）に限りて囃す囃子事。又「五段ノ次第」とも稱す。

しんのじよ〔眞之序〕「眞之序之舞」の略稱。又葛城の小書（喜）、舞を眞之序之舞に替ふ。

しんのじよのまひ〔眞之序之舞〕「序之舞」を見よ。

しんのちゆうおん〔眞ノ中音〕又「本中」とも云ふ。常の中音のことなれど、中ノウキに落すを「中ニ落ス」と云ふにより、その「中ノウキ」と紛るゝ惧れある場合に「眞ノ中音」と呼ぶ。

しんのでん〔眞之傳〕船辨慶の小書（喜）、觀世實生の「前後」金剛の「白波」などに類する變式にて、前は狂言の送り込となり、後は「聲をしるべに出舟の」の後へ手掛りにて早笛入り、型に替る所甚だ多し。

しんのとめ〔眞ノ留〕松風の（寶）、他流の「身留」と同趣のもの。

しんのはたらき〔眞ノ働〕蟻通の小書（剛）、立

廻り替りて、翁の舞に象りたるものとなる。重き習とす。

しんのまひりり〔眞ノ舞入〕源氏供養の小書（寶）、クリの前に舞を入れ、クセ以下は源氏物語の卷々の名を悉く綴り入れたる文句と替る。

しんのらいじよ〔眞之來序〕（囃）大小太鼓の一種の囃子事にて、概ね一曲の最初に、莊重なる役々の出場に當りて奏す。此の囃子の終は太鼓打上げて休止し、後は大小鼓にてアシラヒ行くを定則とし、後の謡は概ね役のサンにて、太鼓打上げたる後へ謡ひ出す。鶴龜、咸陽宮のシテ、東方朔、西王母、皇帝のワキの如き是れなり。但し邯鄲の如く、曲の中途にありて、囃子後の謡も地上歌なる例外あり。
しんのらんびやうし〔眞之亂拍子〕道成寺の小書（喜）、前は増の面、亂拍子の段數少なく、後は赤頭となる。家元のみ勤むる規定とす。
しんばい〔心奪、眞奪〕（狂言）殿、冠者を伴

ひ、東山へ花の心を採りに行く。折柄山の者、花の心を持ち歸るに會ひ、冠者、殿の刀を借り、威嚇して花の心を奪ひしが、刀を忘れしを山の者持ち去る。斯くと氣づきて二人その跡を追ひ、殿、山の者を捕ふれば、冠者、繩を縛ふ。早く繩をかけよと云ふ内に、山の者逃げ去る。（三流）

しんのわきのう〔眞之脇能〕高砂、弓八幡、老松の三番の特稱。その曲柄が最も協能の眞髓を體せるに因る。

すうたひ〔素謡〕大小鼓、太鼓、笛等の囃子を

全然加へず、唯謡曲のみを謡ふこと。

素謡の作法——未だ座に着かざる間は、常に扇子を袴の紐に挿し置く。帯に挿すは法に非ず。座に著けば、靜に右手を以て（左手を添へ）扇子を抜き、一と先づ座の右側に置く。

次に右手にて軽く扇子の中程を取り、前に廻し、左手を添へて前に置く。前に置きたる後は両手を膝に上げ、さて袴の内に両手を收めて、自己の謡ふべき時を待つ。素謡にて各役を別ちて謡ふ時は、前に謡へる人が自己の謡ふべき所の三句程前まで謡ひ進みたる時、靜に両手を袴の上に置きかへ、二句程前まで謡ひ來たる時、前に置きたる扇子に両手をかけて膝の上に取り、それより謡ふべき定まりの構へをなす。自己の謡一應濟みて後、又次に

謡ふまでに、他の人の謡ふ所稍長き時は、前の順序を逆にして、靜に扇子を膝の前に置きて待つ。素謡一番終れば、すべて一ト先づ扇子を前に置き、さて一同座を立つ時には、前なる扇子に左手を添へて、最初の如く袴の紐に挿す。扇子の持ち方は、觀世流にては「眞ノ構」にて、要の所を小指に挟み、小指及び薬指にて扇子の柄を握り、残る三指にて軽く圍む。下懸諸流は、觀世の所謂「草の構」なり。

體の構へ——兩足の拇指だけを重ね、其の上の臀をしつかり据ゑ、兩膝を廣げ、肩を平らにし、脊を直立せしめて、頭を少し前に傾け、張る肘と胸との間は左右とも大略六寸ばかり開け、視線を四尺以上六尺位の前方に落す。腹は固くせず、ゆつくりと張り、氣を丹田（臍の下）に落ち着かせて謡ふ。

素謡席次——

○地○地

○子方	○地○地
○シテヅレ	○地○地
○シテ	○地○地頭
○ワキ	○地○地
○ワキヅレ	○地○地
	○地○地（地頭にも）

○地○地

一、シテヅレ、子方の無き時は、シテの著席右の端。ワキヅレ無き時は、ワキの著席左の端。役數如何に多くとも、凡て此の席次に規る。

一、地謡方幾重に列すとも、地頭は最後列の中央又は左端。近來は地謡の統一上、中央に居るを常とす。

一、地謡は後列を上位とし、順次前列を下位とす。初心者はつとめて前列に著座するを要す。

一、前列の地謡は、後列の謡ひ出づるを待つて之に和するを法とす。

す。

すいかむり〔透冠〕（裝束）冠の中子扁平にして、纓なく、後より左右に翼を出したるもの、唐草などの透き模様ある薄き羅にて作る。高砂、弓八幡等の後シテ、即ち神舞を舞ふ神體の冠り物。

すぎだい〔杉臺〕（作物）角臺に杉を立て、左右に燈明臺を附く。九世戸に用ふ。

すぎばうき〔杉箒〕（手道具）長さ四尺七寸程の竿竹の先に、杉の葉を束ねたるもの。老松、難波、大社、道明寺の前シテ、高砂のツレなど使用す。下懸にては、高砂の前シテ、サラへを持たずして杉箒を持つ。

すぎばうき〔杉葉箒〕〔杉箒〕に同じ。

すくひあみ〔抄網〕（小道具）四ツ手網より稍小形の網。造花の櫻の花瓣四五片をつけて、櫻川の後シテ使用す。

すくひおち〔スクヒ落ち〕（節）〔スクヒ落シ〕に同じ。次項を見よ。

すくひおとし〔スクヒ落シ〕(節)ヲ「スクヒ落チ」又略して「スクヒ」ともいふ。觀世流、柔吟上音の章に限りてある節なり。其の落チを謡はんが爲、前字より上ノウキに浮かせ、落チの所にて、上ノウキより原音位の上音に復するものなり。故に「スクヒ落シ」の落チは、前字を上ノウキに上げた結果、再び上音に下げ戻す節にて、「ヲ」の箇所を落すと見んよりは、其の前字を浮かすと解する方適當なり。但し「スクヒ落シ」がヤの間五文字のトリ句にある場合は、拍子の關係上、節を十分に謡ふ餘地を存せざる故、前字より浮かさずして、「ヲ」の附きたる一字にて「スクヒ」を小さく、恰もアタルが如く扱ふものとす。又「下」の記號を「サゲ」ト呼びて、「落チ」と同意味に使用することあり。而してスタッ下の如く、「下ゲ」の傍に「スクフ」と細記したるものも「スクヒ落シ」に扱ふ。

すぐぶし〔直節〕(節)基本的符章の一。其形

により俗に「平ゴマ」と稱す。特に上げ下げなく、平調に一音を發聲することを示す。但し「ハル」又は「イロ」の前には在る場合は、漸次浮かすことあれど、それは浮かすべき記號の省略せられたるものにて、單なる「平ゴマ」は平調の發音を原則とす。

すぐろくそう〔雙六僧〕(狂言)能がりの狂言。ワキ僧出で、次第名告等型の如くあり、石塔を見て、所の者に謂を尋ぬ。間、所の者、雙六僧の古跡なることを語り、僧に弔へと勸む。やがてシテ雙六僧の幽靈出で、昔の有様を語り、双六の打方を地謡にして舞ふ。(泉)略して「双六」。

すずかけ〔篠懸〕(裝束)本來山伏の着る麻の衣の稱なれど、能にては、山伏姿の水衣の上に掛くる一種の輪袈裟の如きものを云ふ。白く圓き菊綴様の房數個を着く。安宅、鞍馬天狗、車僧等山伏姿のシテ、及び山伏ワキは皆之を使用す。

すずきばうちやう〔鱸庖丁〕(狂言)都の伯父より鯉をくれよと頼まれし淀の者、伯父を訪ひ、先日來奔走して淀一番の鯉を求めしが、片身をオツ鰯が食べたるにより、御祝儀物にはなるまいと存じ、お詫に來たと云ふ。伯父、その偽なるを知り、鱸の料理の話を始め、酒、茶まで數々馳走する話をなし、汝の鯉は鰯が食ひ、某の鱸は庖丁が食つた。今の物語を食つたつもりで歸れと云ふ。甥、面目を失うて引込む。(三流)

すずのだん〔鈴之段〕翁にて、三番叟が鈴を受け取りてから舞ふ一舞の稱。

すぢをとこ〔筋男〕(面)「河津」を一層凄くしたる如き男面。用途「河津」に同じ。

すてる〔ステル〕(謠方)前よりの位に傾着せず、恰も謡ひ投ぐるが如くスラツと扱ふを云ふ。多くは句末にありて、謠本には「ステル」と細記す。(觀)他流にてはイロを一層甚だしくしたる如く、ズカリと謡ひ捨つること。

(拍子)合せ來たりし拍子を一時斷つこと。(囃)打ち續け來たりし合方を一時斷つこと。その際に打つ手を「ステ」といひ、大小太鼓いづれにもあり。

すはう ヌオウ〔素袍〕(裝束)地模様を置きたる麻布にて仕立て、形は直垂に同じやうなれど、裏なく單衣なり。上に五つ紋、袴の腰板にも紋を染め出し、その紋柄は多く花菱などにて、紋の真中に染革の菊綴を附く。素袍は上下揃ふを正式とし、又直垂より位卑き者に用ふるを例とす。依つて素袍上下はシテに少なく、僅に望月、鉢本、烏帽子折の前シテ位のものなれど、ワキには、角田川、弱法師、山姥、蘆刈、景清、小鹽、雲林院、自然居士等多々あり。又太刀持の役(狂言方を除き)はシテ方もワキ方も皆素袍上下を用ふ。又下に大口を穿き、上に素袍の上のみを着るを「掛素袍」といふ。大佛供養の前シテ、望月、柏崎、清經のワキ等は是れなり。

すはらおとし「素襖落」(狂言)主、太郎冠者を呼出し、明日参宮するが、伯父様にも参らるゝか、聞いて来れと命ず。冠者、行いて使の趣を述ぶ。伯父、急の事にてえ参らぬが汝が門出の祝にとて酒を振舞ひ、素襖をくれる。主、冠者の遅きに出で来れば、冠者正體なく酔ひ、「あの山見さい、この山見さい」と謡ひつゝ路上にあり。主を見て返事もしどろもどろに云ふ内、素襖を取り落し、主、之を拾ふ。(三流)

すはらをとこ「素袍男」シテ以外にて、素袍上下を着る者。常の男ワキ、太刀持のトモなどを云ふ。

すはじかみ「酢薑」(狂言)山城の薑賣、和泉の酢賣と途中にて出逢ひ、系圖競べをし、負けたる者は賣子にならんと約し、互に系圖を述ぶ。位は同じ事なれば相商に参らんと、賣り歩く道すがら秀句を云ひ興じつゝ薑賣は「からく」と笑つて歸らう」と云ひ、酢賣は「す

み家へ向つてすつこも」と云ひて落。(三流)驚にては「酢辛」。

すばやし「素囃子」「囃子」の立ち型なくして、四拍子と謡とのみにてする演奏を云ふ。

すまげんじ「須磨源氏」(謡曲)五番目。シテ光源氏の靈、ワキ藤原興範。藤原興範、都に上る途次、須磨の浦にて、光源氏の靈に逢ひ、昔語を聞くことを作る。(觀、寶、剛、梅、)

すみかける「角カケル」(型)體について云ふ事にて、右斜めの方へ向く事。即ち舞臺の角なる目付柱を受ける事。立つてゐる時は「角カケテ立ツ」といひ、坐る時は「角カケテ坐ル」と云ふ。

すみぞめざくら「墨染櫻」(謡曲)三番目。シテ櫻の精、ワキ僧。深草院崩御の後、上野岑雄、僧となりて御陵に詣で、日頃詠み給ひし櫻花の咲けるを見て、「深草の野邊の櫻し心あらば此春ばかり墨染に咲け」と一首の歌を詠み、花に結びて歸らんとするに、櫻の精現れ、

乞ひて弟子となり、髪を剃りて、さて今の歌の「この春ばかり」を「此の春よりは」と改めよと云ひ、やがて櫻花悉く墨染の色になりぬ。かくて櫻の精、先帝を慕ひ奉りて舞歌を奏す。

(剛)

すみだがは「角田川、隅田川」(謡曲)四番目。

シテ梅若丸の母、子方梅若丸の靈、ワキ渡守、ツレ旅人。都北白河なる吉田何某の子梅若丸、人商人に誘はれて東に下りたる後、其の母狂氣して跡を追ひ、東に下りたるが、隅田川の渡にて、去年今月今日、向ひの岸にて梅若が身まかり、今日その供養をなすと聞き、船頭、旅人等と共に墓に参りて念佛す、梅若丸の幽靈、影の如くに現れて母と詞を交す。(六流)すみつぎのでん「墨次之傳」熊野の小書(觀、梅)イロエ、短冊の段にて、常は一筆にて書き終るを、中にて墨を繼ぐ型をなす習なり。

すみぬり「墨塗」(狂言)大名、永々在京し、訴訟悉く叶ひたればとて、冠者を喜ばせ、やが

て情人の許へ暇乞に行く。女、別れと聞きて悲しみ、水入を座側に置き、水を眼にぬりて泣く。冠者、大名に注意すれども信ぜず。冠者、陰に水入と墨汁とを取り替ふ。女尙知らずに墨塗りて泣く。大名始めて覺り、形見にとて鏡を與ふ。女、鏡を見て腹立ち、墨を大名や冠者に塗りつけ、やるまいぞと追ひ入る。古名「墨塗女」。(三流)

すみばやし「角帽子」(装束)普通僧形の被る頭巾。上は尖り、長く垂れ、後頭部に平紐にて結ぶ。常の僧ワキは皆之を用ふ。シテにては熊坂の前の如き稀にあるのみ。

すみよしまうで「住吉詣」(謡曲)三番目又四番目。シテ明石の上、ツレ侍女、主ツレ光源氏の君、ツレ惟光、ツレ從者、子方童隨身、ワキ住吉神主。源氏の君、久しく須磨明石にありしが、厄解けて都に歸り、内大臣となりて世に出でし時、住吉明神に願果しのため詣でたるに、折柄前に契りし明石の上、同じく住

吉に詣で来る舟に逢ひ、歌よみ交せしことを作る。(観、剛、喜、梅、)

すみゑあふぎ〔墨繪扇〕(小道具)多く「尉扇」として用ひらる。

すみをとる〔角ヲ取ル〕(型)目附柱の方へ斜に向いて角(目附柱の手前の處)へ行き、一旦左足にて止むるまでの動作を云ふ。角を取れば必ず次に左へ廻る。この廻る際に二様の仕形あり。一は先づ右足の踵を外へ振りて足を正面に向け、次いで左足も正面へ振り向けながら引き着けて揃へ、改めて左足から出て左へ廻る。之を「角取り直ス」と稱す。他の一は、右足の踵を外へ振りて足を正面に向け、次に左足も正面へ振り向くことは前と同様なるが、左足を引き着けずに、直に左足から出て左へ廻る。之を「角取り直サズ」と稱す。

すゐげつのでん〔水月之傳〕芭蕉の小書(春、剛)、クセの中に打切ありて、型替る。習なり。すゐちゆうのみひ〔醉中之舞〕一角仙人の小書

(観、梅、樂に替りあり。

すゐはのでん〔水波之傳〕養老の小書(観、梅)「なれて月を汲まうよ」の後ロソギをぬき、直にワキの「げに有難き」となる。後は出端にて天女出で、「ありがたや」云々のシテの謠を謠ひ、シテは半幕を上げさせ、後より出で、「我は此山山神」より謠ひ出し、掛合の中、「唯これ水波の隔にて」の一句をシテとツレと同吟す。ツレを佛體、シテを神體に見立つるなり。神舞は段數を増し、且つ緩急の變化極めて激しく、尙「波悠々なり」の後にイロエ入る。

すゐろんむこ〔水論掣〕(狂言)「水掛掣」の古名。

すゐびやうし〔据拍子〕(型)打切となる前の處にて、二つ踏む足拍子を云ふ。

すゐひろがり〔末廣ガリ〕(狂言)大名、冠者を呼び出し、上方へ末廣がりを買ひにやる。冠者、末廣の何物たるを知らず、「末廣がり買はう」と呼び歩く。すり來り、自分は末廣屋と偽り、持合せの傘を末廣なりと云ふ。冠者、殿

せ

の註文に合すに、地紙好く、骨磨き、要元締め、繪は戲繪とあり、すり、一々だます。冠者歸りてすりの口上其儘を答ふるに大名、末廣とは扇の事なりと怒る。冠者、すりより教へられし囃物を謠ふ。大名、怒りを和らげ、冠者に傘をさしかけさせ、囃子物となりて、シヤギリ止め。(三流)

せあみじふるくぶしふ〔世阿彌十六部集〕能樂

の大成者、觀世第二代世阿彌元清の著作、斯道無双の寶典たり。所謂十六部とは、花傳書、花傳書別紙口傳、五音曲條々、覺習條々、九位次第、遊樂習道見風書、至花道書、二曲三體繪圖、能作書、曲附書、風曲集、習道書、世子六十以後申樂談儀、夢跡一紙、世子七十以後口傳(却來華)、金鳥集、これなり。文學博士吉田東伍、安田古寫本を底本とし、校註を加へ、明治四十二年二月能樂會より發行せり。

せいぐわんじ〔誓願寺〕(謠曲)三番目。シテ和泉式部の靈、ワキ一遍上人。一遍上人、三熊野の靈夢に従ひ、六十萬人決定往生の札を誓願寺にて弘めたるに、和泉式部の亡靈現れ、上人に乞ひて、誓願寺と書きたる額を除け、

新に上人の筆に成りたる六字名號の額を上げしむ。(六流)

せいなふ〔誓納〕三輪の小書(觀、梅)極めて重き習物にて、後は白式となり、神樂、緩急變化に富み、其他型の替る所多し。

せいらい〔政頼〕(狂言)「餌差十玉」に同じ。

せいわうぼ〔西王母〕(謡曲)協能。シテ西王母、ツレ侍女、ワキ漢帝。仙女西王母、侍女を從へて漢宮に到り、三千年に一度實ると云ふ桃實を玉盤に盛りて捧ぐることを作る。(六流)

せうくん〔昭君〕(謡曲)五番目。前シテ白桃(昭君の父)、前ツレ王母(昭君の母)、後シテ單子の靈、後ツレ王昭君の靈、ワキ里人。王昭君、胡國に到りたる後、形見の柳の枯れたるを見て、父母其の死を知り、悲みて其の面影を見んとし、故事に倣ひて鏡を立つ。昭君の靈、單子の靈と共に鏡裡に現る。(六流)

ぜがい〔善界、是界、是我意〕(謡曲)五番目。シテ唐の天狗善界坊、ツレ太郎坊、ワキ叡山

の僧。大唐の天狗の首領善界坊、佛法を妨げんとて日本に來り、愛宕の太郎坊と謀りて、叡山を侵さんとしたるも、途にて高僧に祈られ、神佛の來現に恐れて逃げ歸る。(六流)

せきでらこまち〔關寺小町〕(謡曲)三番目。シテ小野小町、子方稚兒、ワキ關寺の僧、ツレ伴僧。小町百年の姫となり、關寺邊に住みわたるが、誰も小町の果なるを知らず。一年七夕星祭の夕、關寺の僧、稚兒を連れて其の庵を訪ひ、歌語を聞き、やがて伴ひ行きて七夕祭を行ひ、小町も昔を忍びて舞を舞ふ。三老女の筆頭、能謡曲二百餘番中、最奥極秘の曲。(六流)

せきはらよいち〔關原與市〕(謡曲)四番目又五番目。シテ牛若丸、トモ從者、ワキ關原與市、ワキツレ郎等、狂言早打。牛若、鞍馬山を出で、東へ下る途次、美濃の國山中の里にて、關原與市の一行に行き逢ひ、その無禮に憤つて之と闘ひ、數人を斬り、與市の馬を奪

うて逃れ走る。(寶、喜)

せきわうじよう〔石王尉〕(面)「イシワウ」を便宜音讀する一稱。「いしわうじよう」を見よ。

せつげつくわのみひ〔雲月花之舞〕山姥の小書(觀、梅)、クリ前の次第のあとに、シテ「吉野龍田の花紅葉」と謡ひ、地「更科越路の月雪」とつけ、その謡ひ切れより中之舞に入る。白頭にて、型の替る所多し。他流にて「舞入」の小書、大體之に同じ。

せつしやうせき〔殺生石〕(謡曲)五番目又四番目。シテ殺生石の精、ワキ玄翁和尚。玄翁和尚、那須野の原にて、昔玉藻の前に化しゐたりし野千の魂の、殺生石となりて、長く害をなせるを成佛せしむ。(六流)

せつたい〔攝待〕(謡曲)四番目。シテ佐藤兄弟の母、ツレ義經、ツレ兼房以下郎等、子方繼信の遺兒鶴若、ワキ武藏房辨慶、狂言佐藤の下人。義經一行、山伏に装ひて奥へ下る途次、故佐藤庄司の館にて接待を受け、佐藤兄弟の

母と繼信の遺兒鶴若との情に惹かれて、包みゐたる名を名のり、又繼信戰死の時の物語をなす。(觀、寶、剛、喜、梅)

せつぶん〔節分〕(狂言)節分の夜、夫は大社參籠に留守せる女の所へ、鬼、次第、道行を謡うて來る。何か食べたいと女の家を見つけ、案内を乞ふ。女、鬼を見て驚き怖る。鬼は女の美人なるに戀慕し、色々の科あり。最後に女、妾を思ふなら寶をくれよと云ふ。鬼、易き程の事と、隠れ簀、隠れ笠、打出の小槌を與ふ。女、好き時分と、福は内、鬼は外と豆をまく。鬼許せとと逃ぐ。(三流)

せみ〔蟬〕(狂言)行脚僧、信濃路に入り、上松の里にて蟬の精に逢ひ、經を讀みて成佛せしむ。能がりの狂言。(泉)

せみまる〔蟬丸〕(謡曲)四番目。シテ蟬丸の姉宮逆髮、ツレ蟬丸、ワキ官人、狂言博雅の三位。延喜の皇子蟬丸、前世の報にて生れながら盲目なりしかば、父帝、その後世を助けん

とて、逢坂山に捨て給ふ。こゝに逆髪の宮とて、同じ前業にて髪逆しまに生ひ上りたる姉宮の、狂氣したるが來り逢ひ、共に宿業を悲しみて再び相別る。(六流)

せみまる〔蟬丸〕(面)年若なる盲目の面。「弱法師」(面)よりは品よく、蟬丸のツレ蟬丸に専用す。但し弱法師の面と相互流用することあり。

ぜんごのかへ〔前後之替〕船辨慶の小書(觀、梅)、前にては中之舞が序之舞と替り、中にシヲル型あり。後にては「一門の月卿雲客」云々を常と變へ位靜に謡ひ、茲にて半幕上り、シテは幕の内にて床几にかゝり、「抑も是は」と謡ひ出す。「聲をしるべ」の地一句ありて幕を下すと、囃子は手掛りの早笛となり、更めて本幕揚り、シテ長刀をかい込み走り出で、常座にて開き、止めると地「聲をしるべ」の返シ句を謡ふ。舞働は省かれ、「又引く汐に」と謡靜まり、それより囃子ナガシを打ち、ノリ方段

々急になるに連れて、シテ長刀をかい込みたるまゝ橋懸へ流れ行き、地のトメを残して幕に入る。實生にて單に「前後」、金剛にて「白波之傳」、喜多にて「眞之傳」と稱する小書、いづれも前記「前後之替」と大同少異なり。

せんざい〔千歳〕「翁」のツレ。(下懸にては狂言方の面箱持の兼役)。面箱持、太夫の先きに立ち、千歳は太夫に従つて出で、初めシテ柱の下に座着き、太夫の面をつくる時には、脇座にて兩手を突き平伏し居る。「鳴るは瀧の水、く、日は照るとも」と謡ひながら立ち上り、「絶えずとしたり、常にとりたり」の謡の後、千歳の舞を舞ふ。

ぜんじそが〔禪師曾我〕(謡曲)四番目。シテ久上の禪師、ツレ曾我兄弟の母、トモ團三郎、鬼王、ツレ立衆伊東の郎等、ワキ伊東九郎助宗、狂言禪師坊の能力。前は、鬼王、團三郎、曾我兄弟の形見を持ちて曾我に歸り、兄弟の母に之を届く。母、文を持たせて末子なる久

上禪師の許に遣はす。後は、久上禪師の養父伊東助宗、曾我兄弟仇討の責の身に及ばんことを虞れ、久上の寺に禪師を攻む。折柄來りたる母の文を見て養父の心を覺り、木戸を開いて斬つて出しが、終に捕へらる。(觀、寶、剛、喜、梅、)

せんじもの〔煎物〕(狂言)祇園會の當番なる男、立衆を集め、囃物の相談をし、當年は「鷺の橋を渡した、鶺鴒の橋を渡した」とお囃しめされと云ひ、その稽古をなし居る所へ、煎物賣(茶屋)「茶を參れ」と賣りに來る。當番の男、冠者に囃物の邪魔せぬやうに賣れと告げさす。煎物賣、賣り様があるとして「煎じ物を煎じ物、聲の出で候煎じ物召せ〜」、皆々「鷺の橋を渡した、鶺鴒の橋を渡したりや、さうよの」と囃す。扱も目出度い〜とて、舞の眞似をし、相舞に納む。本稱「煎物賣」。(三流)

時、生捕となりし重衡、鎌倉に召し下されたるを、賴朝、千手の前といふ美姬を送りて慰めしむ。一日雨の夜、重衡、千手と寂しき宴をなし、或は琵琶を弾じ、或は舞を舞ひて、果敢なき契をこめたるも、再び都に送らるゝ身となりて、悲みの中に相別る。(六流)

せんちくしふ〔禪竹集〕能樂の古典、金春禪竹氏信(世阿彌の女婿)の著。五音次第、歌舞髓腦記、六輪一露、拾玉得花、五音三曲集、至道要抄、禪竹文正應仁記、圓滿井座法式、以上八書の外、一休題頌、桃華老人申樂後證記、粟田口尊應准后猿樂記の三書、及び金春禪鳳の著、毛端私珍抄、禪鳳習道目錄三冊、吉田兼持の能本作者註文を合集す。文學博士吉田東伍校註し、大正四年三月能樂會より發行せり。

せんぼふ〔懺法〕朝長の小書、後シテの出端に特に習あり、囃子諸役いづれも頗る重きうち、太鼓は一子相傳の極秘とす。協方、狂言

も亦甚だ重くなる。後の待謡に、ワキは經文を披き、「御法の夜聲」までツレと連吟し、「感涙も」よりワキの重き獨吟となり、シテ半幕を上げさす。出端囃子のかゝりは太鼓の獨調にて、その終りの頭以後大小鼓加はる。シテの半幕は、かゝり濟むと一旦おろし、段を取りて後更めてシテ靜に出で、橋懸の途中にて所々立停まり、囃子を聞き澄ます趣あり。舞臺に入り、「あら貴との弔ひやな」を「あら貴との懺法やな」と謡ふ。能濟みて一同退場し、太鼓のみ更に本幕にて幕外に出で、常の調子にて調べを打つ。是れ、懺法には調べ緒を弛めて調子を著しく下げ、所謂懺法調子（俗に水調子）にて打ちたりし事を示すなり。

そ

ぞう「増」(面)面工増阿彌の創めたる型にて、美しく氣高き女面。寶生にては小面と同じく、一般三番目物に多く用ふれど、他流にては、特に品位を尙ぶ曲に限れる傾あり。例へば、觀世にて、玉井、賀茂、吳服、龍田、三輪、西王母、室君、當麻、繪馬等に用ふる如く、主として神靈又はそれに近き仁體に用ふ。
そうはち「惣八、宗八」(狂言)主、出家と料理人とを召抱ふる旨の高札を打つ。漁夫の俄か道心となりし者と、出家の還俗したる者(料理人と稱して)と來りて共に召抱へらる。主は出家に經を讀み、料理人に鮎鯛の料理を命ず。二人心得ぬことゝて當惑し、互に身の上を話し合ひ、代り合ひて經を讀み、料理をなす。主は様子を見に來り、驚き叱る。二人役を取直さんとするも既に遅く逃げ出す。(三)

流)一名「俄道心」

そでかづく「袖被ク」(型)長絹、狩衣、法被など、袖廣き衣の袂を撥ね上げ、頭上へ振り被ること。

そでかへす「袖返ス」(型)長絹、法被、直垂などの袖廣き衣の袂を、外より腕へはね上ぐるやうにすること。左右して左へ行きて止まりたる時、左の袖を返し、右へ行きて元の通りに下すなど、舞の中に多し。又兩袖を返すこともあり。長絹物には一曲の終りに、左袖を返して止むるもの多し。

そでのとめ「袖ノ留」融の小書(剛)、舞の終り袖を卷上ぐる型にて留む。

そでまく「袖卷ク」(型)直垂或は狩衣などの袂を内方へ撥ね廻し、袖をキリツと腕に巻きつくること。即ちこの袖の廻り所は、「袖返ス」とは丁度反對なり。男舞の舞の中や、神舞物の終り方などに多くある型。左だけ巻くと、左右とも同時に巻くと二様あり。

そ

そこのはまかせ「外ノ濱風」善知鳥の小書(觀、梅)、キリの「うとうは却つて鷹となり」以下の文句替り、型も替る所多し。

そとばこまち「卒都婆小町」(謡曲)四番目。シテ小野小町、ワキ高野山の僧、ワキツレ從僧。小町老い衰へて路傍に物を乞ふ身となり、洛外をさまよひ、行き疲れて、路傍に倒れたる卒都婆に腰かけて息ふ。折ふし來かゝりし高野の僧、其の卒都婆に息へるを見て驚き、教化せんとしたるも、却て小町の爲に言ひ詰めらる。かゝる間に、小町、四位の少將の死靈に憑かれて狂亂の態となりしが、暫くにして狂氣覺め、始めて悟道に入る。(六流)

そばつき「側次」(装束)形は法被の袖無き如きものにて、襟は衣紋になり、腋は明き、下端に襷ありて前後をつなぐ。地質模様も法被に同じ。其の用途は、法被と同じく甲冑姿に擬する場合と、唐人姿を意味する場合とあり。シテの之を用ふ者甚だ少なく、前者としては

鉢木の後シテなど、後者としては呉服の前シテなどに過ぎず。併し梨子打烏帽子を被るツレ立衆、前者の場合多く之を着る。七騎落、舟辨慶、大佛供養等の如し。又後者の場合、猩々、張良、天鼓などの唐人ワキ、女にては呉服の前ツレ、西王母、項羽の後ツレ等、唐織の上に更に之を着用す。

そらうで「空腕」(狂言)根は臆病ながら、腕立自慢の冠者、夜道を淀へ使ひにやらる。無刀は心元なしとて、主人重代の太刀を借りて行く。主人、途中に向ひ、太刀をだまし取る。冠者、這々の體にて歸り、なほ腕立自慢をなす。(三流)

そりかへり「反り返り」(型)先づ左足を左の方へ斜に引くと同時に両手を伸ばす。此の時體は左斜に向き、右手は左手より少し下がり氣味になる。次に右足を左足の膝頭邊へ掛け、掛くると共に體を幾分反しながら、足を掛けたるまゝ(即ち左足一本立にて)クルリと左へ

廻り、廻り切つて再び正面へ向き直ると等しく右足を下ろす。

たいきよくのでん「太極之傳」高砂の小書(觀)、同曲の變式中最も重き習とす。

たいこ「太鼓」能四樂器の一。
構造——胴の用材は主として樗又は櫟、殊に赤樗を最も良しとし、其他、黒柿、紫檀、黒檀なども物數奇に用ひたるあり。大きさは一定せざれど、大體直徑八寸五分内外、幅四寸六分以内なり。革は大鼓と同じく牛革なるが、破るゝまで長く使用すること小鼓革に同じく、やはり古革の良品を貴ぶ。革は二枚にて胴を挟み、調緒を以て締め合せ、打つ方を表革、反對の方を裏革と云ふこと大小鼓に同じ。外縁には鐵輪を縫ひ込み、其の縫目を「千綴」と云ひ、千綴の内周に沿ひて、調緒を通す穴は一革に十孔あり、之を「調孔」と云ふ。表面中央に直徑一寸五分乃至二寸位の小

圓形の鹿革を別に貼り、打つには必ず撥を此の革に當つ、依つて「撥革」と云ふ。又表裏兩革とも、その裏面に別に小圓形の鹿革を貼り、之を「裏貼」と云ふ。調緒には小鼓の如く「堅調」「横調」の二筋あり、麻の撚り糸にて、紅色を普通とす。撥は檜の眞去りにて、柁目の正しく通れるを用ひ、二本揃ひて共木なるべきものなれば、之を「割木」と云ふ。長さ一尺一寸位、太さ徑九分乃至九分五厘位、勿論二本の寸法を相同うす。尙太鼓には太鼓臺を用ふ。臺は四角に組みたる枠に、伏せ起し自在なる脚三ツありて、太鼓はその脚端の「蔵手」と稱する所へ調緒を引掛けて支へしむ。

太鼓の符號——太鼓には文字を以て打音を表示す。
「天」、撥を大きく振り上げ、「テン」と強く打ち響かす音、之を「頭」と云ひ、右撥のことも左撥のこともあり。實際上には大小高低輕

重の差あり。

「ツク」、天とは反対に、撥を低く軽く、かすかに刻みつつ、而も打音を響かさず、依つて「キザミ」(刻ミ)と稱し、大抵「ツク」も「ツク」も「……」と連続せしむ。「ツ」も「ク」も音は同じけれど、「ツ」は右撥、「ク」は左撥なるを區別す。又拍子關係も、「ツ」の右撥は専ら八拍子の拍子當りへ當り、「ク」の左撥は拍子當りの中間へ當るを一般とす。

「テケ」、撥を高く上げて音を高く響かせつゝ、それを連続して打つ音、之を「上ゲ」と稱す。「テ」も「ケ」と同音なるが、「テ」は右撥にて、八拍子の拍子當りへ當り、「ケ」は左撥にて、拍子當りの中間へ當る。

「デレ」、「テケ」程に高く撥を上げざるも、音としては、略同様に耳立ちて響く音なり。之も連続して「テレ」も「ケレ」も「……」と打ち、之を「ヨセ」と稱す。「テ」も「レ」も同音にして、「テ」は右撥にて拍子當りへ、

「レ」は左撥にて、拍子當りの中間へ當る。太鼓の掛聲——「ヤ」「ハ」「イヤ」「エイ」の四種、但し實際上には其の各に大小高低の差あり。

たいこおひ (太鼓負) (狂言) 祇園會の當番、

立衆五人へ笛鼓などの持役を振り當て、太郎冠者には太鼓持を當つ。冠者が太鼓持の役と聞きて、女房怒り、辭退せよと勸め、さらすば暇をくれよと迫り、遂に夫婦別れす。さて神事となり、立衆皆々謠ふ中に、冠者、我は能無し故太鼓を負ふ由を謠ふ。女、今日の風流中、一骨折りて見ゆるは太鼓持なりと謠ひ、兩人仲直りす。一名「祇園」(泉)

たいこのいつせい (太鼓ノ一聲) (囃) 「出端」の異稱。「では」を見よ。

たいさんぷくん (泰山府君) (謡曲) 四番目。

前シテ天女、後シテ泰山府君、ワキ櫻町中納言成範、櫻町中納言、吉野の花を愛し、之を邸宅の四方に移し植ゑ、春毎に咲ける間の短

だいせうまへ (大小前) 舞臺中、大鼓方と小鼓

方との座位の中間前方の處を云ふ。

だいはんにや (大般若) (狂言) 僧、旦那へ行

き、大般若を讀む所へ、神子、祓に來りて神樂を舞ふ。そのうちいつしか僧に神樂の所作うつり、シヤギリ止め。(泉、鷺)

たいふ (太夫) 徳川時代には、觀世、金春、寶

生、金剛の四座家元を太夫と稱せり。喜多流のみは、七太夫、十太夫など、本名に太夫と附けたるが多けれど、汎く喜多太夫とは稱せず。

又古書にはシテ役のことを太夫と書けり。

だいぶつくやう (大佛供養) (謡曲) 四番目。

シテ悪七兵衛景清、ツレ景清の母、ツレ源頼朝、ワキ頼朝の從者、ツレ立衆同。平家亡びてより、景清、常に頼朝を狙ひ、南都東大寺に大佛供養ある由を聞き、心残りなく母に暇乞ひしたる後、社人の姿に粧ひて近づきたるも、見現はされしことを作る。(六流)

きを惜み、泰山府君に祈りて、花の命を延べ得たること源平盛衰記に見ゆ。此の曲は之に基きたるものにて、春夜中納言花下に憧れぬたるに、天人天降りて、其の一枝を得んとし、月の入るを待ち手折り去らんとしたるが、泰山府君通力を示して天人を責め、又中納言の心を嘉して、花の命の七日なりしを、三七日に延べしことを作る。(剛)

だいじんばしら (大臣柱) 「脇柱」の別稱。舞臺目附柱と相對し、舞臺に向つて正面右隅の柱を云ふ。なほ「脇柱」の項參照。

だいにんわき (大臣脇) 何々帝、何々院の敕使、或は臣下など、名のみ、大臣烏帽子(又は洞烏帽子)を冠りて、袷狩衣の裝束したるワキ(又はワキヅレ)役の一稱。

だいにんゑほし (大臣烏帽子) (裝束) 風折烏帽下に似たるもの。但しこれには必ず「頂頭懸」を掛け、大臣脇に限りて使用す。

だいせう (大小) 大鼓と小鼓との略稱。

たいへいしやうじやう〔大瓶狸々〕(謡曲)、切能祝言物。シテ狸々、ツレ狸々三人、ワキかうふう。唐土かね金山の麓に住む「かうふう」と云ふ者の、親孝行を賞せんとて、海中より多数の狸々出で来り、酒の壺を與へ、舞を奏し御代を祝ふ。「狸々」の類曲なり。但し前後ありて、常に大瓶の作物出づ。(觀、梅)

たいま〔當麻〕(謡曲)五番目。シテ中將姫の靈、ツレ化女、ワキ旅僧。中將姫の靈、旅僧に當麻曼多羅の由來を語る。(六流)

たいまつ〔松明〕(作物手道具) 萩の枝を束ね、その先に赤き毛をつけて火に見せたるもの。蟻通のシテ、鶺鴒の前シテ、夜討會我の後シテ、大江山の後ワキ等使用す。

たいゆう〔體用〕能に體用の別あり。體は花、用は香ひの如し、又月と影との關係の如し。體を心得れば、用は自ら其内に籠るべし。又能を觀るにも、知る者は心にて見、知らざる者は目にて見る。心にて見るは體、目にて見

るは用なり。世阿彌の「至花道書」にあり。**だいろくてん**〔第六天〕(謡曲)五番目。前シテ神靈、前ツレ神靈の隨伴、後シテ第六天魔王、後ツレ素盞鳴尊、ワキ解脱上人。解脱上人、伊勢に参りたるに、佛法の障碍あるべしとの靈夢を蒙る。やがて佛法を破却せんとする第六天の魔王現れたるが、素盞鳴尊現じ給ひ、寶棒を以て之を追ひ退く。(觀)

だいる〔大會〕(謡曲)五番目。シテ天狗、ツレ帝釋天、ワキ僧正。十訓抄に、叡山西塔の僧、東北院の邊にて、鳶の殺されんとするを救ひたるに、彼の鳶實は天狗にて、後に法師に化し來り、何にても報恩の爲、望を叶へんと云ひしかば、僧、釋尊在世の樣を見たといふに、忽ち西山は靈山となり、佛在世の大會の樣を現じたるが、護法天童、天狗の仕業を惡み、立ち現れて之を追ひ拂ひしこと見ゆ、此の曲は之を少しく更へて作る。(六流)**たううち**〔唐團扇〕(小道具)團扇の一種。

柄が眞中に通じ、左右に半楕圓の縁あり、絹張にて模様あり。唐人のシテにて、概ね樂を舞ふ役の持物とす。

たうかんむり〔唐冠〕(裝束)形は透冠に似たり、黒色なり。之に大小あり。咸陽宮のシテ、張良のワキの如き直面の唐人は小なるを用ひ、皇帝、鶺鴒、野守の後の如き戀見物、加茂、嵐山の後の如き大飛出物は、赤頭の上に被るを以て大なるを用ふ。

たうじやうじ〔道成寺〕(謡曲)四番目。シテまなごの庄司の娘の靈(初白拍子、後蛇體)、ワキ道成寺住僧、ワキヅレ從僧、狂言能力二人。男を慕ふ餘り、一念の毒蛇となりし女の執念、永く道成寺の鐘樓に残りて、鐘再興の供養に祟をなす。(六流)

たうじやうじあふぎ〔道成寺扇〕(小道具)各流とも道成寺に普通は鬼扇を用ふれども、觀世家元限り、赤地に金の油煙形を五つ散らし其中に四季の花を描けるを用ふることあ

り。又替として、赤地に横雲を描き、百草圖を散らしたるもあり。又他流に於ける特定は、寶生流は雲に飛龍、喜多流は夕顔、金剛流は一面紺青、一面綠青にて大内綾の模様とす。**たうしん**〔刀身〕(小道具)柄も鞘も無く、刀身だけのもの。小鍛冶に用ふ。

たうじんずまふ〔唐人相撲〕(狂言)久しく入唐せし日本の相撲取、通詞によりて歸國を願ひ出づ。王、之を聽し、名残に相撲を取らしむ。下官皆負け、最後に王自ら取り亦負け。(三流)大藏にては「唐相撲」。

たうせん〔唐船〕(謡曲)四番目。シテ祖慶官人、ツレそんし、そゆう、子方日本子二人、ワキ箱崎某、狂言唐人船頭。十三年前唐土と日本と船争ありし時、日本に捕はれ、其後箱崎殿に召使はれぬたる祖慶官人は、日本にて生れし幼兒二人と共に、毎日牛馬を追ひて野に出づるを業とせり。茲に又唐土に残し置き

たる官人の子二人、父を迎へんが爲、數多の寶を持ち來り、許を得て父を連れ歸らんとす。されど日本にて生れし二兒は共に行くを許されず、唐土の子は父を連れ行かんとし、日本の子は引き止めんとす。官人は何れの子にも従ひ兼ねて、海に投ぜんとせしが、箱崎殿、その哀なる様に感じ、日本子二人をも連れ行くことを許し、かば、親子五人喜び勇みて故國に歸る。(觀、寶、剛、喜、梅)

たうせん「唐船」(作物)「緞子包舟」の類なり。竹にて形を作り、緞子にて包みたる舟。之に立て外づし自在の帆柱あり、帆は帆綱にて上げ下げす。唐船の曲に用ふ。

たうぼうし「唐帽子」(装束)上部は圓平にて、下部は角帽子の如く垂る。唐船、三笑のシテ、天鼓、昭君の前シテ等、老體の唐人にのみ用ふ。

だうみやうじ「道明寺」(謡曲)協能。シテ白太夫の神、後ツレ天女、ワキ尊性法師。相模

田代寺の僧尊性、善光寺にて靈夢を蒙り、河内國土師寺即ち道明寺に到りたるに、白太夫の神靈現れて、此寺の縁起を語り、又夢告の如く寺中にある靈木木槌樹を教へ、その果實を念珠の料に與へ、且つ舞樂を奏し奇特を見す。(觀、剛、喜、梅)

たうゑ「田植」(狂言)加茂の神職、早乙女多勢に神田の田植をなさしむ。女と神職との間に唄を取り交し、神職はその唄にて女にからかひ、女は苗泥を投げつけて之に應ず。本來は賀茂の替間にて「御田」と云ふ。之を取離して一番狂言にも立て、その場合に和泉流にては「田植」とも別稱するなり。

たか「鷹」(面)怪士面の一種。舟辨慶、項羽の後などに用ふ。

たかさご「高砂」(謡曲)協能。前シテ住吉の松の精(尉)、前ツレ高砂の松の精(姥)、後シテ住吉明神、ワキ阿蘇神主方成。阿蘇の神主、高砂の浦にて相生の松(住吉の松、高砂の松)

の精に逢ひ、又住吉に到りて住吉明神の來現を拜することを作る。(六流)

たかやすりう「高安流」協方五流の一。大鼓方の高安家と其の先を同うし、流祖を壽閑と云ふ。本系より分れて金剛座附となる。維新後家元絶え、大友信安僅に藝事を支へしも、其の歿後東都に同流を見ず。漸く名古屋に西村一家ありて流儀を維持し、家元は金剛宗家預かり居りしが、昭和五年、西村弘敬の息滋男をして家元を嗣がしめたり。

たかやすりう「高安流」囃子方大鼓の一流。流祖與右衛門、法名道善は、觀世小次郎信光に大鼓を習ひ、無雙の達人となり、技藝上の榮譽の稱號「權守」を許さる。現家元十一代鬼三。

たからのかさ「寶の笠」(狂言)寶を求めに都へ遣はされたる冠者、寶屋も知らず、何の寶とも知らねば、寶屋はないか、寶買はうと呼び歩く。すつば出で來り、持合せの笠を寶と

偽りて賣る。奇特はと問へば、之を被れば人に見えずとて、冠者に被らせて、見えぬと云ふ。冠者歸りて仔細を語り、主に被らせて見えぬと云ふ。主、疑ひ、強ひて冠者に被らせて、その偽を看破し、すつばにぬかれたるを知り、やるまいぞにて追ふ。(泉、鷺)一名「隠れ笠」。

たからのつち「寶ノ槌」(狂言)大名、冠者に寶を買ひに都へやる。冠者、寶のありかを知らねば、寶買はうと呼び歩く。すつば來り、木の丸棒を打出の小槌と偽り、之を打てば何物にも出づとて、その呪文を教ふ。冠者買ひ取りて主に示す。大名、馬を打出せと命ず。冠者呪文を唱ふれども出やう筈なく、彼是言ひ紛らすうち、大名取上げせ、冠者の背に跨りて氣付き、憎い奴の、やるまいぞと追ふ。(三流)

たきぎのう「薪能」奈良興福寺南大門前の芝生の上に於て、二月に七日間行はれたる春日神

社の神事能なり。徳川初期までは、觀世、金春、寶生、金剛四座の太夫にて勤めしが、觀世は公儀御用を言立て、役を免れ、以後、金春は例年缺くこと無きも、他二座は交代にて勤む。喜多は武家式樂と稱へて、終始與からず。此の神事能は世阿彌以前よりあり、徳川時代には毎年行はれたるものなり。

たきながし〔瀧流シ〕安宅の小書（觀）クリ、サシ、クセをぬき、「面白や山水に」と扇を捨て、あと扇無しに珠數持ちたるまゝ舞ひ、男舞の二段目過ぎに橋懸へ行き、欄に出で、流水を眺め、歸りて扇拾ふと、舞上ゲになりてワカを謡ふ。切に橋懸へ出で、一ノ松よりワキを見込み、更に幕際にてユウケンして止む。
たけうちづゑ〔竹打杖〕（作物手道具）青竹にて葉枝のつきたる打杖。龍虎の後シテ専用す。

たけだい〔竹臺〕（作物）臺に葉附の竹數本を立て、之に雪綿を覆ひたるもの。竹雪に用

ふ。流儀により臺の形異同あり。
たけのこあらそひ〔竹ノ子争、笋争〕（狂言）男、某の畑へ、隣の藪から根ざして筍が生へた、先づ折り取らうと取る。藪の持主、人の取らぬやうにと出で來り、之を見て制す。一は自分の畑だといひ、一は自分の藪からだと言ひ喧嘩す。仲裁者出で、双方の言ひ分を聞いて決し兼ね、相撲を取らす。（三流單に「竹の子」筍とも）

たけのゆき〔竹雪〕（謡曲）四番目。シテ直井左衛門の前妻、ツレ月若の姉、子方月若、ワキ直井左衛門、狂言直井の後妻、狂言直井の下人。月若、父の留守中、繼母の爲に衣一重にて竹の雪を拂はさせられ、遂に雪中にて息絶ゆ。實母實姉尋ね來り、死骸を掘り起して歎く所へ、父も歸り來りて後悔す。上天之を憫みて月若を蘇生せしむ。（寶、剛、喜）

たこ〔蛸、章魚〕（狂言）ワキ僧、次第を謡ひ清水の浦に着きたる由の着詞を述べ。シテ蛸

の幽靈現れ、お弔ひあれと消え失す。アド出で僧と問答し、大蛸の祟りしことを物語る。僧、讀經して弔へば、後シテ最前の幽靈現れ昔の有様を語り、舞の所作にて終る。能がりの狂言。（三流）

たご〔田子〕（小道具）水波みの擔ひ桶にて、長き紐をつけ、擔ひ竹の兩端に一箇づゝ懸けて肩に擔ふ。高さ七寸程なり。融、絃上の前シテ使用す。

だし〔ダシ〕（謡）寶生流にて、詞の一句の内に聲を起す所、又「ワリ」とも云ふ。觀世流の「開キ」又は「ワケ」に同じ。

たすき〔褌〕褌として別に仕立てたるものはなく、鉢巻を之に流用す。掛け方も腕へ絡むに非ずして、袖と袖とを通し、背後にて結び寄す。その用ひらるゝ鉢巻は、曲により、人物により、又流儀により、白鉢巻、色鉢巻、金緞鉢巻の別それあり。

ただのぶ〔忠信〕（謡曲）四番目。シテ佐藤忠

信、ツレ源義經、ツレ僧兵數人、ワキ伊勢三郎。義經、吉野を頼み身を寄せたるも、衆徒變心して夜討すべき由聞えれば、又こゝより遁れ落つ。忠信一人後に留まり、寄手の僧兵を引き受けて矢倉に上り、防矢を射、やがて空腹切りて後の谷に轉び落ち、其まゝ義經の跡を追ひて吉野を逃る。（觀、寶、梅）

ただのり〔忠度〕（謡曲）二番目。シテ平忠度の靈、ワキ旅僧。忠度の靈現れて、曾て俊成の臣なりし旅僧に昔の物語をなし、又弔を請ふことを作る。（六流）
たたみやたい〔疊ミ家臺〕（作物）「引立大宮」に同じ。
たち〔太刀〕（小道具）常の太刀は、能にては、腰に佩きて出づると太刀持の持出づるとあり、修羅物の後シテ武將の總べて、其他、法被物（即ち甲冑出で立の意）の武人は、亡靈、現在とも之を佩く。供人に持たせ出づるは、右以外、即ち甲冑姿ならざる場合にて、

直垂、素袍などのワキに多し。なほ「太刀持」の項参照。

又別に「真太刀」^{シツゲチ}とて、衛府の太刀もあり。但し之は使途尠なく、業平物などに稀に用ふるのみ。

たちしゆう「立衆」能にて、數人一時に出づるツレ（シテ方にてはワキ方にては）を總稱して云ふ。概ね軍勢、從者、同行者の類にて、斬組物にその例多し。

たちばな「橋」（謡曲）シテ橋諸兄の靈、ワキ官人。官人、橋諸兄の舊跡を尋ねて、其の神靈に逢ふことを作る。梅若實その祖先の爲に作らしめたる新曲なり。（梅）

たちうばひ^{ハチン}「太刀奪」（狂言）大名、冠者を連れて北野へ社參の途次、通りがりの男の太刀に目をかけ、冠者をして奪ひ取らしめんとし、却つて男の爲に我が刀を取らる。大名、重代の刀を取られてはと、自ら男を捕へ、冠者に縛らしめんとするに、冠者、悠々と繩

をなふ。繩漸く出來上れば、男と取り違へて大名の身へ打ちかく。（三流）

たちまはり「立廻」囃子につれて、舞臺をたゞ一巡する程の所作。即ちイロエの一種と見るべきものなるが、觀世、梅若には通例のイロエと別ちて此の稱を用ふ。外形の上にては兩者殆ど同様なるも、常のイロエはさしたる意味を含まざるに、立廻は何か心に探り求むる如き趣を有す。又曲によりては、常のイロエよりも稍長きものや、特に橋懸へ出づるものもあり。斯く別趣のイロエを觀世、梅若にて「立廻」と特稱する次第なれば、他流にては、一切「イロエ」の中に包括し、或は「カケリ」の分類となせるもあり。囃子は大小鼓、又は大小太鼓にて、笛之をあしらふ。

たちもち「太刀持」主役が太刀を佩かずして、供人に持たせ出づる場合、その太刀持の役を云ふ。主役がワキ方ならばワキツレの役、主役がシテ方ならばシテツレの役、又ツレ役と

せず、間狂言の役なるも多し。而してツレ

役は概ね素袍上下、狂言役は袴を通例とす。

たつた「龍田」（謡曲）四番目。シテ龍田姫、ワキ旅僧。旅僧、龍田の明神に參らんとして、龍田姫の奇特を見ることを作る。（六流）

たつばい「達拜、立拜」（型）兩手を高めに大きく前へ出し、兩拳を合はすやうにする型。その「合掌」と異なるは、彼は開きたる掌の先を合せ、此は閉ぢたる拳の節を合せ、彼は肘を廣げずして低く、此は袖ともに張りて高し。又扇など持物ある時は、彼は持物の先を手前

（内方）へ傾け、此は向ふ（外方）へ出す。

たにかう「谷行」（謡曲）四番目又五番目。前シテ松若の母、後シテ伎樂鬼神、子方松若、後ツレ役行者（觀世には無し）、ワキ帥の阿闍梨、ワキツレ小先達及び同行山伏數人。少年松若、師に従ひて峯入し、山路にて病起りたるため、大法によりて谷行（生きながら谷間に投げ捨つる法）に行はれたるが、山伏等憐

みて修法せしに、行力の功德に引かれて、伎樂鬼神飛び來り、少年を救ひ上げて再び蘇生せしむ。脇方にては檀風と共に極めて重き習物とす。（六流）

たぬきのはらつづみ「狸腹鼓」（狂言）親狸、獵師の伯母に化けて其の家に行く。途中獵師に逢ひ意見をしてゐる中、化の皮露はれ、哀訴して命を助けられ腹鼓を打つ。獵師拍子に乗りて踊る。その隙に弓矢を奪つて獵師に射向ふ。獵師組伏せんとする時、狸は既に逃げ去れり。（大）

たはむれのまひ「戲之舞」松風の小書（觀）、作物の松に常には無き短冊を下げ、シテは狂亂となりてより、此の松に短冊に、屢々戲れ寄る戀情を見するによつての名なり。中之舞の中に、松の外周を廻りなどし、舞上ゲには短冊を手にして、再びワカ「立ち別れ」より謡ふ。破之舞をぬき、切の型も替る。

たま「玉、珠」（小道具）玉に三様あり、一は

如意寶珠、玉の形に金箔を置きたるもの、岩船の前シテ、合浦の後シテ持ち出づ。二は火焰珠、金箔置の玉の周圍に火焰の形をつけたるもの、金箔を置きたる圓き盆に載せ、竹生島の後シテ持ち出づ。三は滿珠干珠、玉井の後ツレ、一人銀の珠、一人青き玉を持つ。

たまかづら〔玉葛〕(謡曲) 四番目。シテ玉葛の内侍の靈、ワキ旅僧。玉葛の内侍の亡靈、旅僧に昔の物語をなし、弔を受けて成佛することを作る。(六流)

たますだれ〔玉簾〕楊貴妃の小書(寶、剛、喜)、作物の宮の三方に葛帯を數條結び下げて、簾の如くに飾る。型には常とさして變りなし。

たまのだん〔玉之段〕海士の一節「其時人々力を添へ」より「海上に浮み出でたり」までを云ふ。

たまのみ〔玉井〕(謡曲) 脇能。前シテ豊玉姫、前ツレ玉依姫、後シテ海神、後ツレ天女、ワキ彦火々出見命。彦火々出見命、兄火闌降命

の釣針を魚に取られ、之を取り返さんとて龍宮に至り、龍女豊玉姫と契りしことを作る。(觀、剛、喜、梅)

たまのみ〔玉井〕(作物)「井筒」と同形にて、臺輪の四隅に竹を立て、板にて組みたる井桁を載す。但し井筒には一隅に薄を立つるも、これは井桁に四手をかくる違ひあり。玉井の曲に用ふ。

たむら〔田村〕(謡曲) 二番目。シテ坂上田村丸の靈、ワキ旅僧、清水寺の田村堂に祭られたる坂上田村丸の靈現れ、旅僧に清水寺の縁起及び觀音の功德を語り、又東夷征伐の際、鈴鹿山に千方を亡ぼしたる戦功を語る。(六流)

たるむこ〔樽掣〕(狂言) 今日の日掣入に人手なきに困じたる掣、清六といふ男に同行を頼む。清六、樽を持ち掣と共に舅の家に行く。冠者間違へ、舅、引出物に刀を出せば、清六受取り、好き仕合と暇を乞ふ。掣はその刀を

呉れと云ひ、清六は我が貰つたものと争ひ、掴み合ひ、打こかして入る。掣、散々の仕合せ、樽なりと取りて歸らうと落。(泉)

たれ〔垂〕頭髮の一種。「頭」よりは毛髮少なく短かく、且つ髮裾揃へり。垂には必ず其の上冠物を戴く。垂に「黒垂」と「白垂」との二種あり。各其項参照。

たにかい〔湛海〕(謡曲) 四番目。シテ湛海、子方牛若、ワキ鬼一法眼、ワキヅレ從者、狂言法眼下人。鬼一法眼、牛若丸を討たんとして、掣なる長谷部の湛海に謀る。湛海やがて五條天神に牛若を待ち、之と闘ひたるが、却つて首を打落さる。(剛)

だんがしら〔段頭〕(囃) 小鼓の手の一種。大鼓のみの合奏にて、拍子不合の謡、又は舞事より、大ノリ地に移る際に多く用ひらる。

たんじやく〔短冊〕(作物) 手道具又は小道具。白紙のまゝの奉書を短冊形に切りたるものは作物、又本物の短冊を用ふるもありて、之は小道具に屬す。熊野にてはシテ袂に入れて出で(概ね小道具の方)、草紙洗にては五色の短冊を文臺に載せて出し(常に小道具の方)、關寺小町にては藁屋の左右につけ(作物)、忠度のシテは矢につけて出で(作物)、歌占のシテは弓につけて持つ(作物)。

たんじやくのとめ〔短冊ノ留〕熊野の小書(剛) 短冊の段の末、書き終れる意に、常は扇開きて右へ出すを囃子方への知らせとすれど、此時には、短冊書く内にワキ立ち、シテの後方より覗き込みて上の句を読み、シテは下の句のみを讀みて短冊を捨つ。囃子方へは、ワキの立つを以て囃子シカケの知らせとす。

だんのじよ〔段ノ序〕井筒の小書(剛、喜)、舞前の「なつかしや」「昔男に」「移り舞」「雪を廻らす」「花の袖」と五つに切りて謡ひ、各に序一つ宛を配る。此の時、飾り太刀(眞太刀)を佩く。

だんぷう「檀風」(謡曲) 五番目。前シテ日野資朝、後シテ不動明王、子方梅若、ワキ帥の阿闍梨、前ワキヅレ本間三郎、トモ本間從者、後ワキヅレ船頭、狂言追手。父日野資朝の流されたる跡を慕ひて佐渡に渡りし梅若丸、父が本間三郎に斬られたるを見て、其の仇を討ち、帥の阿闍梨と不動明王の加護とによつて逃れ歸る。太平記に據りて作りたる曲。脇方にては谷行と共に極めて重き習物とす。(寶剛)

だんもの「段物」各曲中の或る一段にして、特に謡ひ所、舞ひ所 又は囃し所の眼目たるものに對し、古來段の名稱を附したるものあり。文ノ段(熊野)、鐘ノ段(三井寺)、網ノ段(櫻川)、車ノ段(百萬)、篋ノ段(百萬)、鼓ノ段(籠太鼓)、笠ノ段(蘆刈)、駒ノ段(小督)、筑ノ段(自然居士)、琴ノ段(咸陽宮)、枕ノ段(葵上)、鶉ノ段(鶉飼)、鮎ノ段(國栖)、玉ノ段(海人)等の如し。

ち

ち「チ」小鼓の打音を標示する符號の一。調緒を握り締めたるまゝにて小さく軽く打ち、「チ」の音を發するもの。又之を「甲」と稱す。

ち「地」(謡) 謡曲の章段中、シテ、ワキ等諸役の謡以外、別に同吟する部分を云ふ。又其の地を謡ふ「地謡方」の略稱に用ふ。

ち「地」(囃) 舞事、囃子事の途中、手の變化の無き部分。即ち、序、カ、リ、段、オロシ、越シ、地頭、手、グワツシ、上ゲ等の如き格別なる手所以外の所。

ちいさがたな「小刀」(小道具) 腰に挿す小刀にて、鏢なし。本身の實物を用ふ。シテ、ワキ、ツレの別なく、主として現在物の武士一般、又武士ならずとも、何の某と名の程の士人は大抵佩用す。但し斬組物などにて所作の激しき役には、鞘走るを懼れて帯びざるも

のも多し。

ぢうたひ「地謡」「地」の謡を謡ふこと。又其の謡ひ手たる「地謡方」のこと。

ぢうたひかた「地謡方」地を謡ふ者、「地方」とも、又略して單に「地」とも呼ぶ。能にては、シテ方に屬し、舞臺の出入は切戸口よりす。能の時、舞臺の地謡座に數人二列に坐して謡ひ、素謡の場合には役を謡ふ者の後に、仕舞、囃子の場合には、舞手の最初着座せる後に、數人列坐して謡ふ。

ぢうたひざ「地謡座」舞臺に向つて右に、半間程延び出でたる部分あり、勾欄にて矩形に圍む。その奥寄りの笛座に近き方の部分を地謡座と稱し、能に於ける地謡方の座席とす。

ぢうら「地裏」舞臺の外、地謡座の背後の方面。

ぢがしら「地頭」地謡方全體を統率し、その中心となりて謡ふ一人を云ふ。地頭は地謡方の後列の中央、若くは左端に坐するを定めとす。

ぢがしら「地頭」(囃) 大小鼓にて打交はず特殊の手配、舞事の中には二段目以後に入り大抵は段と段との間に各一度あり。又然らざるものとても、舞の末部にて角取り廻る所より必ず打ちて舞上げとなる。

ちぎりき「千切木」(狂言) 伊勢講の當番なる主、冠者を使として人々を招く。たゞ差出口をすする太郎のみ知らさざりしに、太郎、押しかけ來り、座敷を見て差出口をなす。人々彼を踏みつく。太郎の女房聞きつけて來り、太郎と共に刀、棒を用意し、復讐に行きしが、皆々留守を使ふため止むなく引上げ、諍はてゝの棒ちぎり木とはかくやらんと云ひ、女房可愛の人やと負つて歸る。(三流)

ちくさをとこ「千種男」(面) 怪士面の一種。面工千種の創めたる型の男面。用途、怪士に同じく、船辨慶、碇潜、船橋などの後に用ふ。ちくぶしま「竹生島」(謡曲) 脇能。シテ龍神、ツレ辯才天女、ワキ延喜帝臣下。朝臣、竹生

島に詣で、奇特に逢ふことを作る。(六流)
ちくぶしままうで「竹生島詣」(狂言) 主、無
断にて家出せし下人が、昨夜歸りしと聞き、
折檻せんとて彼が私宅へ行く。竹生島詣した
りと聞き、此度は免し、竹生島の珍らしき談
をせよと云ふ。冠者、主が秀句好なるに乗じ
神前に龍、犬、猿、蛙、蛇、が詣でゐしが、
秀句を云うて立ちたりと、出たらめを云ひて
機嫌を取る。その意を主に聞かれ、彼等は、
神前を立つ、往ぬ、去る、歸るとまで答へし
が、蛇の秀句に窮し、言ひ紛らかす。主叱り
つけ、冠者畏まる。(泉)

ちごやぶさめ「兒流鏑馬」(狂言) 氏神の祭に
兒流鏑馬を出す當番となりし男、兒に當つる
位の小供を持たず、女房を兒に拵へて流鏑馬
の役を果せり。村の顔役、祝言に來り、神酒
を兒に戴かさんと云ふ。男、困惑し、兒もい
やがる、果は喧嘩となり、女房の化の皮剝が
る。(泉、鷺)

ちざうまひ「地藏舞」(狂言) 僧、次第、名告、
道行を誂ひ、在所に立寄り一夜の宿を乞ふ。
宿、出家に宿貸すは禁制なりとて断る。僧再
び來り、笠ばかり一夜預かりくれよと頼み、
笠を着ながら經を讀む。宿、出で、咎むれば、
此家の内は主の心の儘なるべし、此の笠の下
は自分の勝手と理詰を云ふ。宿、面白き坊主
とて宿を許す。やがて酒を勧め、舞を所望
す。僧、地藏舞を舞ひ、シャギリ止め。一名
「笠の下」。(三流)

ちちのじょうえんめいくわんじや「父尉延命冠
者」「翁」の替。翁「父ノ尉」の面を着、千歳
「延命冠者」の面を着く。文句、型に替る所あ
り。

ちどり「千鳥」(狂言) 主、客來あれば酒を一
樽取り來れと冠者に命ず。冠者、勘定が濟ま
ぬ故酒を渡さぬと断るを、是非代無しに取り
來れと云はれ、酒屋は話し好なれば、色々話
しかけて取らんと、酒屋へ行き、尾張の對馬

祭見物の話を始め、千鳥を伏せる仕形をな
し、遂に樽を馬に見立て、馬場のけ、御
馬が參ると、樽を持ちて逃ぐ。酒屋、横着物
と追ふ。(三流) 古名「對馬祭」。

ちどり「地取」(謠) 次第の謠には、その役謠
たると地謠たるとの別なく、そのあとに地謠
にて低聲に次第の文句を誂ひ返すを云ふ。地
取には第一句の返シを誂はず、随つて二句の
みを誂ふ。眞之次第に於ては地取を拍子に合
せ、其他は拍子に合せざるを原則とす。但し
攝待、車僧は後へ道行に聯絡する關係上、地
取を拍子に合す如き例外あり。又土車、昭君
の如きは、役の次第の後に地次第あるを以て、
此の地謠以外に地取を附けず。

ちはやのでん「知波夜之傳」代主の小書(觀)、
神舞替る。

ちびやうし「地拍子」謠の拍子に合ふ部分に
は、其の拍子に一定の規矩あり。其拍子規矩
を地拍子と稱し、謠一句若しくは半句が八個

の拍子に配分せらるゝを基本とするにより、
其の規矩を又「八拍子」とも云ふ。而して此
の八箇拍子の一連を「本地」といひ、其外、
特殊の短句に對する拍子配當として、四箇拍
子なるを「トリ」、六箇拍子なるを「片地」又
は「一ツ地」、二箇拍子なるを「オクリ」と云
ふ。此の三種は本地の間に挟在す。

ちやうけん「長絹」(装束) 地は生絲にて織り
(俗にホラ織と云ふ)、その仕立は、襟は立襟、
前身と後身とは腋より下離れ居り、兩胸に長
き組紐を垂れ、前にて結び垂らす。單衣にて、
裏附きの物なし。紫地に草花模様などを金縫
にて置き、紅色の胸紐を附けたるものを普通
とし、なほ他に地色は、緋、白、水色、萌黃
など様々あり。三番目物の後シテ、及び天女
など多く之を用ふ。又男にては公達物の後シ
テ、法被の代りに之を用ふるもあり。其他、
小督の後シテ、絃上の師長、熊野、蟻通、蟬
丸、小鍛冶のワキなども着用す。

ちやうづかけ〔頂頭懸〕(装束) 大臣烏帽子へ装飾的に上より懸くる狭き平紐、これは打紐の外なり。又「ぢやう(じやう)づかけ」ちやうどかけ」とも云ひ、文字も「上頭懸」、

「調度懸」とも書く。

ちやうどかけ「調度懸」前項を見よ。

ちやうはんづきん〔長範頭巾〕(装束) 兩鬢の側に、烏兜の垂の如き耳蔽ひ(鏡の意)付き、色の異なりたる織物を重ねてあり。熊坂、烏帽子折に用ひ、正尊にも用ふることあり。

ちやうめいりう〔長命流〕 囃子方笛の一流。長命清左衛門を初代とす。長命家は古き家にて、狂言の鷺流と同族なり。今廢絶して無し。

ちやうやはは〔長ヤヲハ〕(拍子)「平ノリ」中に「ヤヲハの間」よりも更に半拍子分長き間を保てるもの。但し極めて稀なり。

ちやうりやう〔張良〕(謡曲) 五番目。シテ黄石公、ツレ龍神、ワキ張良、漢の高祖の謀臣張良、黄石公に下邳の圯上に逢ひ、兵法の奥

儀を學びたる故事を作る。梅若は張良をツレとせり。(六流)

ちやうりやうべしみ〔長靈戀見〕(面) 戀見面の一特種にて、大靈見よりは稍小さく、且つ色も赤味に乏し。熊坂、烏帽子折の後に各流共に用ふ。長靈とは長範の靈の意なるべし。

ちやかざざとらう〔茶嗅座頭〕(狂言) 座頭の妙音講に嗅茶を出すと、いたづら者見て居て、胡椒の粉を入れ置きたれば、一同くさめをなす。(鷺)

ちやさんばい〔茶盞拜〕(狂言) 唐人茶盞拜といふ者を夫に持ちたる女、夫の言ふこと合點行かず。物識りを訪ひ、夫が日本人無心自我唐國妻戀と云ひて泣く次第を語れば、そなたを嫌ひ、唐國の妻が戀しとの事と云ふ。又泣きたる後、茶盞拜といふは如何にと問へば、好い茶酒も飲まず悲しとの事なりと云ふ。女腹立ち、歸宅して夫を馳走し機嫌を取るに、夫歌を謡ひ樂を舞ふ後にて、日本人無心……

と云ふ。女、最早勘忍ならぬ、出て行け。

ちやつぼ〔茶壺〕(狂言) 壺主、大醉して路傍に寝る。すり來り之を見、連尺の片方を懸けて己も寝る。壺主目覺めて争ひとなる。目代出で來り、批判を聞いて渡さんと、茶壺を預りて詮議す。壺主、ありし次第を語れば、すり亦同じ事を述べ、壺主、茶の銘、出所を舞に舞ひ謡へば、すり亦同じやうに舞ひ謡ふ。目代、決し兼ね、論ずる物は中を取るとて、茶壺を奪ひ去る。壺主追ふ。(三流)

ちゆうおさへ〔中抑へ〕(節) 剛吟中音にて謡ふ所に於て、その字を抑へて謡ふ節にて、一字抑へ、二字抑へ、三字抑へあり。多くサシ

又はカ、ルの中音の句末にあり。又クセの前段、中音の句中にもあり。柔吟に於ては、サシ又はカ、ルの中音の句末に稀に一字抑へあるも、二字抑へ、三字抑へは無し。

ちゆうおち〔中落チ〕(節) 柔吟の上音にて續けたる謡の、やがて中音にならんとする前に

多くある節にて、上音より中ノウキの音位に落すものなるが、その前字を必ず上ノウキまで浮かせて落すものとす。

ちゆうおとし〔中落シ〕「中落チ」に同じ。前項を見よ。

ぢゆうき〔重喜〕(狂言) 老僧、新發意に頭を剃らす。新發意、老僧に突き當りたれば、弟子は七尺去つて師の影を踏まぬものだと教へられ、竿の先に剃刀をくくりつけて頭を剃り老僧の鼻の先を剃り落す。(大、泉)

ちゆうぎん〔中吟〕 實生流にては、強吟、弱吟の外に中吟と云ふあり。強弱の中間の吟調なりとす。下懸三流にも中吟の稱あり。喜多流にては「シラコエ」の異稱。

ちゆうけい〔中啓〕(小道具) 扇の一種。親骨の中途より外方へ折れたる如き形にて、地紙の部分には銀杏葉の如く廣がる。故に又「末廣」とも稱す。

ちゆうざいらう〔中左右〕(型) 左右の型の一種。

左右と同じく左方へ三足出で、その三足目の左足をかけて、右方へ右左右左と四足出づ。「左右」の項参照。

ちゆうじやう〔中将〕(面)色白く、黛をつけ、殿上人の容貌をなせる面。清經、朝長、忠度、通盛、俊成忠度等公達物の後シテ、融、雲林院、小鹽、絃上、須磨源氏等の公卿物の後シテに用ふ。

ちゆうのみひ〔中之舞〕早き舞と静かなる舞との中間の位の舞。謂はゞ、序之舞より早くして其の上品さを減じ、男舞より静にして優味を含めたるもの。五段を正式とすれど、三段にも略演せらる。中之舞はカ、リの異なるものに「破掛り」「イロエ掛り」「達拜ガ、リ」の三様あり。囃子は笛を基とし、大小鼓之に和し、太鼓は之に加はると加はらざるとあり。大小鼓の中之舞——松風、熊野、草紙洗、雲雀山、紅葉狩、舟辨慶、水無月被等、シテは概ね通常の女性。

太鼓入の中之舞——吳服、右近、西王母、吉野天人、室君、胡蝶、繪馬等、シテは概ね女體の神靈。

ちゆうのみひ〔中之舞〕海人の小書(喜)、後シテ龍戴なく、天冠にて中之舞を舞ふ。追善能に演ずる替の型。

ちゆうのり〔中ノリ〕謡曲文八八調又は八七調の如き一句へ、八箇拍子を配分する拍子組織。之を「中ノリ」とも、「半ノリ」とも、「修羅ノリ」とも稱す。

ちゆうまはし〔中廻シ〕(節) 甲 剛吟、柔吟とも、中音の章にある廻シ節の一種にして、又此の節自體、音調が上りも下りもせず、中間のまゝに謡はる。されば「中廻シ」の「中」は音調に關する標示にして、「大廻シ」「小廻シ」に於ける如く、節の大小を意味するものにあらず。謡ひ方は「廻シ」の肩を浮かさず、末尾を下げず、たゞ生ミ字を大きく出し、うねらせて始と同調のまゝに謡ふものとす。但

し「中廻シ」が、柔吟のハリ又は上音の「廻シ」の前にある場合は、節の末尾を中ノウキに浮かせて、殆ど「振りウキ」の如き形に謡ふ。

ちよん〔チヨン△〕大鼓にて打音を表示する符號の一。大きく強く打ち「チヨン」と發する音。「頭」又は「甲」と稱す。

つうえん〔通圓〕(狂言) ワキ僧、次第、道行を謡うて、宇治橋に着き、茶屋に茶場を設けたる謂を尋ねれば、所の者、古へ通圓といふ茶屋坊主が茶を點死にしたる命日故、弔はられよと云ふ。僧の弔ひにより、通圓の靈、茶杓を腰に挿し、茶碗茶釜を持ちて幻の如く現れ、最後の有様を舞ひ謡ふ。謡曲頼政をもちりて、歌文を茶盡しに作りたる能がりの狂言なり。(三流)

つか〔塚〕(作物) 山と同じ作り方なり。これに引廻シを掛けて、後に外づすもの、錦木、求塚に用ふる如きと、緞子包にて形稍小さく上へ木の葉に造花の柳を交へ葺き、包布をはづさざるもの、角田川に用ふる如きとあり。
つきがねがしら〔撞鐘頭〕道成寺の鐘を祈り上ぐる前に、ワキ「何の恨か有明の、撞鐘こそ」

と謡ふ時、「有明の」と切りて暫し間を置き、さて「つきがね」と謡ふその「つ」にびたりと當て、太鼓「天」と打出すこと、之を「撞鐘頭」と稱して、太鼓方の祕事とす。シテ、ワキ、太鼓方とも、家元揃ひならでは演ぜず。

つきぜりふ〔着詞〕道行又は道行に相當せる上歌の類の謡終りて、「何々に着きて候」など陳ぶる詞の稱。諸流共にシテ方謡本には此の詞を記さざるもの多けれども、ワキ方に於ては、實演上大抵謡ふ定めなり。

つきのあふぎ〔月ノ扇〕(型) 開きたる扇の左のツマを左の肩にあて、右の方を見渡す型。又この型を流儀によりては「左へ扇ヲ肩ニ受ケル」と云ふ。

つきぶし〔突キ節〕(節) 寶生流に限りてあり。強吟中の下音のなかに、抑揚をつくる爲置かれたる節。

つきみざと〔月見座頭〕(狂言) 下京の勾當、名月の夜、野へ出で、蟲の聲を聴いて楽しむ。

とするが如し。而して、置き据うる組立物はすべて作物にて、其の形は悉く象徴的なり。又手道具の中にも、形の象徴的なるもの、能の都度々々作るもの、即ち一度使用して棄つるもの、材料の粗末なるもの、此等は皆作物に屬す。

つくりものだし〔作物出〕小書の名。常には作物無きを小書附にて出すもの。高砂、松の立木を出し、吳服、機臺を出す。(寶生)

つけしふげん〔附祝言〕祝言能の略式として、切能終りたる後、地謡のみにて謡ふ祝言小謡を云ふ。現今は高砂のキリ「千秋樂には民を撫で……」を多く専用す。

つしままつり〔對馬祭〕(狂言) 「千鳥」の古名。「千鳥」を見よ。

つたかづら〔葛蔓〕(作物) 定家の作物、塚の上及び柱に巻き附くる造花の蔦。

つち〔鎚〕(小道具) 刀を鍛ふる槌の形に擬したるもの。小鍛冶の後シテ、ワキ共に使用する。

上京の者、月見に來り、一所に落合ひ、酒盛をなし、上京の者、座頭を弄る。(大、驚)

つくし〔土筆〕(狂言) 「歌相撲」の一名。其項を見よ。大藏にては「土筆」、泉、鷺にては「歌争」。

つくしのおく〔筑紫奥〕(狂言) 筑紫の百姓と丹波の百姓と道連れになり、同時に上堂に上納して、笑つて歸れと云はれ、筑紫は小作一反の笑をし、丹波は一反半の笑をして上首尾。(三流)

つくすま〔ツクス間〕(拍子) 「ヤヲハの間」の異稱。諸種の間合のうちにて最も長く、間拍子を盡くすとの意なり。

つくりもの〔作物〕能の舞臺に於ては、芝居の如き背景を作らず、又大道具を飾りつくる如き装置をなすこと無し。たゞ、時として其の景趣を暗示せんが爲に、象徴的の簡單なる装置をなすに過ぎず。之を「作物」と稱し、竹を曲げて舟の形を作り、四本の柱を立て、家

つちぐも〔土蜘蛛〕(謡曲) 五番目。シテ土蜘蛛の精、ツレ侍女胡蝶、ツレ源頼光、トモ頼光從者、ワキ頼光郎等、ワキツレ同郎等數人。葛城山に年を経し土蜘蛛の精、頼光を惱ましたるが、一日、頼光、名刀膝丸にて之を斬りつけたるに、怪物傷を負ひて逃げ去る。郎等血の滴りに従うて、その栖所を知り、遂に之を退治す。(六流)

つちぐるま〔土車〕(謡曲) 四番目。シテ傳小次郎、子方深草少將の子息、ワキ僧(深草少將) 狂言如來堂々守。忠僕小次郎、遁世したる深草少將の跡を追ひ、若君を土車に乗せて諸國を廻り、謡ひ狂ひてさまよふ内、善光寺にて尋ぬる少將に廻り逢ふ。(觀、喜、梅)

つちぐるま〔土車〕(作物) 梓を車臺の形に組み、車輪を四つ取りつけ、紅段の引綱を結びたるもの。土車の曲に用ふ。

つづけ〔ツツケ〕大小鼓のいづれにもありて、「三地」の手と相對し、囃子の手の基本たるも

の。打つ箇所によりて手配幾分異なれり。大鼓にては、「ヌクツツケ」(地ノツツケ)、「ツツケ」(ツツケ打ツメ)、「ツツケ扣へ」(頭ツツケ)、「ツツケノベ」等。小鼓にては、「ツツケ」、「甲ツツケ」、「ツツケ扣」、「ツツケ中切」、「ツツケノベ」等、諸種の細別あり。

つづけうちきり (ツツケ打切) (拍子) 「アシラヒ打切」の別稱。「笠の打切」とも云ふ。其項参照。

つづみのだん (鼓之段) 籠太鼓の「鼓の聲も時過ぎて」以下の一段。一調謠五曲の一として小鼓にては習物なり。又仕舞、獨吟にも用ふ。

つづみばな (包花) (作物手道具) 種々の草花を束ね、奉書紙を大きく熨斗形に折りて、その莖束を包めるもの。依つて又「熨斗包」と稱す。觀世の雲雀山に「挟み花」の替として用ふ。

つとやまぶし (菴山伏) (狂言) 山伏、大峰葛

城の下向道にて、涼みがてら木の下に寝る。柴刈亦來りて茲に休み寝る。村人來り、柴刈の晝食(辨當)を持てるを見て、之を盗み食ひ、山伏の口の邊に飯粒をつけて置く。柴刈目覺めて晝食の盗まれたるを知り、村人の所爲ならんと詰れば、山伏ならんと云ひぬけす。山伏を起し、口邊に飯粒のつき居るを證として詰る。山伏、食はぬ飯が髯につくと云ふ事、法力を以て祈り出さんと祈れば、逃げんとする村人狂ひ出す。(泉、鷺)

つな (綱) (謡曲) 「羅生門」の別稱。

つねまさ (經政) (謡曲) 二番目。シテ平經正の靈、ワキ行慶法師。經正、幼少より仁和寺守覺法親王の寵を蒙り、青山と云ふ琵琶を賜はりぬたるが、平家一門都落の時之を返上し、やがて戰死せり。此の曲は仁和寺御室御所にて、經正の冥福を祈り、彼の琵琶を手向けて法事せられしに、彼の幽靈現れて之を彈じたることを作る。(六流)

つぼをり (壺折) 上衣の着用法。長き上衣を腰

の所にて絡^カげて着ること。壺折の時は必ず下に大口又は腰卷のいづれかあり。其の衣類は唐織、厚板、白練又は舞衣などを用ふ。大口に唐織を壺折にするものは、狸々、住吉詣、楊貴妃のシテ、巴、江口、草紙洗の後シテ等。

唐織又は厚板を半切の上に壺折するものは、大江山の前シテ、山姥の後シテの如きもの。腰卷の上に壺折にするもの、道成寺、葛城等は唐織を、富士太鼓、梅枝は舞衣を用ふ。

つまぎ (爪木、妻木) (作物) 萩の枝數本を短く切り揃へ、水糸にて束ね、蕨を數本添へたるもの、大原御幸のツレ、手に提げて後に出づ。

つまみあふぎ (摘ミ扇) (型) 開きたる扇の親骨の中程を、親指と人指指とにてつまむやうに持ち替へ、立てるやうに眞前へ出す。摘ミ扇は、右手にてすることも、左手にてすることもあり。左右何れの手にても、扇を持

ちかへる時、親骨の次の一骨だけは折り込むものなり。

つめあし (詰足) (型) 又「ツメル」とも云ふ。

一二歩前へ出る一種の動作。現に作物又はワキに向き居りて、眞直に詰足する場合は、其方へ左足右足と二足出づ。又左右何れへか詰足する場合、左の時は、右足をカケ(カケルは他の足先へ弧形に出すこと)て左へ向き、左足右足と出づ。又右の時は、前と反對に左足をカケて右へ向き、左足右足と出づ。詰足は二足を普通とすれど、時として三足のこともあり。

つめる (詰メル) (型) 「詰足」をすること。前項を見よ。

つめる (促メル) 謠の文句の字音を促めて謠ふこと。「佛力」「國家」を「ブツリキ」「コクカ」と云はずして、「ブツリキ」「コツカ」と謠ふが如し。

つよぎん (強吟) 「がらぎん」を見よ。

つりぎつね〔釣狐〕（狂言）古狐、獵師が狐の一族を釣り平ぐるにより、之を思ひ止まらしめんと、獵師の伯父僧白藏主に化けて行き、狐の執心深きことを物語りて意見す。獵師が之を諾するを喜び、尙望みて良を見、之をも捨てよと命ず。獵師、河へ流したりと偽り、窃に良を張る。狐、喜び歸る途上、良の餌の香に心惹かれ、一旦は古巢に歸りしも諦められず、再び出で來りて之に戯れ、飛び越し飛びかゝりなどするうち、遂に良にかゝる。狐くわい／＼と鳴きて逃げ、獵師之を追ひ込む。（三流）驚流にては「こんくわい」

つりざを〔釣竿〕（作物手道具）竹竿の先に長き白の撚り紐を結びつけたるもの。白樂天白髭、竹生鳥、八島、阿漕等の前シテ、羽衣のワキ、國栖の前ツレ等使用す。

つりばり〔釣針〕（狂言）「釣女」を見よ。

つりばり〔釣針〕（小道具）平打金又は木に銀色を塗り、釣針の形に擬したるもの。玉井に

用ふ。

つりまなこ〔釣眼〕（面）黒髭、飛出の類。それらと用途同じ。

つりをんな〔釣女〕（狂言）殿、冠者を連れ、西の宮の惠比須三郎へ參り、好き妻を得んことを祈り、二夜三日參籠する内、西門の一の石階へ行けとの夢告あり。西門へ行けば果して釣棹あり、之にて女を釣れとのことならんと、殿、まづ釣りにて美女を得たる故、冠者も妻欲しくなり、件の釣竿を借り受けて釣るに醜女なり。又釣れども、醜女にて大勢出で、冠者、醜女共に追はれて逃ぐ。（三流）古名「釣針」

つるかめ〔鶴龜〕（謡曲）脇能。シテ皇帝、ツレ鶴、同龜、ワキ大臣。月宮殿に於て鶴と龜とを舞はしめたることを作る。（六流）

つれ〔ツレ、連〕シテ、ワキ、子方以外の各役を演ずるものを「ツレ」と云ふ。而して、其のシテ方に屬するものを「シテツレ」、ワキ方

に屬するものを「ワキツレ」と稱す。昔は「シテツレ」の當て字を「佑」、ワキツレの當て字を「屬」と書きたり。

つゑ〔杖〕（作物手道具）細き竹の杖にて、老人、盲人、亡者、之を突きて出づ。老人杖は三老女、卒都婆、攝待、其他特殊の前シテ尉數曲。盲杖は景清、弱法師。亡者杖は藤戸、善知鳥、砧の後シテなど使用す。

つゑのかた〔杖之型〕西行櫻の小書（剛）、舞は眞之序之舞となり、初段までにて終り、更に後に立廻りあり。

つゑのみひ〔杖之舞〕西行櫻の小書（觀、梅）、杖をつきて舞を舞ふ。同じく遊行柳の小書（觀、梅）、「青柳之舞」の別名。其項參照。

つんぼざとら〔壘座頭〕（狂言）今、大藏にては「不聞座頭」泉、驚にては「不見不聞」。「みずきかず」を見よ。

て〔手〕（囃）大小太鼓笛の四拍子いづれもに於て、その囃す定まりの奏法の各部分、一つ／＼の總稱。大小太鼓にては「手配」とも云ふ。この手を種々様々繋ぎ連ねて一曲の囃子をなす。又「特殊なる手」といふことの略。某々の謡所には、手がある、手が多いなど云ふが如し。

て〔手〕（囃）太鼓には別に「手」と稱する固有の手配あり。常の早笛の中などに打つもの、此の「手」のなき早笛を「ハシリ」と云ふ。なほ「手がカリ」の項參照。

ていか〔定家〕（謡曲）三番目。シテ式子内親王の靈、ワキ旅僧。旅僧、時雨の夕、時雨の亭に休らひゐたるに、式子内親王の亡靈現はれ、昔定家卿と契りたるに、死後定家の執心、葛となりて、墓石に這ひ纏ひ、妄執晴れ難き

を語り、僧の巾を受けて成佛せり。(六流)

でいがん〔泥眼〕(面) 眼に銀泥を塗り、口許に異様の表情ありて、凄味を含める女面。各流とも葵上、鐵輪の前、海人の後などに用ふ。流儀によりて砧にも用ふ。

でいくろひげ〔泥黒髭〕(面) 黒髭の特種にて、金泥を塗れるもの(常のは赭色)。恰も大飛出を黒髭型に作りたるが如し。春日龍神の後などに用ふ。

でいことびて〔泥小飛出〕(面) 金泥を塗りたる小飛出の面。觀世にては、殺生石、小鍛冶等に用ひ、寶生にては、竹生島、春日龍神、和布刈、九世戸、岩船、大蛇等に用ふ。

でいちや〔泥蛇〕(面) 般若型を一層怖ろしくしたる蛇面にて、金泥塗。觀世にて道成寺に用ふることあり。

てうぶくそが〔調伏會我〕(謡曲) 四番目。前シテ工藤祐經、ツレ頼朝、ツレ大名數名、後シテ不動明王、子方箱王丸、ワキ箱根別當、

ワキヅレ伴僧數名、狂言能力。箱根の別當、工藤祐經の振舞を惡み、箱王を憐みて、工藤の形代を作り、不動明王を請じて調伏の祈をなす。(寶、剛、喜)

ておひやまだち〔手負山賊〕(狂言) 美濃赤坂の山賊、通りがりの僧を長刀もて脅かし、

丸裸にす。僧命を助けられし御恩にとて、按摩をし、隠し持てる剃刀にて山賊の咽喉を掻き切り、谷へ落す。やがて僧或る家にたどりつき、強ひて宿を請ふ。山賊歸りて、坊主に

だまされ怪我せりと云ふ。女、幸ひ出家に宿貸したり、念佛して貰はんと連れ來れば、最前の坊主なり、二人打殺さうと追ふ。

てがかり〔手掛り〕(囃) 太鼓の手配のうち、特殊なる「手」と稱する手を囃子事の打出初部に打つこと。即ち常には囃子事の途中にあるべきものなり。例へば舟辨慶を小書能とする時、早笛が「手ガカリ」となるの類なり。

てがかり〔手掛り〕唐船の小書(觀)、樂のかゝ

り、常と替りて、太鼓の特殊なる「手」より打ち始むるもの、シテの型も替る。

てかご〔手籠〕(小道具) 竹にて編みたる籠に、

提げ手をつけたるもの。求塚の前シテ及び前ツレ、大原御幸の後シテなどに用ふ。限定しては、籠の中に花など入れてなきものを指し

同じ手籠にても、花入り居れば「花籠」、早苗を入れてあれば「早苗籠」と云ひ別く。併し手つきの提籠ならば、中に草花の有無に拘らず「手籠」と總稱もす。

では〔出端〕(囃) 後場にのみある登場囃子にて、其の出役もシテ又はツレに限らる。大小

太鼓にて囃し、笛之に和す。一聲の囃子に似て太鼓加はるを以て、「太鼓ノ一聲」とも稱す。シテには神體多きも、人間鬼畜等男女性様々にて、ツレは概ね神女天女の類なり。囃子の

後の謡の種別によりて、謡出方異なり、随つて囃子終りの手も亦異なる。従つて之に「出端コイ合」「出端謡掛」「出端打上打返」の別

て

あり。又出端より引續き早笛となる特殊なるものを「出端早笛」と云ふ。

てる〔照ル〕(型) 面の仰向き加減になるを「照ル」と云ひ、然かすることを「照ラス」と云

ふ。月を見、山を見る場合などにす。「照ル」は「曇ル」の反對。

てんぐぞろひ〔天狗揃〕鞍馬天狗の小書(寶)。

後に天狗數人、同裝束にて出場す。

てんぐもの〔天狗物〕シテが天狗なる曲の總稱。鞍馬天狗、大會、善界、車僧、松山天狗(剛)等。

てんぐらいじよ〔天狗來序〕天狗物のシテの中

入を送る來序囃子の特稱。「來序中入」参照。**てんぐわん**〔天冠〕(裝束) 女神、天女、宮女等の被る物にて、金に雲形或は唐草模様の透し彫ある輪狀の冠。簪あり、纓絡左右に垂

る。中央に新月の立物あるを普通とす。羽衣(天人)、龍田(女神)、楊貴妃(宮女)皆之を用ふ。又ツレの天女、宮女として竹生島、加

茂、昭君等も之を用ふ。替の型の場合には、羽衣の鳳凰、白蓮花を立物に用ふる如き替もあり。

てんこ〔天鼓〕(謡曲) 四番目。前シテ王伯、後シテ天鼓の靈、ワキ後漢帝の臣下。王伯王母といふ夫婦、夢中に天より鼓降り下ると見て一子を擧げ、天鼓と名づけ育てしが、後、天より眞の鼓降り下る。帝此事を聴き、其の鼓を召されたるに、天鼓悲み呂水に投じて死す。其後、帝かの鼓を打たせらるゝも更に鳴らず。依つて王伯を召して打たしむるに、始めて音を發す。帝哀に思し、呂水に行幸ありて、管絃講を以て天鼓を弔ひ給ふ。天鼓の亡靈、弔を喜びて現れ、彼の鼓を打つて舞ふ。(六流)

てんじん〔天神〕(面) 緒ら顔にて肉附きたる強き面。大天神と小天神との二種あり。大天神は、淡路、藍染川、金札の後など専らシテに用ひ、小天神は舍利の章駄天、大會の帝釋

天、輪藏の火天、第六天の素盞鳴命などのツレに用ふ。

てんちじんのひやうし〔天地人ノ拍子〕「翁」の舞の中にて、目附柱へ行き、上を見る心にて拍子三ツ、次に脇柱へ行き、下を見る心にて拍子三ツ、次に左へ廻り、大小前より正面へ出で、扇を面に當て、一つ廻り、袖巻き上げて直におろし、又拍子三つ踏む。之を「天地人ノ拍子」と特稱す。「翁ノ舞」参照。

てんちのこゑ〔天地ノ聲〕國栖の小書(觀)、後シテの謡出に習あり、即ち幕内にて謡ひ、「即ち姿を」と走り出づ。野守の小書(觀、梅)、後シテの幕内謡出し國栖に同じく、習なり。此の小書は黒頭の小書に併記せらるゝこと多し。

てんとう〔天燈〕(小道具) 皿の中央に赤毛を植ゑ、灯明に擬したるもの。白髭の天女持ち出づ。

てんによのまひ〔天女之舞〕ツレ天女の舞、常

に太鼓入り中之舞三段にて、かゝりに達拜あること、他の三段之舞と異なるのみ。竹生島、加茂、玉井、和布刈、道明寺、難波、氷室等にあり。
てんにんぞろひ〔天人揃〕吉野天人の小書(觀、梅)、後に五人或は七人のツレ天人出で、相舞を舞ふ。

どう〔同〕「同音」「同吟」の略。一曲の最初にある歌地の謡を「初同」、第二にあるものを「二ノ同」、第三にあるものを「三ノ同」と稱するが如し。なほ「地」の項参照。

とうえい〔藤榮〕(謡曲) 四番目。シテ蘆屋の藤榮、ツレ藤榮従者、ツレ鹽屋の主(月若の臣)、ツレ鳴尾某、ツレ鳴尾家人、子方月若(元地頭家俊の息)、ワキ最明寺時頼、狂言鳴尾下人。最明寺入道、行脚の途次、蘆屋の里にて、叔父藤榮に所領を奪はれたる月若に遇ひ、其の所領を返し與ふことを作る。(春、寶、剛、喜)

どうおん〔同音〕一曲中、シテ、ワキ等の各役以外に、地謡方の數人が同音連吟する歌地を云ふ。故に又「同吟」とも稱し、略して「同」と云ふ。